

---

# コードギアス LOST MEMORYS

ナナミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コードギアス LOST MEMORYS

### 【Nコード】

N9042P

### 【作者名】

ナナミ

### 【あらすじ】

神根島で眠りにつく「彼」。

すべての人間に忘れ去られたはずだが、「彼」を起こす存在がいた。それは「コード」をもつもの。

自らの願いをかなえるため「コード」をもつものは「彼」を呼び起こす。

「彼」が再び起き、彼らの物語が始まる…

彼が…彼らが起こす行動は、世界を変えることができるのか…

彼らが、世界に変えられてしまうのか…

それは、物語を見ているあなたが決めること…

- - - - -

もしも、「コードギアス反逆のルルーシュLOST COLORS」  
の2作目が発売されるのであれば、こんな感じで始まるのではない  
かなと思って書き始めた作品です。

LOST COLORSをすでにプレイしていることを前提で記述  
されますのでご了承ください。

## ライ君の紹介（前書き）

一応、ライ君を知らない人のための説明書き…かな…

あまり役に立たないけど…

## ライ君の紹介

本作の主人公

ライ

性別：

男性

外見：

ルルーシュやスザクと同年代

体のラインが細く、ルルーシュの制服のあっさりと着こなす。

頭髪はくすんだ銀のような髪をしている。

中性的な顔立ちをしており、かなりの美人である。

体力：

体のラインは細いがその体に秘める力は、スザクに勝るとも劣らない。

かなりのKMFの操縦技術を持っており、彼と対峙した敵はまるで亡霊と戦っているかのように感じる。

智力：

非常に優秀

アッシュフォード学園での授業などでは困ったことはない。

戦闘のための戦術や戦略にも通じており、

ブラックリベリオン前の黒の騎士団では作戦補佐の地位についていた。

ギアス：

ルルーシュと同じく『絶対順守』のギアス。  
しかし、視覚を介してではなく、聴覚を介するギアスである。

出生：

ブリタニアの皇帝の父と日本の皇族の母を持つハーフ  
しかし、現代の人間ではなく、100年前以上の人間である。

皇帝である父が、母と妹を大事にしていなかったため、  
腹違いの兄たちから、母と妹を守るためにギアスを得て、父と異母  
兄弟を殺し皇帝となった。

その後も、母と妹を守るために国を強化していくが、その過程の中で  
使いすぎたギアスが暴走。

暴走したギアスにより、母と妹、国民のすべてに、戦えと命じ、す  
べてを失う。

その後、自らに『全てを忘れる』とギアスを掛け、神根島で眠りに  
就く。

現代になってバトラーに発見されC・Cと同じ研究所で様々な実  
験を施され、

その際に身体能力の強化を受け、KMFの知識等を植え付けられた  
研究所を逃げ出しアッシュフォード学園に逃げ込む。

実験の影響が起こされてからの記憶もあいまいで、記憶喪失に…  
記憶喪失のために生徒会会長のミレイに保護され、

記憶が戻るまでの間仮入学として学園での生活を送ることになる。

続きは『コードギアス反逆のルルーシュ LOST COLORS』  
で…

## 忘れやすい設定（前書き）

この小説の忘れやすい設定を描いておきます。

別に読まなくても大丈夫だと思いますので、読みたい方だけどうぞ。

## 忘れやすい設定

氏名：ライ・シルバ

シルバは偽名であり、皇帝あるいはV・V・がつけたものと思われる。

地位：Knight Of Phantom

円卓の騎士としての12人ではなく、亡霊としてラウンズに加入

服装：ラウンズ礼装（黒）

Knight Of Phantomという名のためか、通常のラウンズ礼装の白ではなく、黒色のラウンズ礼装になっている。また、マントも黒で作られている。

ライ自身の銀髪をあいまってそのコントラストが際立っている。また、ライは任務中や勤務中は常にフレームー体型のサングラスをかけている。

理由としては、皇帝陛下の命であること。

アーニャが外に出るときは掛けてとライに進言していること。の2つがあげられる。

KMF：クロウ・クルワツハ

LOST COLORSに描かれるランスロットクラブを



ベースに次世代機の装備を搭載した試験機的扱いの機体。

青と白のカラーリングをしており、ランスロットと並ぶと兄弟機であることがよく分かる。

コックピットの側面部に特殊パーツがマウントされている。

特殊パーツ、吸血鬼が就寝するとき用いる棺桶のような形をバイ  
ンダ

4枚のバインダ がおりこまれている。

左右共に展開してエナジーウィングを展開することができる。

また1枚のバインダーには2本のMSVが格納されている。

格納されているMSVを射出して攻撃することも可能。

MSVにはブラスターが搭載されており、簡易的な操作が可能。

しかし、操作者射出する前に行うため高い状況判断力が必要。

武装は、両ひざに、複写波動機構を起用したニードルブレイズが搭載されている。

遠距離武器としては、ヴァリス改修型を装備している。

ギアス：

? 絶対遵守

? 不明

## 00話（前書き）

コードギアス 反逆のルルーシュ LOST COLORSの二次創作です。

舞台はR2の背景をベースとし、もし、LOST COLORSの主人公が物語に介入したらどのようなになるのか？と私が想像（独自解釈、捏造設定満載）したものです。

以前に書いていて、HDのなかに埋もれていたものを発見しました。完結していません。そして、私に文才は皆無です。それでもよろしければどうぞ。

## 00話

「ん……こ、此処は……何処だ?!」

僕は確か…神根島で眠りについたらはずだ。

しかし、此処は神根島の遺跡とは明らかに様子が違い、コンピュータ類の端末などの文化的な様式が見て取れる。

「僕は、また……目覚めた…のか……」

「やあ、やっと起きたね」

まだ幼い声だったが、不思議な感覚を思わせる声だった。咄嗟に身構えようとするが、僕の体は拘束されていた。

「クツ、何だこれは!! お前は誰だ?! 今は何年だ? それに……此処は何処だ!!」

「フフ…質問が多いね。君は拘束されている。

僕はV・V。今はa・t・b2017年。此処はブリタニア本国。」

これで、いいかな?」

「ブイ…ツ…2017年だと、ブリタニア本国?

僕が眠りについてから1年もたっていない?!」

何故僕がブリタニア本国にいる?!」

「やれやれ、また質問かい? でもいいよ、答えてあげる」

その後、僕はV・Vの説明を受けた。勿論拘束されたまま、現状は以下の通り、

V・VはC・Cと同じギアスを与えることのできる不死者。

V・Vはギアスを研究していること。

V・Vは僕のことをある程度知っていて、僕が

ブリタニアの国はそのものである狂王であったこと。

記憶喪失のときアツシユフォード学園に仮入学していたこと。

黒の騎士団に所属し蒼い機体を駆って部隊を指揮していたこと。

自分が死にたくても死ねない契約のもとにギアスを手にいれたこと。

V・Vは僕が神根島にいたと後々問題が生じる可能性が高いと考えている。

ゆえにV・Vは僕をこの世界に呼び起し、利用するために、今後の活動に都合のいい場所であるブリタニアに連れ、勝手に動かれると困るから拘束したらしい。

「ふざけるな、それで僕が易々と協力すると思ったのか？！

僕に『死』に対する脅しは効かない。」

「知ってるよ。だから契約するのさギアスを…ね」

ニイッと笑うその笑みは不気味で不快だった。

「それこそふざけるな！！僕はすでにギアスを持っている。

それにギアスの契約は同意の上で行われるはずだ！！」

V・Vは不敵に笑いドアの方を指をさした。

その方向にはV・Vよりも幼い虚ろな瞳をした少女が立っていた。

「彼女が何だと言うんだ?! まさか…」

「そつだよギアスだよ」

「僕と同じ『絶対遵守』のギアスか?!」

「半分だけ正解。それじゃあ不完全だよ。

彼女の力は『契約』を結び、それを遵守させる力。」

「なっ!?!?!?」

「だけど、対象者に触れなくちゃいけないし、相手の意識がある時のみで

自らもその『契約』に従い守らなければならない、欠陥品だけだね」

「欠陥…品…?」

「まあいい、じゃあ契約を始めようか。おい来いY-0862」

「……はい……」

どうする?! 彼女が僕に触れるな前にこの状況を打開しないと、かといって僕は今身動きできない。僕は既にギアスを持っているがV・Vの

あの自信は何処から出て来るのか分からない…しかしあの様子からギアスは

一人に一つとはかぎらないのかもしれない…この状況はまずいだけ

ど…

状況の把握が追いつかない!!!

……ギアスしかないのか!!!

「ライが命じる。僕にギアスを使うな!」

「はい……」

「アツハハ、やっぱり君のギアスは便利だね。」

V・Vはそう言い僕から離れ端末の方へ歩いて行き、誰かと通信をしているようだ。

通信がすんだのか、V・Vはこちらを向き

「さあ、契約の確認をしようか。僕は君にギアスを与える。

君は…「待て!」何だい? 話の腰を折って」

「僕はすでにギアスを持っている。

それに彼女は僕にギアスを使うことはできない。

他のギアスも僕に掛けさせない。」

僕の意味を誇示して、さらには新たな情報を得るための布石も打っておく…

「フフ、ジェレミアが来るまで時間もあるし、説明してあげるよ。」

「これ以上何を?!」

乗ってきた…

「一人が持てるギアスは一人一つとは限らない。  
それと、僕はギアスを研究した結果ギアスキャンセラーを得た。」

短い回答だったが十分すぎる内用だ…

僕が口を開こうとした時、ドアの扉が開き…

「ジェレミア・ゴットバルト只今此処に!！」

ドアから現れた男は左目のみにマスクのようなものがつけている。

「来たね。早速だけどこの子のギアスを…」

「はっ 只今!！」

隠されていた彼の瞳が現れた僕の瞳と同じ色であったが、彼の瞳は蒼く輝いていた。

僕は何が起きたのか分からず困惑している矢先に…

「さあ、契約を始めようか… Y - 0862 来い」

「待て! 彼女は「はい…」 なっ… そんなまさか!！」

Y - 0862 と呼ばれた少女は僕の拘束されている右腕に触れ、

V・V の方へもう一方の手を差し出した。V・V はその手に触れた。

「始めます。」少女そう言った瞬間に少女の左目が怪しい赤色に染まった。

「僕は君にギアスを与える。そして君はその契約に従い……………」

そこからの記憶は僕にはない。

唯…苦しかった。全身が熱く今にも僕の肉体が燃え尽きそうなくらい。

そして苦しいながらも、僕のギアスが暴走している感覚が分かる。

そして、僕であって僕でないもう一人の僕が…私が…。



## 01話(前書き)

場面が一気に変わります。

また本文中の でキャラクターの視点が変化します。

誰に変わるのかは見極めてください・・・

お願いします。

## 01話

僕は、今エリア11にいる。なぜこんな事になったのだろう…  
いや、わかっている。そんなことはわかりきっている…

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

目が覚めたら、僕の拘束は解かれベットの上で寝ていたようだ。  
そこは先ほどとは違う部屋のようでコンピュータ類の端末がなく、  
僕のいるベットの反対側に机が一つ。その上には何か乗っているよ  
うだ。

確認するためにベットから立ち上がり机に近寄る。

「…指令書？」

要約すると…

- ・ 黒の騎士団の所有する蒼い月下の奪取。
- ・ 支援無の単独での機密任務。
- ・ 行動はすべて一任され自己責任を負う。

ふざけるな！

僕は部屋から廊下へ出て、丁度その場にいた者に詰め寄る。

「僕をV・Vのところへ連れて行け！」

「なっ何だ貴様は?!」

僕の中のあるスイッチが入った。

「いいから、私をV・Vのところへ案内しろと言っている!」

「…分かりました。こちらです。」

・

・

・

・

・

・

・

「V・V…どういことだ!これは?!」

「貴様?! 嚮主様に無礼な!」

「黙れ、貴様らは私の邪魔をするな!」

「「「…はい」「」」

「フッフ、さすがは狂王だね」

「…どういことだと聞いている!」

「…どういこととも何も、」

君の愛機を取りに行ってもらおうと思っね。」



「酷いものだな」

・ブラックリベリオン - そう呼ばれた事件から1ヶ月。まだ、復旧は完全ではないようだ。

黒の騎士団の状況もある程度は調べ上げた。

・指令のゼロはスザクに捕えられ本国で刑が執行された。そして、スザクはその功績でラウンズとなった。

・騎士団の所要メンバーの大勢が捕えられ投獄されている。刑の執行予定はない。むしろ皇帝が止めているように思える。

・つまり黒の騎士団は事実上、崩壊状態にある。だが残ったメンバーが活動を続けているようだ。

・活動の内容は……黒の騎士団らしくないものだが

・その中に紅蓮、月下が1機、無頼が数機確認されている。

僕はため息を吐いた。

「嘘の情報に踊らされすぎだ。」

良くこれで、生き残れているものだと思う。

「だったら、これを利用して向こうから接触してもらおうとするか、そうすると前準備は……」

「カレン、新たな情報だ。」

私たちが一時的にアジトにしているこの場所…  
そのラウンジにト部さんが駆け込んでくる…  
ト部さんの情報は偽りのモノが多いけれども真実のモノも少なからずある…

「どんな情報ですか？ ト部さん…」

聞いてからでも判断はできる。そう思うから毎回聞く…  
だけどいつもその情報の真偽が計れない、だから作戦を練り行動に移す。  
故にそのつど危険な状況に会う…

「捕えられている仲間が何人かブリタニアに送還されるらしい。」

「そんな、まさか?!」

植民地で捕えられたテロリスト…犯罪者が本国へ連れてかれる理由として

考えられるのは処刑…つまり殺される。

「考えたくはないが刑の執行の可能性が大きい。」

「……」

このときこの情報の真偽のことは完全に失念していた。  
仲間の命がかかっているのだから当然と言えば当然なのだが…

「ただし、一般の輸送車に偽装して秘密裏に行われるらしい。」

故に目立つ護衛はない、そしてこのルートを通ることまでは調べ上げた。」

「ト部さん、このルートならー!」

秘密裏に行くことは可能性としてはないことはないが護送ないことは明らかに

おかしいことだ。だがそこに考えは浮かばなかった。

ト部さんが提示した送還ルートは私たちが有利な地形であり、逃走も容易に可能だ。

「ああ、救出が可能だ。決行は明日だ準備しておけ。」

仲間の奪還…必ず成功させる。来るべき日のために…

・

・

・

・

・

・

…後日作戦終了後アジトで…

「アナタ何者？」

私たちはト部さんの手に入れた情報をもとに仲間を救出したはずだ。なのに!!! 目の前にいるのは知らない男、唯一人。

その男の線は細い、しかし唯痩せているのではなく引き締まった体をしていた。

髪の色はくすんだ銀、雲一つないきれいな空のを思わせる蒼い瞳。

知らないはずなのにどこか懐かしい感じがする。

「僕の名前はライ、アナタ達を救った人間…かな…」

名をライと名乗った男はこの状況をまったく驚いていない。

いや、予定調和と言った様子をしている。理解できない言葉を発し…

「『救った』？ 何を言っている？

状況から見れば我々がお前を救出した!!」

その通りだ。私たちが襲ったのは一般輸送車に偽装されたブリタニア行きの

トラック…差し詰め死の車といったところか…

「そうよ。アナタはブリタニア送還されるはずだったところを私たちが…」

「それは僕が流した嘘の情報。

騎士団メンバーをブリタニア本国に送還する計画は元からない。」

男はまたしても理解ができない言葉を発する…分からない…

「それが本当だとして、何のために？」

「黒の騎士団と接触したかったんで…」

要領を得ない彼の言葉が全て…

「アンタ、ブリタニア人だろ？」

誰もが気にしていたことをト部さんが問う…



「……………否定も肯定も僕には出来ないよ。」

男は数秒沈黙していたがそう答えた…

「どづいつことよ?」

私の素直な気持ちを言葉にする。他にも知りたいことはあるが今はこの問の

答えが欲しい…彼からは懐かしい不思議な感覚がある。

「僕は日本人とブリタニア人のハーフだ。

気になるなら、拘束でもして血液検査でもすればいい。抵抗はない。」

彼の言葉が信じられない…私たちと接触するために嘘の情報を流し、私たちの前に現れ何かをする様子もない…拘束されることも気にしない…

「どうします? ト部さん。」

私では判断がつかない…此処はト部さんの意見を聞かなければそう感じた…

「検査も拘束も必要ないだろう。」

「ト部さん?!」

私の思惑は外れた…てつきり拘束して血液検査をするのだろうと考えていた…

そう言われれば私も心も決まるそう考えていたが…  
ト部さんの考えていることが分からなくなった…混乱するばかりで  
話が進まない

「彼は日本人と言った。そして、ブリタニアより先に日本の名を出  
した。」

これだけでも十分に俺たちに敵対の意思がないことはわかる。  
それに、彼からは何故か懐かしい不思議な感覚がある。」

「しかし!!」

「なら、彼のことは紅月に任せるよ。」

彼の決定権をすべて任されてしまった…まったく状況が分からない  
のに…

とりあえず状況を把握しないと…彼が何者なのか、目的は…

「…分かりました。それで、

アナタ何のために私たちに接触しに来たの？」

「君たちは嘘の情報に踊らされすぎだ。これでは、いずれ殲滅され  
るぞ。」

自分たちでも気付いている…彼はそんなことを言うために接触した  
のか?!

「余計な御世話よ。悪いけどアナタは信用できない。拘束させても  
らうわ」

気に食わない。部外者である彼にそんなことを言われるのは…

他にも聞きたいことはあるが彼の言葉に興奮してしまつて思考が働かない…

「かまわないよ。」

彼の救出に丸ごと奪つてきたコンテナを牢代わりに拘束した。

無論発信器類の機器がないことを確認してから。

彼は抵抗することなく大人しく身体検査を受け、素直に拘束された。

・

・

・

・

・

・

拘束後…調べた…その結果…何も分からなかった。何もかも、何一つも…

血液検査を行えば何かわかるかもしれないが今の私たちにそんなことを

出来るコネや機器などもない…私は彼に会いに行つた。

何かわかるかもしれない…彼に感じた懐かしい不思議な感覚が…

一縷の望みを込めて…

「アナタ何者？」

突然現れた私に彼は驚くでもなく平然として答える。そしてその答えは…

「協力者…かな…今は…」

最後の方は聞き取れなかったが彼は確かに『協力者』と言つた。

「……なら味方ってこと？」

心強い……そう感じてしまった私がいる。彼の返答からわかったことはほとんど

何もない……その返答も偽りかもしれない……だけど……私の心の緊張が解けていく……

「少なくとも君達が不利になることはしない。」

「……いいわ、出て。でもまだ信用できないから私と行動してもら  
うわ」

「分かった。」

調べて、何も出てこないのであれば、私が一緒に行動して見極める。日本を取り返すためにも、こんなところで立ち止まるわけにはいかないもの……

## 02話(前書き)

紅いあの人からの視点です。

## 02話

スパイの様子も、怪しい動きもなかった。そして…彼は有能だった。誰も動かせなかった蒼い月下を易々と操縦するKMFの操縦技術、情報の真偽を見極め、確かな情報のみを集める情報収集能力。

これほどの者なら少なからず名が知られているはずだが、彼の情報は何もない。

いつの間にか私は、彼に…ライに信頼を置いていた。

KMFによる作戦でもライと共に出撃すると不思議と周りが気にならない。

ライが背中を守ってくれているから……

ライが作戦を立て指揮してくれるから……

他の団員達もライを信頼しているようだ。

ライがゼロなのではないかという者まで現れてきた。

ライはそれを「違いますよ」と否定した。

そんな日々の中…食料などの買い出しは私とライの仕事になっていた。

疎開に出て買い出しを行うのは日本人には肩身が狭い。イレブンと侮蔑され、

ブリタニア人から阻害をされることが多い。

その点、私とライはハーフであるから、その見た目はブリタニア人に近い、

嘗ては、自分に流れる半分ブリタニアの血が嫌だった。

しかし、今はこの血が役に立っている。喜んでいいのか悔しがっていいのか…

「どうした紅月？」

考え込んで意識が散漫していたみたい…

どうやら私はライに呼ばれるまでボーっとしていたようだ

「な、何でもない。」

「疲れたのか？ これだけ暑ければ無理もないか。」

「疲れたなんかないわよ。これくらい…暑いのは認めるけど…」

「買い出しも終わったし、アイスでも食べようか？」

丁度あそこに、お店があるみたいだから買ってくるよ、何がいい紅月？」

「いいわよ！そんなの！」

「たまには息抜きが必要だよ。何がいい？」

「うつ…じゃあ、ストロベリー…」

「分かった。買ってくるから此処で待ってて」

ライは走って行った…結構速いスピードで…

私より重い荷物を持っていてよくあのスピードで走れるものだと感心する。

ライの走って行った方向から小さな女の子が走ってくる。  
その後ろをたぶん母親であろう女性が追いかけてくる。  
小さな女の子はアイスを買ってもらってはしゃいでいるようだ。

私にもあつたなあんなことが…

私とお父さんとそして…お母さんの三人で…

ふと気がつくと、私の前に先ほどの小さな女の子が…

ダメだ！！ 荷物が邪魔で動けない。重量はないが大きなものが多く動きにくい。

「あっ！」

ぶつかってしまった。

私の服には女の子が持っていたアイスがベツトリと付いて女の子が泣いていた。

女の子の母親だと思われる女性が駆け寄り、女の子を抱え私に、

『ごめんなさい』と何度も何度も謝っている。

私の『気にしないでください』という言葉も耳に入っていないようだ。  
前にもこんな事があつたな…あれ…以前はどうしたんだっけ…私…

また考え込んでしまったと考えるながら前を見ると、そこにはライがいた…

ライは抱きつきたくなくなるような笑顔で女の子に

『ごめんね』と謝って手に持っていたアイスをあげていた。

女の子の母親らしき女性は『ありがとうございます。』と



何度も何度もおびえている様子で女の子を抱いていた。

その女性に向かってライは

「大丈夫ですよ。気にしていません。洗えば落ちますよ。ね、カレン」

「えっ、あ、うん」

「ほらね、お母さんもどうですか、アイス、差し上げますよ。」

女性はキョトンとした目でライを見ていた。ライはそれに笑顔で返す。

女性は立ち上がりライに『ありがとうございます』と深々と頭を下げて別れた。

女の子は『じゃあね、優しいお兄ちゃん』と手を振っていた。

ライはそれに優しい笑顔で手を振って返していた。

優しいなライは…そう思っているとき。

「ごめん、紅月」

「えっ、何が？」

「アイス…なくなっちゃった。

あと咄嗟のことはいえ『カレン』って呼び捨てにしまった

…」

「いいわよそんなこと…それに…」

アナタにカレンって呼ばれるの…その…嫌じゃないから…」

「…ありがとう」

彼の笑顔が心地よかった。今まで張り詰めていて見ることのなかった笑顔。

今まで見たことないはずなのに、とても懐かしい。もっと見ていたい…

そう思っていた笑顔が一瞬にして消えた。その目線の先には先ほどの家族と

ブリタニア人の若者3人がいた。

先ほどの家族は両手を地面に手を付けていた。若者3人はそれを見て笑っている。

「ライ…あれ…」

ライはいなかった…見渡すとすでにライは走り出していた。アイスを買いに行く時のスピードを遙かに凌駕する速度で…

荷物は持っていないかった。私の周りの地面を見ると投げ出されていた。

私はライが投げ出した荷物を拾いライのところへ向かう。

重い…とても走れない…

ライのところに着いてみると…ライは若者3人全てを組みふせ、全てが終わった後だった。

女の子と女性の家族はすぐに逃げ出したのか、そこにはいなかった。ライの様子もいつもと違っていた。

ライは組みふせていた若者3人に話しかけていた。

「貴様らは言ったな。弱者に権利はないと、敗者に権利はないと、勝者は敗者のすべてを得ると、敗者は勝者に従わねばならぬと、」

明らかに、本来のライの口調ではない。

「貴様らは、私に負けた。すなわち貴様らは弱者にして敗者だ。

ならば貴様らは、私に逆らえない。従え、すべてを私に晒し出せ。貴様の家族、恋人、財産、命、権利、全てだ。」

こんなのライじゃない…ライであるはずがない。

「貴様らに選択は一つしかない。私に従うか死ぬかだ！！さあどうする？」

「もう、いいよライ！ もう、いいよ。」

私は、無我夢中でライを止めていた。

このまま放っておいたらライがライでなくなる気がした…

ライを背中から羽交締めにした。一瞬、彼が首をこちらに向けた。

本来なら透き通るような蒼い瞳があるはずだった。そこにあったのは…

赤く、怪しく光る瞳…怖い…こんなのライじゃない…

怖い…離れたい…でも離れるとライが…

そう考えているとライの全身の力が抜けて崩れ落ちた。

3人の若者は何時の間にか居なくなっていた。

「ライ!!　ライ!!」

「……ごめん……カレン……」

「ライ………気失っちゃった……」

荷物もある。ライが気を失って身動きが取れない。  
仕方ない……ト部さんに連絡して人をまわしてもらおうか……

・

・

・

・

・

私はト部さんに人をまわしてもらってライと荷物を運んで帰ってきた。

ライを部屋に寝せてずっと彼が起きるのを待っていた。

「ん……此処は……」

「あ、ライ起きた？　ここはアジトよ。大丈夫？」

「ああ、大丈夫。ごめん迷惑かけたね。」

「大丈夫、迷惑じゃないわよ。……あの聞きたいことがあるんだけど……  
あの………その………さっきのこと……」

「……詳しいことは、言えないけど……いい？」

「聞かせてくれるの？」

聞かせてくれるとは思っていなかった…でも彼は…

「迷惑か掛けたからね。」

「聞かせて…」

ライは話してくれた。

彼は母と妹を守るために力を手に入れた。

初めは二人を守ることができた。

だけど…その力が原因で彼は二人を…失ってしまった。  
今回はあの家族が二人と重なったとのことだった…

ライの話に一切父親が出てこない。

疑問に思うが会えて父親の事を伏せている節が感じられる…  
誰にだって触れてほしくないことはあるだから聞かない…  
でもどうしても聞きたいことがある些細な疑問だが聞いておきたい  
ことが…

「ねえ、もう一つ聞いてもいい？」

「何を？」

「アナタの名前…」

「知ってる…だろ… 僕はライだよ…」

分かっている彼の名は『ライ』…たぶん嘘ではない…そんな気がする

る。

「ただ私が知りたいのはそこではない。聞き方がまずかったのか彼は首を傾げている…」

「私が知りたいのはライの性が知りたいの…」

私の名前は『紅月可憐』日本人としての誇るべき名前…彼の話を聞いてふと思った…ライはどちら側の人間なんだろうか…日本がブリタニアか…

「どちらを？」

え?! 予想外だった…彼は私の質問に『どちらを?』と聞いてきた…

私が知りたいのは彼の立ち位置…性のことはその副産物だ…

「カレンはどちらを知りたいの？」

ブリタニア人としての？」

日本人としての？」

違う私はそんなことを知りたいわけじゃない…

「ライはどちらを名乗りたいの？」

質問に質問で返され、さらに質問で返してしまった…

これでは話が進まない…

「どちらも名乗りたくない…」

彼はどちらの性も拒んでいる…

「…なんで？」

「僕の母は日本人…父はブリタニア人…  
父は母と妹を守ってくれなかった…そのことを是としていた…  
だから僕は父の性を名乗りたくない…  
だけど、僕は母と妹を守れなかった…殺してしまった…  
…母の性名乗れるはずがない…僕にはその資格はない…」

ライの顔を曇る…とても悲しい顔に…  
でも話を聞く限りライは母の性つまり日本人の性を名乗りたいよう  
な感じ…  
でも彼の立ち位置がはつきりしない…

「貴方はどちらなの？」

「え？」

「貴方は日本人なの？　ブリタニア人なの？」

直球…だが私はこれが知りたかった…彼が私と同じ所に立っ  
ているのか  
それとも私とは違うところに立っているのか…

「どっちなんだろう…僕は…」

ライは迷っている…なぜだろう、迷う必要がどこにあるのだろう…

「日本人…ブリタニア人…民族って何かな？　カレン…」

考えたことはなかった…私自身が日本人だと思っていたのだから…  
だけど私のもライのも日本とブリタニアの血が半分ずつ入っている。  
血縁がその民族を分ける要因となれば私たちはどちらでもありどち  
らでもない。

でも私は紅月可憐であって日本人…  
ライも日本の性を名乗りたいはずだ。

「私は日本人の紅月可憐。私自身がそう思うのだからそれは変わら  
ない。

だからライも同じよ…ライも日本人。お母さんの性を名乗りたい  
んでしょ？」

「教えて、ライの性を…」

「……………妃……………」

「え？ 何？ 聞き取れなかった…」

ライの声はすぐ小さく聞き取りにくかったただけで最後に『き』と  
聞こえた…

「妃……………」

「キサキって皇妃と皇后とかのキサキ？ 男なのに？」

珍しい性だ…私は今まで聞いたことがない…ちょっとおかしい。  
男なのに妃…でもちょっと可愛い

「性に男も女も関係ないと思うんだけど……………」



「そうだけど…でも可愛い。」

「可愛いって…」

「そして嬉しい…ライは私と一緒になんだね」

ライは私と同じハーフで日本人にもブリタニア人にもなれる…  
今の状況下で日本人を選ぶハーフはいないその中で彼は日本人を選  
んだ…

私と同じ日本人を選んで此処にいる。それがとても嬉しい。

「一緒？」

「そう一緒…私とライは一緒」

彼といたら何でもできる。力が湧く、強くなれる。そんな気持ちに  
なる。

彼に不思議と懐かしい気持ちになったのはきつとこれが理由なんだ。  
私と同じだからそう感じたんだ

## 02話（後書き）

主人公ライ君の苗字「妃」となりました。

だめ？ですかね…

「皇」家の親戚なのでから、あり得ない話ではないと思います。  
それにかわいいじゃあないですか「妃」…

## 03話(前書き)

再び紅いあの人からです。

### 03話

ライのおかげで崩れそうになっていた黒の騎士団が徐々に立て直してきた、

私の心も以前より強くなった気がした。

ゼロがいたところの騎士団の状態と比べるとまだまだけど…

そんな中…ト部さんがある情報を持ってきた。

リフレインの工場あると…

潰すリフレインだけは必ず…

「すぐにこの工場を潰しましょう。」

「ライはどう思う。」

「工場があるのは事実のようですが、明らかに罠です。かなりのKMFが配備されているでしょうね」

「ふむ、なら襲撃は見送った方が…」

「ダメです。工場は潰します。」

「紅月?!」「カレン?!」

「リフレインは…リフレインだけは…」

「しかし、かなり危険だ。」

「それでも!!」

「ライからも何か言ってやってくれ！」

「仕方ないな…決行しよう！」

「「ライ?!」」

「カレンは僕が駄目だといっても一人でやるだろ？」

「なら、少しでも危険をなくすために僕たちも行きましょう。」

「ただし、条件がある。僕の指示に必ず従ってもらう。絶対だ。」

工場の襲撃は成功、リフレインもすべて破棄できた。

後は、撤退するだけだったが…案の定包囲されていた。

「すごい数だなこりゃ…」

「約300秒後にルートに穴が開きます。そこから脱出します。」

「カレン、ト部さん、いいですか？」

あらかじめ僕がギアスを掛けていたブリタニア軍のパイロットたちが定刻になると脱出ルートをあける。これが僕が掛けたギアスだ。

僕たちが投入した戦力は、カレンの紅蓮・ト部さんの月下・無頼3機そして僕の蒼い月下だ。

僕たちを包囲しているブリタニア軍のKMFは僕らの5倍はある。つまりチャンスは一度。何の問題もなければ全員が無事で脱出できるはずだ。

「何故そんなことが分かる?!」

もっともな質問だ…僕の力を…ギアスを知らなければ当り前の疑問…

「敵指揮官の癖みたいなものです。このまま戦闘を続ければ穴が開きます。」

事実としてそんなものはない。これで納得してくれれば…

「なるほど流石はライだ。もう敵の戦略的な癖をも読み取ったか…」

納得してくれたか…ト部さんが素直で助かった。

しかしこの状況では信じるしかないけどな…

「後60秒です。準備はいいですか?」

「ライ!!」

「何ですか?。ト部さん」

「無頼が一機やられた。」

コックピットは射出されたようだが敵に囲まれている。」

「私が回収します。」

「紅月！」「カレン！」

「紅蓮の突破力なら！」

確かに紅蓮なら突破することはなのだが…時間が…

「分かった任せる！ 頼むぞ紅月」

「カレン時間がギリギリだ、回収したらずくにルート に向k…な  
つ！！」

戦闘能力を失ったコックピットブロックだけになたつた無頼に向か  
つて、

サザールランドはマシンガンを連射していた。それを見たカレンが…

「キイイイサアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

すごい勢いでサザールランドを輻射波動で撃破していく。しかし、こ  
れでは…

「カレン、輻射波動の連発でもうエネルギーがないはずだ。下れ！」

「はあああああー！！！」

聞こえてないか、力尽で止めるしかないか…

僕は月下を紅蓮に向け走らせた。

そして、スラッシュハーケンを紅蓮に向けて射出する。当てる気は  
ない。

ハーケンのワイヤーを巻きつけて捕捉する。カレンは周りが見えて

いない。

今のカレンに後ろからのこのワイヤーをかわすことはできないはずだ。

……よし、巻きつけられた。これで…

「カレン！！ 下れ、時間だ！！」

「邪魔しないで、こいつらだけは！！」

ダメだ完全にキレてしまっていて僕の指示を聞いてくれない。

「くっ…仕方ない。ト部さん。カレンを頼みます。脱出してください。」

僕は紅蓮に巻きつけたワイヤーをそのままにして紅蓮をト部さんの月下へ投げ、

巻きつけたワイヤーを切り離す。ワイヤーを解いている時間はない。明らかにKMFの限界を超えた出力を出したためなのか、右腕は完全に破損して動かなくなった。

「承知！ しかし、お前は？」

ト部さんの月下は紅蓮を受け取る。

紅蓮は巻きつけたワイヤーによってうまく動けない。

「僕は殿を務めます。早く脱出を！ もう時間がありません。」



「しかし!!」

「これは命令です。僕の指示に従ってください。」

「ぐっ…承知」

命令か…偉くなったものだな僕は…

ト部さんも僕の言葉に押されたのか承諾してくれた…

さて、これからどうしたものか…

敵KMFの数は約10…こちらは右腕を破損した蒼い月下一機、エナジーは残り40%

強力な武装である甲式輻射波動は残っているがエナジー消費量が多  
く、

おそらく全てのKMFを倒すことはできないだろう。

右腕が破損しているから廻転刃刀もハンドガンも使用できない。

「クソッ、手詰まりか?!」

PPPPPPPP

不意に携帯電話が鳴った。

「何だ、こんな時に!!」

「やあ」「V.V.!!」

思いもよらない人物からの連絡…

「遅いよ。君なら、もう任務は終えているはずだよ。僕、待ちくたびれちゃった。」

「この任務に期限は無いはずだが…」

僕がV・V・から受けた命令は蒼い月下の奪取…それだけ…  
期限は決められていない。僕はギアスをかけられV・V・の命令に逆らえない。

だから僕は蒼い月下の奪取の作戦を実行に移している。  
だけど期限は決められていない。

だから作戦の実行中ということとずっと此処に残るつもりでいた。実際にギアスの縛りはない。

この作戦にとりかかる前に感じていたギアスの縛り…  
僕に行動を強制させるような感覚…  
やらなければならないと思う僕の感情の操作…

「なるほど、君は裏切ってもいないし、逆らってもいないというとか。」

まあいいや、蒼い月下の報告は受けているよ。  
ブリタニア本国の方へ帰還して。」

「僕は今ブリタニアと敵対している黒の騎士団の一員として潜入工作中なんだが…」

ブリタニア本国に帰還しろ…この命令を撤回させる。

あと少しだけの時間だけでも…まだカレンには伝えなければならぬ  
いことが…

「その点は大丈夫だよ。

潜入工作の手順として軍内部の君の情報を全て消去下ことになっ  
ているから。

君が帰還するときには、こちらから手は打っておくよ。」

「都合のいい話だな。 あ、ああ、今がピンチなのは変わらないか  
…」

月下に衝撃が襲う。

忘れてた…僕は今戦闘中だ…しかもかなり危険な状態…

「フッフ…忙しいようだね。じゃあ、待ってるから早く帰ってきて  
ね。

君には特等席を用意してるから…」

「お、おいそんな勝手に…切れたか…」

とりあえずこいつらを何とかしないと…

武器は左腕だけ、これで出来るのは…『チン』だけか…

これだけだと、ほんとに使い勝手が悪いな…

強力な機体なんだけど…

なあ月下…

確率は少ないがあれしかないか…

「隊長、何なんですかあの機体は？ 弾がすり抜ける?! まるで



「慌てるな出入り口を抑えてる限り奴はここから逃げられん。」

「た、大変です。隊長!!」

「どうした。慌てることは無い。

戦闘に関しても奴の左腕にだけ注意すればいい」

「い、いえ、この廃墟の崩壊が始まっています。」

「何? どこからだ?」

「それが… 出入り口からです!!」

「何だと?! まさか… 4番機Lostだと?!」

「た、隊長!! うあああああ」

「ああああああ」

「あ、あああああ」

成功したか…

輻射波動で廃墟の基礎を熔解させ崩壊させる…

確率は40%いや… 25%程度だっただろう。

ゼロだったらこんな賭けはしないだろうな…  
入口の方から崩れたのは嬉しい誤算だった。

何機が残ると思ったがおかげですべてのKMFを撃破することができた。

PPPPPPPP…またV・V…か…

「何だ？」

「フフフ…そろそろ終わったころだと思ってね。」

「まるで見ていたかのように正確さだな。」

「契約者だからね。これくらいのことにはわかるぞ。  
それより早く戻って来てよ。頼みたいことがあるんだからさ。」

「勝手だな。帰る方法がない。」

「そう？ それじゃあ、政庁の方へ行つて、色々と手配しておくから…」

「それじゃあ、よろしくー。」

「あつ、おい……また切れた。とりあえず行くしかないか…」

僕に掛けられたギアスが僕の意味を捻じ曲げる。

これがギアスか…ギアスは滅ぶべきだな…

僕のギアスはもっと極悪か…

「ト部さん！！ ライさんの月下の signal、lost しました。」

「何だって?!」

先ほどの戦場から離脱して今は仮のアジトにいる。

ライの無事が気にかかるから団員の一人に

ずっとライの signal を確認させていた。そこに聴きたくなくなった報告が…

「そんな……………」

「放してくださいト部さん！！ ライを、ライを助けに行かなくちゃ」

すぐに紅蓮に乗ってライのところへ行くこととしたがト部さんに腕をつかまれた…

「落ちて着け紅月！！ 今の状態で言っても碌に戦えないだろ！

今行ったらこちらがやられる。」

「だって、だってライが…ライが…」

「殿とは本来そういうものだからな。」

ひどい…そう感じる…今までも仲間を失ったがライだけは別だった。彼だけは生きている。そう感じる。だけどト部さんはそれを否定する。

「ト部さんあなた、お楽しみのところを申し訳ないが……」

私がト部さんに対して大声を張り上げてしまつところにC・Cが介入してきた。

「C・C.」「あんたいつ帰つて……」

「つい先ほどだ……」

その言葉は、補給ルートを確認してきた功労者にかける言葉ではないな。」

「……………」

C・Cのいつもの軽口に今回は言い返す気がしない……

「何だ？ 何かあったのか？」

「C・C・実はな……………」

ト部さんがC・Cがいなかった時の事をすべて説明する。ただ無駄だ、C・Cに話したからって何かが変わるわけでもない。



「なるほど、そんなことがあったのか」

「ああ」「…」

「死んでないと思うぞ」

「「えっ?!」「C・C・今何て?」

「ライは死んでいないと言ったんだ。

何だ、何も聞こえなくなるほど悲しかったのか?」

「そんなんじや…」

「しかし、C・C・何故そんなことがわかるんだ?」

「ライは私のちょっとした知り合いでな、奴のことならわかる。

こんな事で奴がくたばるはずがない。それとも何か?」

お前らは奴がこんな簡単に死ぬ奴だと思っているのか?」

「いや、そんなことはないが、それd「ト部さくん」何だ?

いま大事な話をしているところなんだが。」

「すみません。しかし、データの整理をしていたところ、

見知らぬデータがあったので見てみたのですが、どうもライさんが作っていたデータのようでしたのでプリントアウトしてお持ちします。」

「「ライが?!」「」

「相変わらずマメだなライは。」

「今後の活動予定と方針、現在持っている情報の真偽、情報真偽の判断方法、有効的な作戦立案の方法…まだある…」

「すごい……あつ、C・C・何処行くのよ？」

「何処つて、もう話すこともないから寝るんだが。」

「あつ、ちょっと待ちなさいよC・C・！  
すいません。ト部さんあとよろしくお願いします。」

「おつ、おい紅月、お願いしますって…  
はぁー、女つてみんなあんな感じなのか？ なぁ、お前はどっ思  
う？」

「あの、えーっと、自分にはよく分かりません。」

「C・C・アナタ、ライと知り合いつてどっいつことよ？」

「言えないな、奴との約束なのでな。まぁ、そのうち会えるだろう。」

「何でそんなことがわかるのよ。」

「唯の感だ。」

「感って…アナタは彼の…ライの何を知っているのよ？」

「何でも知っているぞ。お前の知らないライのことを…  
ライの過去も、ライの笑う顔、怒る顔、寝ている顔、ライの秘密  
を」

「C・C・アンタ…」

「何だ妬いたのか？」

「もう、いいわ、それじゃあね。」

「フフフ可愛いものだなカレン……………」

ライ…眠りについたお前が何故また現れたのだ…  
未練はあるがだからこそ、未練はないんじゃないのか…」

### 03話（後書き）

会話シーンの描写が全くないですね…  
我ながら勢いのみで書いたのだなと痛感しています。

## 04話（前書き）

我らがライ君の視点に戻ります。

## 04話

しかし、驚いたな…

V・V・に政府に行けと言われ、ひと悶着あると思って、エナジーの補給と破損した右腕の代わりにサザールランドの腕を付け、臨戦体制のまま、政府の敷地内に入った。そこであった出来事と言えば…

車が一台寄ってきた。その車が一人の男が降りてきて…

「こちらです。私の車の後について来て下さい。」

その男はこちらの返答聞かずに車に乗り込み走り出した。

案内の先にあつたのは輸送艇、KMFが丁度1台格納できるサイズで、

ブースターが追加され、無理やり高速艇と化していた。

男は車から降りて、

「お乗りください。本国までお送りします。」

そう言つて、輸送艇に乗り込んだ。

僕も月下を積み込んでから、輸送機の座席についた。すると…

「隣の席に置いてある物が、アナタに対しての指令所です。ご確認を…」

…これか……指令所…そのほかの様々な書類がある…確認すると内容は…

ライ・シルバ……………僕のことか？！

上記の者、現行より軍務に復帰し中佐の任へ就かせる。  
また、各地の代将としての職務を与える。

本国へ帰還し、

Knight Of Sevensザク枢木専属KMF開発チーム  
「キャメロット」の

ロイド・アスプルンド少佐の下で奪取した機体にフロートユニット  
を装着後、

Knight Of Sevensザク・枢木

Knight Of Tensルキアーノ・ブラットリー

の両名と共に白ロシア戦線へ参加せよ。

なお、貴公は投入されている部隊と上記のラウンス両名及びその部  
隊を指揮し、

白ロシア戦線を攻略せよ。

……………何だ?! これは……………

デタラメだ。僕がいきなり中佐に…しかも代将のオマケ付き。

さらには中級士官の地位が与えられたといっても、

それでも一般士官ではない僕が、戦線の部隊とラウンス二名を指  
揮するだと…

滅茶苦茶だ……………

こんな事を考えてるうちに、ブリタニア本国に着いて現在「キャメ  
ロット」の

ロイド・アスプルンド少佐のところまで僕の月下にフロートユニットを換装中だ。

「んふ、んふくん いや、すごいね君、こんな設定の機体を動かせるなんて」

「んも、ロイドさん！ 失礼ですよ。」

失礼しました。シルバ中佐、どうかお許しください。」

「構いませんよ、

セシル・クルーミー中尉、僕はあまりそついつの気にしませんから。」

「ほんとにすごいよキミ！ 僕のデバイサーにならない？」

「ロ、ロイドさん！！ 何言ってるんですかあなたは！

シルバ中佐の階級はロイドさんより上なんですよ！」

「えっ、何かいけないの？」

「教えて差し上げましょうか？」

「いえ、遠慮しておきます。」

「ふふふ… あっははははははは…」

「あっ、あのシルバ中佐？」

「…ははは…す、すいません。つい楽しくて…」

いいですよ、デバイサーの件、考えておきましょう。」



「やった~~~~!!!!」 「シ、シルバ中佐、よろしいのですか。」

「ええ、構いませんよ。」

白ロシア戦線が一区切りついたら上に掛け合ってみましょう。」

まるで軍属の組織とは思えない雰囲気が僕は気に入った。

黒の騎士団の中でもそうだった。戦地へ赴く危険なことをしているが、

戦闘がないときや、OFFのとき、何もなしのときのやわらかな優しい雰囲気が…

会議室…そこには、僕ともう一人…

ルキアーノ・ブラットリー卿、僕と同じラウンズである「ブリタニアの吸血鬼」

と呼ばれる。Knight Of Tenがいた。

「ナンバーズがラウンズとはな…」

しかも、一般士官の指揮下にラウンズが入るとは…」

「それが皇帝陛下からの命です。」

「失礼します。」

入口の方から声が聞こえ、その方向を見るとそこには一人の少年がいた。

年齢は僕と同じくらいかな。身長もほぼ同じ、髪の色はくすんだ銀

色。

瞳の色は見惚れていままうほど透通った青：いや蒼だ。

体の線はかなり細い、ルルーシュを思い出すような細さだ。

だが良く見ると唯細いではなく引き締まった体をしている。

そして、何だか懐かしい感じがした。

「今回、白ロシア戦線の指揮を執らせていただき、ライ・シルバ中佐です。

さつそく、作戦内容の確認をさせていただきます。こちらをご覧ください。」

壁に掛けられていた大きなディスプレイに白ロシア戦線の地図が戦況と共に

映し出されていた。そして最前線に3つのポイントが映し出された。

左翼に僕のランスロット、右翼にブラットリー卿のパーシヴァル、

そして：

中央にシルバ中佐が出るとのことだった。

その背面に各部隊を展開させ、僕たちが討ち洩らした敵機を処理する。

かなり攻撃的な布陣だった。

「ラウンズのお二人は左右から展開していただく以外は自由に動いてください。」

おそらく第三防衛ラインまで攻略すればひと段落がつくはずですよ。

「

「シルバ中佐！！ しかしこれでは……」

「ほお、なかなか過激な作戦だなあ。私好みだ。これで終わりか？」

「はい。ラウンズの方に動いてもらうのは以上です。」

「じゃあ、私はもう行く。それでは枢木、戦場でな……」

「ブ、ブラットリー卿……」

「枢木卿、何か質問はありますか？」

「シルバ中佐、これでは攻撃的すぎる。防御は？指揮系統はどうするんだ？」

「僕が全て、指揮を取ります。ご安心ください。」

彼は、戦場に出る全ての部隊を指揮するといった。

不可能だ！ 自らも戦闘参加しながら全部隊に指揮を出すことなど……到底出来ることなどありえない。

ブリタニアの宰相であるシュナイゼル殿下はすべての部隊を指揮するが、

彼自身は後方で戦況を随時観察して指示を出す。

だが彼は自らも戦闘に出る……

通常では考えられないが彼には皇帝陛下からの直接命令が出ている。だがそれは、僕が彼の指揮下に入っていることも含まれ益々混乱する。



.....  
白ロシア戦線攻略完了...

僕は驚いていた。戦場で見たシルバ中佐の駆っていた機体は、かつて僕が日本... エリア11で黒の騎士団と戦闘していた時に、苦戦していた蒼い機体だった。しかも、その動きも酷似していた。

戦闘でのデータを見るとさらに... 驚愕...  
被弾損傷は無し... 彼の撃墜数は僕の2/3程度...

しかし彼は唯戦闘だけをこなしているのではなく、部隊全体の指揮を執っていた。それで、この数値は考えられない。もし彼が指揮を執らずに戦闘に専念していたら僕の撃墜数と並ぶだろう。

「スザク君」

不意に後ろから声を掛けられた... ラウンズである僕に対し君付けで呼ぶものは  
同じラウンズか皇帝陛下しか考えられない。

だが例外がある...

此处、皇帝陛下直属のKMF開発機関キャメロットの元々の母体...  
特別派遣嚮導技術部... 通称『特派』。その頃からの知り合い... かつての上司...  
セシルさんが声をかけてきた...

「何見ているの？」

「シルバ中佐の戦闘データです。何者なんでしょう彼は…」

「ええ、ほんとにすごい人ですね。味方の損耗率がかなり低い。過去のデータと照合してみたら今回の損耗率の低さは歴代のTOP10入り、するくらいの戦歴ね。」

「そんな…彼は…」

またしても驚愕の事実が一つ出てくる…ますます彼に疑問を持つ…

「失礼します。枢木卿こちらでしたか。」

彼への疑問が募り、僕の頭が混乱して、言葉を失った所に彼が来る。

「「シルバ中佐!!」」

「今回の白ロシア戦線の戦闘報告書です。」

今回の作戦指揮は彼が担当…よって戦闘報告書を書くのは彼…だが地位はラウンズである僕の方が上、つまり報告書を提出するのは僕の役割。

「はい、確かに受け取りm「あつはぐん、ライ君来たね」」

彼に受領の意を伝えている途中にロイドさんが割り込んでくる。

「「ロイドさん!! 失礼でしょう!」」

「いえ、僕は構いません。どうしたんですか?ロイドさん。」

「デバイサーの件で念を押しに来たんだよ。よろしくね  
あと君にとっては残念なお知らせだけど、君の蒼い機体もうダメ  
みたいだよ。」

フレームから何から何まで完全にガタガタ。ラクシャータの機体  
だから、

いじるのを楽しみにしてたんだけど仕方ないね。」

「そうですか…」

彼は任務であの蒼い機体を黒の騎士団の残党から奪取して来たとの  
ことだった。

その任務のため、彼のデータや情報は完全に末梢されている。

だから彼のことを調べても何も分からない。

彼はロイドさんからの報告に少し悲しい顔を見せた…

彼のその顔の理由が分からない…彼が蒼い機体に乗っていた期間は  
短いはずだ。

僕のように長く乗っているのならば愛着がわくのは分かるが…

彼にそれはあてはまらない…またしても彼に疑問が生まれる…

「失礼します。こちらにシルバ中佐はいらっしゃいますか？」

不意にキャメット口のスタッフでないものが彼の名を呼んで現れる。

「はい、此処に…」

「皇帝陛下からのダイレクト通信です。会議室の方へ回線を繋ぎま

すので、

そちらの方へお急ぎください。」

「は、はい…、それでは、

枢木卿、アスプルンド少佐、クルーミー中尉、失礼します。」

彼は、急いで走って行った。無理もない皇帝陛下直々の通信だ。

しかし、わからない。シャルル皇帝陛下は何故彼を名指しで…疑問が増える…

「まだまだ、硬いね、ライ君は…」

「不謹慎ですよ。ロイドさん！！ あれ…そう言えばシルバ中佐さつき…」

『ロイドさん』って…「うん、言ってたよ」「…何ですか？」

「何でって、彼からのお願いだよ。『僕のことにはライと呼びください』って」

「そんなの聞いていません。」

「あれ？ 言っただけじゃなかったっけ。」

「聞いてません。」

「じゃ今、言いました。」

「はあ、アナタって人は…」

「あの…」



「あら、なあに？スザク君。」

「ロイドさんとセシルさんは気にならないんですか？」

「彼のこと？」

「そうですね。一般士官であるにも関わらず、この作戦の指揮を執ったり、

皇帝陛下からのダイレクト通信とか……」

「まあ、気になるけど、彼の機体にフロートユニットを付けるように命令してきたのは皇帝ちゃんだし、KMFの操縦技術は魅力的だし、

気になることはたくさんあるけど、気にしたって仕方ないし……」

「そうなのよ。気になって調べたけれども、何も出てこなかったのよ。」

「何もですか？」

「ええ、何も、だから気にしないことにしました。」

「セシルさん……ロイドさんに毒されていますよ……」

「……………恐縮至極にございます。」

僕は今、会議室のディスプレイに向かって、片膝をついて頭を垂れている。

かつて、僕が黒の騎士団に所属したときに打つ最終目標としてのこの男に…

シャルル・ジ・ブリタニア 神聖ブリタニア帝国第98代皇帝  
で僕の大切な

友達、ルルーシュとナナリーの実の父……あの二人は今どうして  
るのかな？

「初にお目にかかる我が国ブリタニアの国是の体現者、狂王ライよ。  
」

「は？ 何故？ それを……」

「これで、ご理解できるかな。」

皇帝シャルルの眼が怪しい赤色に染まる。

「ギアス…V・V…か」

僕は立ち上がった。この男は知っている。

僕が誰であるか。僕が黒の騎士団であったことも。  
ならば忠誠しているフリも必要ない…

「ほお、ずいぶん態度が変わるようだなあ！」

「僕は、お前の『忠誠を誓った忠実な部下』というわけではない。」

「だが、契約によって縛られる『忠実な駒』だあ」

「くっ！」

「貴様にはワシ直属のナイトオブラウンズに入ってもらおう。  
これで、貴様は今までい以上に自由に動かせる。」

今までも十分自由に動かしていたと思うのだが…

「何の功績もない僕をいきなりラウンズにできるのか？」

「ラウンズの条件は強さだ。強さがすべてだ。不足はない！！  
功績はある。今回の白ロシア戦線の功績がな！！

それに、狂王の貴様であればラウンズとなった後からでも功績は  
立てられるであろう。」

「買いかぶりすぎだ。それに戦闘報告書の提出はまだしていないが  
…」

「では…今出してもらおうか。もう、できているのだろう…」

「上官であるラウンズの確認と許可が取れていないが…」

「構わぁん！！」

僕は無視しようとしたが、体が勝手に動く、いや勝手に動くわけじ  
やない。

僕の意識を無理やり変えられているような感覚…  
これが僕に掛けられたギアスの力か…

「これで、貴様をラウンズとする。手筈は整った。  
本国に着き次第、ラウンズ就任の儀を行う。」

「僕に何をさせるつもりだ。」

「我々の計画を順調に進めるため……」

「計画？」

「貴様に話す必要はない。貴様は同志ではなく契約者だからな。」

「ならば契約の範囲内で自由にさせてもらうか」

「ふあはははははははは、いいだろう。」

貴様は我々に逆らえない、裏切れない。そのことをゆめゆめ忘れるな！」

壁に掛けられたディスプレイは通信が切れ全面青い画面になった。

「ラウンズ……か……これからどうしよう……」

スザクと同じく Knight Of One でも目指してみるか……いや……やめておこう。」

そつだ、まずは僕に『色』をくれた人たち、ルルーシュ、ナナリー、ミレイさん、

リヴァル、シャーリー、ニーナ、そしてカレンとスザク……彼らのために……

いや……また繰り返すだけかもしれない……

見守ろう……遠くから……これくらいなら……大丈夫だよな……

## 04話(後書き)

戦闘シーンなんて書けません。  
物語のスピード重視です。

## 05話(前書き)

青マント人の視点からです。

僕は今、ライ・シルバ中佐が持ってきた戦闘報告書を確認していた。此処にいる者の中で自分とブラットリー卿の地位が一番上なので報告書を

確認する義務が自分には有る…

報告書には、僕とブラットリー卿の活躍がメインに記載されていた。部隊全体の指揮を執っていたシルバ中佐自身のこととも書いてあったが、

僕らラウンズのことを記載してある部分と比べると極わずかだ。

先ほどのセシルさんの話で、味方の損耗率の低さや今回の戦歴を見ると

彼の功績はかなり大きい。

「欲がない」一言でいえばそんな印象があるが…軍人としては疑問が残る…

「……ドさん!!」

セシルさんが大きな声を出して慌てている。珍しい…そう思って声をかける…

「どうしたんですか？セシルさん。」

「スザク君！ 実は…「やった〜!!」」

「ロイドさん??!!」

「んふぶん　　彼やってくれたね」

「あの、状況が分からないんですけど…」

「下りたんだよ。予算と彼専用のKMF開発命令が　　これからは  
楽しくなるよ」

分からない。確かに彼はすごい…

しかし、彼は一般士官のはずだ。その彼に何故？！

いや、わからないのはそれだけではない。皇帝陛下からのダイレク  
ト通信。

ラウンズの指揮、それに従えとの皇帝の命、それに準ずる指揮能力。  
彼は…何者なんだ…

彼に感じる懐かしい雰囲気…これももう一つの謎。  
以前から知っているような気がする…

「…君、…ザク君、スザク君！！」

「は…はい！！！」

気がつかなかった。そんなに考え込んでいたのか僕は…

「大丈夫？スザク君」

「はい、大丈夫です。何ですか？」

「ライ君…いえ、シルバ中佐が来ています。お話があるって…」







僕はラウンズ専用の会議室『円卓の間』にいる。

何故か理由は簡単、ラウンズに新しいメンバーが加わる。その顔合わせだ。

通常ラウンズの顔合わせは、KMFに機乗しラウンズとの模擬戦で  
するものだが、

今回は異例で『円卓の間』での顔合わせとなった。

理由は新たなラウンズ加入者がKMFを所持していないからだ。  
この条件に当たる人物を僕は知っている。ライだ。

「なあ〜スザクウ〜、新しい加入者って誰かな〜お前知ってるか〜  
？」

「会えばわかるさ、あの…ジノ重いんだけど…」

「記録…」

「ジノもアーニヤも仮にも貴族なんだからそれらしい振舞いを…」

ノックの音がした。

「おっ、来たみたいだな。」

扉が開き、そこに現れたのは…

黒いマントを羽織り、黒いラウンズ正装をした男。

おかしい、ラウンズの正装は白であるはずだ。

そして、顔を大きく隠すような大型のサングラス。  
レンズとフレーム一体型の色はこれも黒。

彼のくすんだ銀色の髪にコントラストが強調されている。

「今回ナイトオブラウンズに加入することになったライ・シルバです。」

「……………」

みんな黙っている……無理もない僕らの常識を覆す黒い正装そしてサングラス……

「記録……………」

この静寂を破ったのはアーニヤだった。

「……いくつ?…」

「は?」

「私 Knight Of Sixアーニヤ・アールストレイム……ア  
ナタは?…」

「……僕は…… Knight Of Phantomです。よろしく、  
アールストレイム卿。」

ファン……トム……ラウンズの番号が与えられていない?

「……………」

さらにみんな静まり返った。アーニヤを除いて……

「外して…」

「は？」

「外して…それ…」

「それってサングラス？」

「そう…こういう場では外すのが礼儀…」

「しかし、これは皇帝陛下から公務中は、つけてるとの命で…」

「今は唯の顔見せ…外して…」

「…分かりました…」

ライは右手でサングラスをゆっくり外した。そして彼の透き通るような蒼い瞳が現れた。

「綺麗……記録……」

アーニヤが何枚も彼を取り続けている。他は静まり返っているままだ。

これでは二つの相容れぬ空間が一つの部屋に出来上がってしまう。

良く見ると僕と同じく彼にあったことのあるブラットリー卿は、はじめは驚いていたようだが今は、興味を失って傍観者となったようだ。

もしかしてこれまじい状況じゃないか？

とりあえずこの状況を何とかしないと…  
僕はライに駆け寄って、

「おめでとう、ライ!!」

「ありがとう、スザク」

「え、スザク、知り合いか？ そいつ！」

「話したろ、白ロシア戦線での指揮官を務めたのは彼だよ。」

「へえ、君が、私はKnight Of Threeジノ・ヴァインベルグだ、よろしく！」

「私はKnight Of Nineノネット・エニアグラム、いい男だなお前は。」

「Knight Of Fourドロテア・エルンストだ。」

「Knight Of Twelveモニカ・クルシェフスキーです。よろしく。」

「私が帝国最強の騎士Knight Of Oneビスマルク・ヴァルトシュタインだ。」

「……何処へ行くルキアーノ!!」

「私はもう、白ロシア戦線で顔は知っていますからね。  
あとは好きにさせてもらいますよ。」

「何だ、またトマトジュースとやらか？」

「ワインよりジュースとは…お前は子供かルキアーノ？」

「やる気がエニアグラム、エルンスト？ 受けて立つぞ。」

ブラットリー卿とエルンスト卿、あとノネットさんが

言い争いを始めてしまった。『トマトジュースは至高の飲み物』だの  
『それでもジュースだ子供だな』だのと言い争いをしている…

いい加減慣れたが、このノリにはついていけない…

どうやらさっきの変な状況は回避できたかな…

ライは皆から質問攻めのようだ。ちょっと困っているようだ…良かった。

## 05話(後書き)

はい…」Knights Of Phantom」です。ハイ…  
もともと、この時代に生きているはずのないライ君に対し、皇帝陛下  
下なりの皮肉でしょうか？  
それとも、V・V・Vの茶目っ気でしょうか？



## 06話

顔見せから数日…

僕は、スザクに連れてこられ、ある部屋に向かっていた。

その部屋は、皇室専用の部屋、なんでもスザクと親しい皇族とのことだが…

いくらナイトオブブラウンスでもナンバーズであるスザクを皇族が受け入れる？

『弱肉強食、勝ち取らぬ者に価値はない』を信条とするブリタニアの皇族が、受け入れることは、僕には考えられなかった。

この国の信条…国是の元でもある僕…狂王ライ…  
本来の考え方は違うが、現在のように伝わってしまったことが少し悔しい…

「皇女殿下、お話していた彼をお連れしました。」

スザクがドアをノックして、そう言ったあと、中から「どうぞ」と声が出た。

スザクがドアを開けそこにいたのは……ナナリーだった……  
声が出なかった。

「スザクさん、今は私一人です。だから……」

「そうだったね。ナナリー、この前言ってた合わせたい人を連れてきたよ…」

あれ…、どうしたの？ 早く中に入りなよ！」

声が出なかった。 だけど部屋の中になんとか歩み寄ることができた…

「お兄様！！ お兄様なのですね！！」

「ななりー?!」

ナナリーは驚きながらも嬉しそうな顔をしていた。

スザクはなんだか驚いている。

そうだ、僕はかつて、アッシュフォード学園でナナリーにルルーシ  
ユと

間違えられたことがあった。

今は、僕が神根島で僕が眠りに就くときに願った。

『みんなが僕を忘れますように…』

この願いに神根島の遺跡の何らかのシステムが僕のギアスをトリガ  
ーに

起動し、ギアスと同等の力が全世界を覆った。

V・V・によれば予想外だったそうだ。ギアスを持つ者であれば遺  
跡のシステムを

起動できるとのことだがそれには強い願いが必要とのことだった。

僕は確かに強く願った。

みんなを失いたくない。

みんなと別れたくない。

悲しませたくない。

みんなを守りたい。

傷つけたくない。

でも僕がいれば、みんなを傷つける・・・

だから僕は眠りについた・・・

そして、また戻ってきてしまった。V・Vの手によって・・・

契約をしてしまっているがゆえ、また眠りにつくことができずに今に至る。

僕に与えられた二つ目のギアス・・・使う気はない。この力は危険だ・・・  
今まで使うことがなかったため、どのようなギアスなのかは、わからない。

でもそれでもいい。使わないのだから・・・

僕は決意したはずだ・・・遠くから見守ると・・・

細心の注意を払いもう二度とあの惨劇を起こさないと・・・

しかし目の前には、スザクとナナリーが・・・

ふと気がついた、僕はまだ返事を返していない。

ナナリーから『お兄様なのですね？』

と言われてからどれだけの時間がたっているのだろう・・・

すぐに返事を返さないと、

「申し訳ございません。ご挨拶が遅れました。先日Knight  
Of Phantomに

就任しました。ライ・シルバです。

勘違いをさせてしまい。申し訳ございません。」

「えっ、ライ・シルバ…卿…ですか……」

いえ、私が勘違いしてしまったのですから、すいません…」

ナナリーの顔が一転して暗くなる。胸が痛い。

同時に疑問が湧く。ナナリーが何故ここにいる？

先ほどの態度からここにルルーシュはいない。ならば何処に？

ルルーシュとナナリーが皇族であることは偶然知ることになったあの出来事が、

あったので驚きはしないが、今の状況は予測ができない。

「ナナリー、どうしたんだい？」

「あの…その…シルバ卿の雰囲気…お兄様に…似ていたんです…  
それで…」

「ルルーシュに？」

「はい…でもそれだけじゃないんです。

何だかとても懐かしい気持ちなんです。

以前から知っていたような…以前にも同じことがあったような…」

「ナナリーも？ 実は僕もなんだ。」

この光景も、もう見ることもないと思っていたんだけどな…

「シルバ卿」

「はっ、はい。何でしょう？ 皇女殿下」

「あの、私のことは、ナナリーと呼んでくださいますか？」

「しかし、それは……」

「いいんだよライ。ナナリーがそう言ってるんだから。」

「お願いします。あともう一つお願いがあるんですが……そのライさんと呼んでも構いませんか？」

「いえ、それならば『ライ』と呼び捨ててお呼びください。」

「え、あの、その……ライ……さん……」

「あ、あの……」

「それ以上は……イジメ……」

「「アーニヤ(さん)」」

「アールストレイム卿…… 僕はそんなつもりでは……」

「そついう風に……見える……」

「「……」」

「アーニヤさん!! どうかしたんですか?」

「折り紙…教わりにきた…約束…」

「えっと…それは明日のはずじゃ…」

「間違え…た? 出直す…」

「待ってください! アーニヤさん。やりましょう折り紙!」

「いいの?」

「はい。この後の予定もありませんし…」

「そうだ。スザクさんとライさんも一緒に…」

「そうだね、ナナリー。」

「ご一緒させていただきます。ナナリー様」

「敬語も様もいりませんよ。ライさん。」

「はい。わかりました。」

「……………」  
「アーニヤに睨まれ、ナナリーには哀しい顔をされた。

「ライ…」  
そして、スザクに促され。

「分かったよ。ナナリー。」

「はい。」  
ナナリーに笑顔が戻った。良かった。

「ライ」

「何か？ アームストレイム卿。」

「それ嫌！」

「は？」

「アーニヤ」

「へ？」

「アーニヤって呼んで」

「え？」

「呼んで！」

「あ、アーニヤ」

「……………」

返事もなく表情もあまり変わらなかったが満足しているようだった。その後、ナナリー、スザク、アーニヤ、そして僕で折り紙をした。

そして暫くして、そこにスザクを探しにきたジノ・ヴァインベルグ卿が来て、

「失礼します、殿下。ここにスザクがいると聞いてきたのですが…」

お、アーニヤにシルバ卿までいるじゃないか。  
スザク何やってんだ？」

「折り紙だよ……あの……重いよジノ……」

「あのアーニヤ……」

「なに？……」

「ヴァインベルグ卿っていつもあんな感じ？」

「そう……いつもあんな感じ……何度言っても直らない……」

「そうなんだ……」

「なんだ、アーニヤ、何時の間にシルバ卿と仲良くなったんだ？」

「さつき……」

「ライ……ここは？……」

「殿下に教わってたんじゃないのか？」

「はじめはそう……でもライは殿下も知らない折り紙を知ってた。だから……」

「なるほど、で……今、何作ってるんだ。」

「桜の合作……」

「合作？ 何だそれ。」



「一枚で出来ないから。みんなで一つずつ作って合わせるの…」

「ジノさんもいかがですか？」

「よろしいのですか？ 殿下」

「はい。パーツが5つ必要ですから…」

「ライさん、ジノさんに教えて差し上げて下さいますか？」

「ヴァインベルグ卿に僕が？」

「ええ、お願いします。先生。」

「分かったよ。ナナリー」

「なんか、私だけLeft Outって感じだな…」

「そうだ、こうしよう。シルバ卿！ 私は貴公をライと呼ぶ！」

「あ…あの…ヴァインベルグ卿？」

「ん〜、硬いな〜、ファーストネームで呼んでくれよジノって、

あつ、あと敬語もなしにしよう。なあ、ライ！」

困ったな…三人の方に顔を向けると三人ともそれぞれの顔をして  
いた。

アーニヤは声を出さず『無駄』と口をつくっていた。

スザクは、ニコニコとこちらを見てた。あの…僕、困ってるんだ  
けど…

ナナリーはなんだか嬉しそうだ…

まるでアツシユフォード学園の生徒会に戻ったようだ。楽しいな…

「…わかったよ、ジノ。」

この後、すぐにみんなで桜を作って合体させて見た。

「何だが少し、不格好なところが…あるようなのですが…」

「殿下、それは、ジノが…」

「私がいけないのか？」

「事実…」

「確かにね…」

「スザクまで…！」

「まあまあ、初めてなんだし…豪快に折れてるじゃないか」

「そう、それ！ ライいいこと言った！」

楽しかった…嬉しかった…

僕にまた、守りたいものが増えたみたいだ…

壊さないようにしなくちゃ…この世界を…みんなを…

## 06話（後書き）

ナナちゃん登場です。

かわあいいですなナナちゃん。

過去に書いた（HDの残骸）の約3分の1まで放出しました。

えっと、まだ読んでくれる人いますか？

読んでくれる人がいなければ、このままフェードアウトするんですが…

## 07話(前書き)

ライ君のKMFが出てきます。

新型です。

ランスロットクラブを魔改造です。

## 07話

僕がラウンズに就任してから数か月：

僕専用の機体がないため、僕の仕事は主に部隊指揮や書類整理など…  
各地へ飛んで他のラウンズメンバーとは一通り作戦を共にした。

唯：Knight Of Oneビスマルク・ヴァルトシュタイン  
卿だけは、

統治している国があるためなのか、あまり作戦を共にしていない。

歯がゆいな：KMFがないと戦場に出られない。かといって、量産機である他の

KMFを使うと、僕の操縦技術にKMFがついてこれないらしく、  
外見は無傷だが

中身がガタガタのボロボロになってしまう。

チューンはするがそれもその場しのぎでしかない。

日々そんなことを考えていたらついに、ロイドさんから連絡がきた。

『 ついにできたよ。君のKMF、んふふん 』

シミュレーションによる武装のテストを行っていたから  
武装や装備に関しては、熟知している。

だが、実際のとてみないと分からないこともある。

そこでこれから、テストを兼ねた模擬戦を行うことになった。

相手は、開発部が同じキャメロットのスザクと行うはずだったが、  
ジノとアーニヤがどこからかそのことを聞きつけ、



『では、これからKnight Of Phantomライ・シルバ卿専用KMFの実動稼働試験を行います。各機指定の位置についてください。…それでは試験開始します。』

『じゃあ、私から行かせてもらおう!』

『ジノ…ズルイ…』

『ライの機体も接近戦しようだから仕方ないだろ…』

『おっ、ライ、背中のパーツ展開できるのか?』

『羽?…左右に4枚ずつ…計8枚…』

ジノの駆るトリスタンがKMモードで鶴嘴型MVSを構え突進してくる。

空に上がり、回避する。

『あれ、どこへ行った?』

『上だ!!ジノ』

今度はスザクのランスロットがMVSを2本を構え切りかかってくる。空へ回避した直後の絶妙なタイミングなので回避することは不可能だ。

なら…真っ向から受け止める!!

受け止められたが、その後のスザクのトリッキーな攻撃が続く…ふとその攻撃が止んでランスロットが離れた…なんだ？

左舷からロックオンされた！！ モルドレットか？！  
しまった？！

「なんだ…つまらない…」

これで…お終い…」

ライのKMFが完成したから、面白そうで模擬戦に割り込んだのに…彼の指揮能力は高かったけど…操縦技術は聞いていたほどじゃなかった。

「撃墜判定…出ない…何で？」

『アーニヤ未だだ！！』

あれ…いつの間にか被弾判定が…両腕の関節部分から切断されてる…何で？

『アームストレイム卿、被弾。フィールドから離れてください。』

「何で？ 損傷は軽微、未だできる。」

『今回は実動稼働試験なので被弾判定は最大にして在ります。  
モルドレットは機体中破により戦線離脱との判断となります。』

未だ納得できない…でも知らない間に両腕がやられたのは事実…  
ちよっと悔しい…スザクとジノは未だ戦つてのに…



あれ…ライのKMF…さっきと色が違う…そう言えば名前なんて言うんだろ…  
後で聞いてみよう…

ジノ…本気出して…でも全部回避されてる…  
スザクの攻撃も…全部防がれてる……すごい…

さっきまでの機体のスピードが違う。かなり早い…トリスタンを超える機敏性…

でも…見える…だけど私がやられた理由が分からない。

あっ、色が戻った…

「スト~~~~~ッブ!! 模擬戦終了!!」

『何でだ?! ロイド伯爵? やっと面白くなってきたのに!』

「エナジーがもつないんだよ」

『はあ、こっちはあと50%あるぞ?!』

「とりあえず、降りてきて、データ整理もしたいし…  
説明もするよ、セシル君が…」

「私ですか?」

「僕は忙しいからね、んふふ」

ロイド楽しそう…

「それで、あの背中の武装は何なんだ？  
棺桶みたいな形のヤツ！」

「それは、私の考案したエネルギーウイングのプロトタイプです。」

「エネルギーウイング？ プロトタイプ？」

「はい、ブレイズルミナスのシールドを転用したエネルギー膜を展開し、

巨大なエネルギー翼を構成する機構になってます。

完成すれば今のフロートシステムをはるかに凌駕した高速飛行と旋回能力を実現できます。そして、このウイングによる斬撃や高出力の機体防御が可能です。

唯、まだ開発中でエネルギー効率や発生機構がまだ完璧じゃなくて、その出力を出そうとするとエネルギー効率が悪くてすぐエネルギー切れするの。

また、ある程度の安定を得るための基礎となるプレートが必要があります。

最終的には、そのプレートも必要なくなる予定なのですが……」

「ということは、未だ完成してないんだろ？」

「完成はしていませんが、ライ君の操縦技術に耐えうるレベルはクリアしているので、ロールアウトしました。通常使用に問題は  
ありません。」

勿論これからの研究により、エナジーウイングも改良されていきます。」

「色…変わったのは…」

「それはエネルギーを収束しきれずに拡散したエネルギーが周辺の光屈折率を変えたために起こったの。」

「アーニヤを仕留めたMVSは？ ありえない動きしていたぞ。」

「私…MVSでやられたの？」

「うん、ライの放ったMVS2本がピンポイントにモルドレットの肩関節部に…」

「でも、あの後もライはMSV持ってた…」

「それは、背中中のエナジーウイングプロトタイプがMVSを格納しているバインダーと一体の物なっているからですよ。」

「ライ君は直接バインダーからMVSを射出したんですよ。」

「でも…私の視界に入ってた…」

「それは、ライ君がアールストレイム卿の視界外から攻撃をしたため…」

小型のブースターを取り付けたMVSで、射出した後、3度まで方向を変えることのできるハーケンブースターを応用した特別製なんです。

まだ名前はないんですけど取敢えず、

The preliminary program operation MSV

略してP2OMSVと呼んでいます。」

「へえ、便利だな。私にも付けてくれよ。」

「んふふ、たぶん 無理だと思うよ。ライ君以外は、」

「ロイドさん！ もういいんですか？」

「うん 一区切りついたからね。」

「ロイドさん、ライ以外使えないって、何故ですか？」

「それはね、彼の能力に関係があるんだよ。」

「能力ですか？」

「そう、『能力』！！ 彼のKMF操縦技術は勿論すごいんだけど、加えて…」

指揮能力と行動予測の高さが関係しているんだよ。」

「つまりは？……」

「MVSの動きは射出するにプログラムを入力することで制御しているんだけど…」

シミュレーターの時点でスザク君に試してもらったら使いこなせなかった。

ドルドシステムを利用することも考えたんだけど…」

ラウンズ級が相手だと、どうも決定打に欠けてね。」

「なるほど…ライだからこそできる。芸当ってことだな。」

「流石ライだね。」

「僕を煽っても何もでないよ。」

「事実…ライはすごい。」

「アーニヤまで…僕はそんなにすごいくないよ。」

「じゃあ、私は…すごくない人に負けたの？」

「うっ…それは…」

「ははは、今回はライの負けだね。」

「アハハ、そのようだな。」

「はい…僕はすごいです…」

「他の武装は？　ライはMVSとエナジーウイングしか使ってないけど、

射撃武器はないのか？」

「ありますよ　外部武装になるけど…VARISの改修型が…  
長距離モードと速射モードの2タイプで使い分けができるように  
したおかげで

威力は落ちたけどライ君には有効な武器になってるよ。」

「それだけか？」

「後は、両腕と腰部にスラッシュシューハーケンが4基、あつ、あとライ君が依然乗ってた蒼い機体の輻射波動のエネルギー展開機構を利用したフィールドを展開する特殊武装ニードルブレイザを両膝に……」

「遠距離…武器は？」

「VARRIS改修型があるだろ。忘れてたのかアーニャ？」

「覚えてる…そうじゃなくて…高出力のヤツは…」

私には、シユタルクハドロン。ジノには、ハドロンスピアー。スザクには、ハドロンプラスター。…ライには？」

「そう言えば、今のところないですね。」

「必要ないんだよ。ライ君にはね。」

「どういうことだ？」

「ライ君の能力に関係があるんだけど。」

「そうか、ライの指揮能力が高いから、部隊の指揮を執ることが多い。」

「それも前線で……」

「なるほど距離をとって戦うことはあまりないってことか。」

「まあ、正直に言うと、高出力の武装は大きくなるから、彼の高速戦闘についていけないからなんだけど。」

これは、スザク君のランスロット・コンクエスターにも言えるけどね。」

「最後の質問…ライのKMFの名前は？」

「おお、そう言えばまだ来てなかったな、スザクは知ってるか？」

「僕もまだ、聞いていないな。名前は何ですか？ ロイドさん」

「はじめは、ランスロット・クラブって名前にしようと思ったんだけど…」

セシル君が…『皇帝陛下からKMF製作の命を受けたんだから皇帝陛下が』

名前をお付けになるのでは？』って言われて…確認取ってみたら…『クロウ・クルワツハ』という名前を頂いちゃってさ…」

「クロウ・クルワツハ…ライ、それって…!!」

「うん…ものすごい名前頂いたよ。ははは…」

「意味が…あるの？」

「知らないのかアーニャ？」

「僕もだよ。」

「スザクもか。まあ、スザクは仕方ないか。」

「僕が簡単に教えてあげるよ。スザク、アーニヤ。」

「ありがとう、ライ。」「ありがとう……」

「あまり記録は残ってないんだけど、『クロウ・クルワツハ』はある神話に

出てくる神の名前でね。戦いと死の神と言われている。

『クロウ・クルワツハ』は他の様々な神々を惨殺した神なんだよ。

」

「そして、『クロウ・クルワツハ』の怒りを鎮めるために、多くの生け贄が捧げられたとも言われる。」

「……」

「ジノ…何で知ってるの？」

「私が、知っていたらいけないのか？」

「ジノらしくない……」

「確かにらしくないね……」

「スザクまで…ライ何とか言ってくれ。」

「……」

「ライ…！ まさかお前まで…！」

「……ごめん……」



「ひどいなみんな、少し落ち込むぞ。」

「その方が静かでもいい…」

「アーニヤ！！ そんな追い打ちをかけるようなこと…」

「遅いみたいだよ。スザク、ほら…」

ジノが屈んでいて、一回り小さくなっているような気がした。

「ジノ…小さくなった…」

「私はそんなポジションなのか……」「はあ……」「

スザクとライは息ぴったりでため息ついていた。

今のジノが面白いから携帯で…

「記録……」

「それ、ブログに乗せちゃダメだよ。」

ライに釘を刺されてしまった。つならない…

でも、あとでノネットには見せよ…

## 07話（後書き）

ライ君はやっぱり強いですね。

まあ、単純に、機体性能と情報の差ですが…

さて、皆さんライ君の機体について思うところ上がると思いますが…  
その怒りはお納めください。

所詮、私のようなものが書いた作品に出てくる機体です。

ほかの作品からのオマーージュしかありません。

ご存じのとおり、痛みを感じないあの人が搭乗する『ヴァーダント』  
さんです。

当初、オマーージュしていたのは、P3に出てくる『タナトス』さん  
でした。しかし、棺桶の中に剣という案で強行した結果、やっぱり  
『ヴァーダント』さんよりの機体となてしまいました…

誰か「クロウ・クルワツハ」描いてくれませんか？

すみません。メカは苦手なもので、私では書けません。

よろしく願います。

## 08話(前書き)

コメディーを混ぜてみました。

そして、ライ君。流石「フラグ1級建築士」ですね。

「幻の美形」の効果もあいまって、ラウンズの女性を全て虜に…

ライがKMFに乗って戦場に出るようになってから、私はいつもライと作戦を

共にするようになった。重装甲の砲撃メインの私のモルドレッドとライの

駆る接近戦格闘メインのクロウ・クルワツハは相性がいいらしい。

ライと作戦をする上で、ライはいつも作戦指揮を執っていた。彼の指揮は、

とても正確で適確だった……でも、つまらない……

ライは指揮を執っているとき、輝いているように見えた……

面白いのかな……そう思って指揮の勉強を始めた……モニカやノネット……一度ジノにも聞いてみたけど、それは間違いだった……

勉強始めてみたけど……面白くない……

でもライの考えてることがわかるようになった。それは面白い、だから続ける……

でも最近ライが私に指示を出してくれない……

何で……作戦以外でも素っ気無い気がする……

昨日の作戦後も『お疲れ……』の一言だけ……

その後、彼は、他の各地に派遣されてるジノやノネット達に次々と通信して作戦の

『僕だったらこうします。』と前置きを置いて作戦を説明いしている。

私には、あまり話してくれないのに……何で……？

やっぱり、あれがいけなかったのかな……

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

2週間前

「ライ…指揮楽しい？」

『えっ？ どうしたのいきなり？』

「ライだけずるい…」

『は？』

「今日は私の番…好きにさせてもらっ…」

『あっ！！ 待ってそっちh』

通信のスイッチを切る。 onにしていればきつとライは『戻れ！』と叫び続けると

思う……うるさい…今日は私の好きにさせてもらっ…私もラウンズ…

ライよりも先輩…

モルドレットを戦線の一番進んでない場所に向けて進める。これくらい私が行けば一気に戦線を進めることができる。

そう思って向かってついてみたら、サザーランドが一定の距離を取

ってそれ以上  
進もうとしない。おかしい…ライが苦戦している？ 珍しい…  
停止しているサザールランドを飛び越えてその空域に飛び込む。

すると三方から砲撃がくる。よける必要はない。ブレイズルミナス  
を展開して

砲撃が止んでから砲台を潰す。簡単…後でライに自慢してやる。  
砲撃がミサイルから散弾に変わった…そんなの利かない…  
でも一向に止む気配がない。

各所に設置されている砲台が集中して私のモルドレットに砲撃して  
くる。

これじゃあ、攻撃に移れない。

どうしよう…身動きが取れなくなった…エナジーは、未だあるけど、  
これが切れたら……変なこと考えちゃった。でも…本当に…

こんな事を考えていると、見覚えのある閃光が砲台の一つの命中す  
る…

ライ？ 周囲を見渡すが彼の機体はない。センサーで確認している  
と、

私飛び越えてきたサザールランドの上空で狙撃している。

VARIIS改修型ライ特有の武装…通信をonにする。すると…

『…ニヤー！…アーニヤー！…』

「っ！」「びつくりした。！！」

『やっと繋がった…アーニヤー！ シュタルクハドロロンあと何発撃

『てる？』

「え？」

『何発撃てる？』

「えっと…1回…出力を絞れば…ギリギリ3回。でも、身動きできない…」

『3回か…厳しいな…』

いけるか？ アーニヤこれから言う僕の指示に従って！ いいね？』

「分かった…」

『これから僕がエナジーウイングを展開してモルドレッドの盾になる。』

その後エナジーウイングのプレートを一つ切り離す。

アーニヤはそれをシュタルクハドロンで狙撃して…

一枚目のプレートに続いて30秒後にもう一枚プレートを切り離す。

それも、狙撃して！ わかった？』

「了解………」

ライはモルドレッドの正面に向きあう位置に来てエナジーウイングを展開して、

先ほどから私を襲っていた散弾から解放した。

『行くよ、アーニヤ』

「OK」

ライは右のエナジーウイングを切り離した。  
一瞬バランスを崩したように見えたが問題なく立て直した。

私はライの指示通にエナジーウイングを狙撃。  
当たった瞬間シユタルクハドロンが拡散したそれも四方に…

『何これ…』

「もう一ついくぞアーニャー!!」

ライは左のエナジーウイングを切り離した。  
もう一枚も狙撃…これもシユタルクハドロンが当たった瞬間、拡散した。

拡散したシユタルクハドロンで敵の砲台の大半が破壊できた…  
でもこれじゃあ味方が…  
レーダーで確認してみると味方はこの戦域から撤退していた。

「何時の間に……………」

ライの機体を肉眼で確認しようと正面のモニタを見たがそこにいるはずの

ライの機体ク로우・クルワツハがなかった。

「何処に?……………いた!」

残った砲台を全部つぶしてる…



「色が違う…リミッター…外した？」

眺めているうちに色が戻った…

『アーニヤ、回収して？』

「えっ？」

『エナジーが切れた…モルドレットで回収してくれ…』

「了解…」

その後、ライは戦艦に帰還してすぐに部屋に籠もってしまった。

暫くして、出てきたと思ったたら小型の輸送船でクロウ・クルワツハと共に

どこかに入ってしまった。

戦艦の艦長の話によると別の戦場に向かったとの話だった

「何も話せなかった…」

…時間軸回歸…

今は束の間の休息…ライはいつも忙しそうにしている。

ライは戦闘も書類整理もできる。しかもかなり正確に…だから頼られる。

この前もジノとスザクの書類も彼がやってた。私もその時に、自分の領地の

書類を混ぜておいたら見事に一緒に処理されていた。

気づいてない？ ライはどこか抜けている。優秀なのに……でも私のことは…

「どうした？ アーニヤ、元気ないじゃん。」

「ジノが元気すぎるだけ……」

「そんなこと言つなよ。これが私なのだから、で、どうしたんだ？」

「何でもない……」

「何でもないってことないだろ？」

「何でもない……！……」

「怒ることじゃないだろ、いつもと様子が違うから気になったただけだよ。」

「怒ってない……」

「何時ものお前らしくないぜ。」

「だってライが……」

「ライ？ ライがどうかしたのか？」

「何でもない……」

「はあ、何か分からないけど、会ってくればいいじゃないか？  
今、ライはラウンジにいるはずだ。何しているか分からないけど  
…」

「…行ってくる…」

「はあ？！」

私は走り出していた。ライのところへ

あれ…ラウンジって何処の？…

私はジノのところに戻った。ちょっと恥ずかしい…

「ジノ！！！」

「あつ、戻ってきた…」

「何処？」

「何が？」

「何処のラウンジ？」

「ああ、ライか。8階のラウンジだよ。」

「分かった。行ってくる。」

「こんな素直なアーニャは初めてだよ。」



「何って書類整理だよ。」

「今は休暇なのに何でやってるの?」

「スザクの書類を手伝ったことがばれて、ジノが私のもよろしくって言われて、

その中に、アーニヤの書類が混ざってて……」

「うっ……」

「いつの間にかノネットさんとモニカまで僕に任せるようになって……  
ブラットリー卿やエルンスト卿の書類もチラホラ……  
終いにはヴァルトシュタイン卿も……」

「何で?」

「は?」

「何で断らないの?」

「さあ、何でだろ? 何となくかな……」

ライはこちらを見ずに返事を返す。

「私を避けるため?」

「へ?」

ライはやっと私を見た……

「私が嫌いだから…私の顔を見たくないから…」

「え？ いったい何言ってるの？ アーニヤ」

「私がこの前、指示を無視したから？ だから私に指示を出してくれないの？」

「あの…状況が読めないんだけど…」

「ヤダ！！ 嫌いにならないで…」

自然と涙が出て視界がぼやけ前が見えない。ライの顔も姿も見えなくなつた。

「アーニヤ」

私は身構える。突き放されるのが怖い。ライに嫌われたくない。

「どうしたの？ いつもと様子が違うよ。熱でもあるの？」

「いつもと違うのはライの方！！」

「何が？ ホントに大丈夫？」

「ライは私に指示をくれない。私がライの指揮系統の中に入っていない。」

「アーニヤ！ それは！」

「ヤダ!!」

「話を聞いて!! アーニヤ!!」

両肩に今まで感じなかった圧力が感じる。丁度人の手と同じ大きさの圧力が…  
たぶんライの両手が私の肩に乗っているのだろう。

「僕がアーニヤに指示をしないのは必要がないからだよ!」

「やつ!!」

聞きたくないそんな話…ライの手を払おうとする。  
でも肩からライの手は離れない。

「アーニヤに指示は必要ない。アーニヤは常に僕の考えた通りに動いてくれる。」

「だからアーニヤに僕からの指示は必要ないんだ。」

当然だ、私はライの作戦の意図を考えその通りになるように動いている。

指揮の勉強をしたおかげである程度ライの考えることが分かるようになった。

「アーニヤは指揮の勉強をしているんだろ?」

「え?」

「ジノから聞いたよ。指揮の勉強をしているんだろ?」

「うん…」

「アーニヤは指揮能力があるよ。僕の考えた作戦についてきちんと理解して

僕が考えたよりも効果的な行動をしてくれた。」

「でも…この前の作戦で…」

「確かにこの前の作戦のときはびっくりしたけど、何とも思っていないよ。」

「ホント？ 私のこと嫌いじゃない？」

「嫌いじゃないよ…ほら、涙を拭いて…」

ライは、私が流した涙を優しく指で拭ってくれた。そこに突然ドアが開いて現れたのは…

「お〜い、ライ、私の書類の処理は済んでいるか？」

「ごめんねライ、私まで頼んじゃって…」

「ノネット、モニカ…」

「おいライ、お前…なにやってるんだ…」

ノネットの口調が先ほどの入ってきたより怒気がこもっている。

「えっ、何がですか？」



「『何がですか？』じゃあなああああい！！！！」

ノネットがライに向かって突進していった。

モニカは私を抱き抱え『大丈夫だった？』と聞いてくる。何がだろ  
う？

ノネットの方を見るとライを組みふせていた。

「貴様というやつは！」

「もしかして、書類をほったらかしてアーニヤと喋ってたからですか。」

「惜しいが根本が違ぞ！！ ライ。」

僕は今、キヤメロットにいる。以前、ライとアーニヤが派遣された戦線で、

使った戦術、エナジーウイングの出力を不安定にした上でプレート  
を切り離し、

それをシユタルクハドロンで打つことで、乱反射したシユタルクハ  
ドロンで

敵を殲滅するという戦術：咄嗟にライが考えたモノだがその効果は  
絶大だった。

ライ自身はある程度反射して威嚇ができると考えていたが実際は上  
記のとおり…

『もし、ライの考え道理になっていたとしたらどうしたんだ？』と  
聞いたら、

リミッターを外して一気に砲台を潰そうと考えていたらしい…

作戦から帰還してきたライがロイドさんに謝っていたがロイドさんは逆に

『面白いデータが取れたからいいよ』と言っていた。

現在、そのデータをもとにした新しい武装のシミュレーションを行っている最中

「ん〜、なかなかうまくいかないね〜」

「あの時切り離れたエナジーウイングのプレートがあればデータが確認できるんですけど…」

「不安定な状態でシユタルクハドロンの直撃を受けたんだ。あとかたもないよ」

「スザク君、もう長い間やってるけど、大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

「あら…」

「どうしたんです？ セシルさん。」

「帰還しているラウンズ全員に招集がかかっているわ。」

「何処ですか？ すぐに行きます。」

「それが、8階のラウンジに…」

「ラウンジにですか？ それにそこには確かライがいたはずですが…  
とりあえずいつてきます。ロイドさん。いいですか？」

「仕方ないね。今日はもう終わりにしよう。納得いかないけど…」

「では、言ってきます。」

8階ラウンジ…

中に入ってみるとそこには、ジノ、アーニヤ、ノネットさん、  
クルシェフスキー卿、そして…正座したライの姿があった。

「あの…何かあったんですか？」

「来たか枢木！！ 実はライがな…」

ノネットさんはライをものすごい形相でにらんでいる。  
モニカはアーニヤを抱きかかえてるし…

「ジノ、どういう状況？」

「私にもわからない。呼ばれて来てみればこんな感じだった。」

「モニカ、ヴァルトシュタイン卿とルキアーノそして、ドロテアは  
？」

「作戦に参加中でここにはいません。」

「そうか…ではこれより、ライの審問会を行う。」

まずはアーニヤから状況の説明をもらう。いいなアーニヤ？

「あの「黙りなさい今のあなたに発言権はありません!」…すいません。」

ライが何か話そうとしたがクルシェフスキー卿にさえぎられてしまった。

「ほら、アーニヤ話して…」

「ライがここにいるってジノから聞いて、ライに会いに来たの…」

アーニヤの眼が赤いような気がする。アーニヤの瞳はもともと赤に近いだから  
はつきりとしたことは分からないが赤いような気がした。

「そしたらライは書類整理してて…私が来たことに気がつかなくて…」

「それで…」

「私は何してるのって聞いた…そしたら書類整理って答えが返ってきた。」

「まあそれはそうだろうな…」

「黙ってなさいヴァインベルグ卿!…」

「休暇なのになんでって聞いたら…ノネットたちの書類を処理してるって…」

「……」

何でライがノネットさんたちの書類をやってるんだ？  
僕もライに書類の整理を手伝ってもらってるけど……

「何で？つて聞いたら……分からないって……」

ライらしい……ライは頼まれたら断れないから……

「最近ライは、私に作戦の指示を私にしてくれないから……嫌われたと思  
つて」

ライが作戦の指示を出さない？ 珍しいな……

「休暇のときに私の顔を見ないためにやってるの？つて聞いたら……」

ライはいつも忙しいからね……

「違つつて……作戦の指示を出さない理由を聞いたら……」

それは僕も気になる……

「私がライの考えてることが分かつてるって……指揮能力があるって  
……」

ライに指揮能力を認められるとはすごいなアーニヤ……

「最後に私のこと嫌い？つて聞いたら……嫌いじゃないって……」

「「それで……」」

「それだけ…」

「「それだけ？」」

「それだけ…」

「じゃあ、アーニャは何で泣いてたんだ？」

「そうよ、それだけでああなたがなくなんてありえない。」

「分からない…ライに嫌われたくないって思ったら…涙が出てた…」

「……………」

「あの…結局ライがどうしたんですか？」

「鈍いなスザク…アーニャはライがスキってことだろ。なっ、アーニャ」

「私は…ライがスキ？」

「なるほど、何時も仲がいいし、KMFの相性もいいしね。」

「スザク…お前ってホントに…」

「なんだかジノに、かわいそうな目で見られた。何だいジノ？。」

「スマン…！ライ」「ごめんなさい…！ライ」

「いえ、構いませんよ。誤解が解けたなら…」

「償いはする。何でも言うてくれ！ 私たちにできることなら何でもするから」

「大丈夫ですよ。ホントに気にしないでください。」

「それでは、こちらの気が済まない。」「そうです。」

「ん〜困ったな…なら僕と同じ姿勢を同じ時間するといっつのはどうでしょう?」

「それで償いが済むなら…」「やります!」

「ライその姿勢は…」

「まあ、このくらいなら…大丈夫だと思う…」

「ん、何だあの姿勢は何かあるのか?」

「につぼ…イレブンに昔からある姿勢で『正座』って言うんだ。」

「セイザ?」

「精神集中の鍛練や姿勢正しい座り方として用いられるんだけど…」

「便利じゃないか精神の鍛練ができるなんて…」

「それはそうなんだけど…」

「どづかしたの?…」

「やってみればわかるよ…」

「おお、それじゃあ、やってみようぜアーニャ!…」

「うん」

「ほら、スザクも!…」

「ライも…やる?…」

「いや、僕がやると、ノネットさんとモニカがやる時間が増えちゃうから…」

「やらないの?…」

「わかった…やるよ。でもこの時間はノーカウントってことで…  
そうだ! 飲み物と軽い食べ物持ってこよう。ただの正座だとつらいから…」

それから開始しましょう。それじゃあ取ってきます…」

「待って…私も行く…」

ライとアーニャは、飲み物と食べ物をとりにラウンジから出て行った。

ふう〜何だか怖かったなノネットさん…いつもは姉御肌のいい人なんだけど…



今日は何だったんだ。書類整理してたら、アーニヤが来て泣き出し、後に、ノネットさんとモニカが来て組みふせられるし、誤解が解けたと思ったら

みんなで正座することになったり…

今日は何かのイベントか?! カメラがどこかに隠れてたりするか?

とりあえず早く飲み物と食べ物持ってみんなのところへ帰らないと…

「アーニヤはこのクッキーとビスケットを運んで、僕は飲み物の方を運ぶから」

「分かった…」

ラウンジに戻ると4人は既に始めていた。

僕とアーニヤが出てから5分と経過してないのに…

「みんな始めてる…」

「もう始めさせてもらっているぞ。先に始めないとライとの差が縮まらないからな。」

「ノーカウントと言ったじゃないですか!」

「いえ、はじめはしっかりとしなさいといけません。」

「モニカまで…どうしようスザク…」

「気が済むまで待とうよ……」

「そうだね」

「靴脱ぐの？」

「そうだよ。脱がないとだめなんだ……  
つらくなったらやめていいからね。アーニヤ」

「うん、でもライと同じ時間やる。」

「……………」

僕とスザクは顔を見合せた。まあ長くても10分くらいでやめるだろ……

……………5分後……………

「これはきついな！ 私はもう限界だ。」

「初めてだからね。仕方ないよジノ。」

「私も…痛い……」

「崩していいよアーニヤ」

「うん……」

「ノネットさんとモニカも足を崩していいですよ。」

「いやこれは、ケジメがな…」

「最後までやります…」

……さらに10分後……

「やっと折り返し地点…」

「もうしっかりと誠意を見せていただきましたから崩していいですよノネットさん。ほら、モニカも…」

「いえ、ここまで来たのですから最後まで…」

「とてもつらそう…ノネットとモニカ…」

「ああ。でもスザクとライは平気そうだな…」

「僕は、ほら…慣れてるから…」

「ああ、なるほど、じゃあ、ライは？」

「僕？ 僕は…以前エリア11にいたときがあったからその時に…」

「へえ、ライはエリア11にいたことがあったのか。」

「そう言えば、シルバって性も珍しいよな？ 何でだ？」

「え〜と…あまり詳しくは話せないんだけど…僕はもともと性がなくって…」

「性がない？ ……何故？」

「僕の親が少し…訳ありで…」

「話してくれないの?」

「時が来ればそのうちにね…」

「ダメ?………」

「うつ……」その眼で見るのは反則だよ。同じことの繰り返しにならないかな。

「ライにも事情があるんだよ。」

「まあ、そつだな話したくないものを話させても後味悪いしな。」

「分かった…でも…いつか話して…」

「うん…いつかね…」

「必ず!!!」

「…分かったよ…」

「話が戻るんだけどライの性の話しは?」

「ああ、そうだったね。実はIDを持っていなかったんだよ。」

「IDがない? どういう…そうか、事情があるんだっただよ…でもライはブリタニア人でいいんだよな?」

「……………」

「何で黙ってたんだよ？ 気になるだろ。」

「ごめん。僕も少し気になって…」

「何が？……………」

「ブリタニア人とは何か？ってこと。」

「そんなのブリタニアで生まれればブリタニア人だろ？」

「植民地で生まれた人は？ ナンバーズの人がブリタニアで子を産んだら？」

「それは…分からない…」

「血縁…」

「亡命とか、さっき言ったこともあるからそれも正確じゃあないと思う。」

「そうすると言語も違うな…」

「土地…血縁…言語でもない…」

「心…」

「スザク今何て言った？」

「心って言ったんだよ。」

「心か…なるほど…それなら分かるような気がする。」

心か…じゃあ、僕はブリタニア人でもなければ日本人でもないのかもな…

「ライ…」

「えっ」

「どうしたの？」

「様子がいつもと違う…」

「そんなことないよ…」

「違う…悲しい顔…」

「そう見える？」

「見える…」

「…いつか話すよ…」

「また…いつか…」

「いいじゃないか、いつか話すって言っているんだから。なあ、スザク」

「気になるけど仕方がないね。話すときには僕にも聞かせてね。」

「勿論私たちにも聞かせてくれるんだろ？」

「勿論ですよ。 あっ、そろそろ時間ですよ。」

「おっ、本当だ。何時の間にか、こんな時間だ。」

「お疲れさまでした。」

「ついに時間か……」「長かった……」

「「立てない……」」

ノネットさんとモニカがたとうとしたが、足がしびれているようで二人とも、

両手と両膝をついていた……

仕方がないな……僕は二人をソファに座らせることにした。

「よつと……」「ら、ライ、お前何を……!!……」

「ほら、暴れないでください。ノネットさん。」

「お姫様だっこ……」

「ソファに座ってください。しばらくすれば治りますから……」

「「「「「「……」」」」」」

「次は…モニカ…」

「待って！ 待ってください。ちょっとまっ…」

「よつと…あつ、モニカまで暴れないで…落ちちやうから…」

「これでよし！！ 二人とも足を楽にしていればすぐに治りますか  
ら…」

「安心してください。」

「……………」

「ライ…お前は…」

「え、何？」

「何？じゃないだろ…さっきのは流石に…」

「男性としては当たり前だと思っただが…」

「それに、原因が僕にあるんだから当然だろ…」

「いや、だからって…見る二人とも放心状態じゃないか！！」

「え？」

二人を見ると視線がどこに向いているか分からない…

心なしか顔が赤い気がする…あれ、どうしたんだろう？

「二人とも大丈夫ですか？」



「……………」

返事がない……どうしよう……僕何かしたかな？

「あの、ホントにだいじょ「ライ……」何？ アーニヤ」

「私も……」

「え？」

「お姫様だっ……」

「もしもし？」

「ノネットとモニカには、したのに……」

「それは、二人が立てないから……」

「私には、してくれないの？」

「してあげれば……」

「スザク……」

「してあげれば、アーニヤも満足すると思っよ。」

「はあ……分かったよ」

「やった……」アーニヤが何か言っていたようだが良く聞き取れなかった……

「よつと」

軽い、ノネットさんとモニカも軽かったがアーニヤはもっと軽い…  
まあ、当たり前なのだが…

「これで満足した？」

「まだ!!」

「どうしたら満足して」「ライ!!」「気づきましたか、二人とも」

「何をしてる!!」「」

「何ってアーニヤが…」

「お前はさっき私を…今度はアーニヤか?!」

「さっきまでライは、私を…」

「二人とも落ち着いて「や!」ちょっとアーニヤ!」

「まだ…降りしちゃ…ダメ!!」

「私は知らないからな。行こうぜスザク。」

「え。でもそれじゃあ…」

「いいんだよ。ライ達者でな…」

「あつ、ちよつとジノ」

ジノがスザクをつれてラウンジから出て行ったしまった。  
現在ラウンジの中には取り乱したノネットさんとモニカ…

そして、なぜか僕の腕から降りようとしないアーニヤの4人。

ノネットさんとモニカは理由は分からないが僕に向かって取り乱している。

しかも『何故アーニヤが』とか『そこにいるべきは私』だの…解説不能だ…

それを、僕の腕の上で見ているアーニヤは首に両手を回して下ろさせてくれない

自体の収集がつかない…

ああもおおお、誰か助けしてくれええええええ。

「よお、ライ、書類は片付いたか？」

「ブラットリー卿?! 確か作戦中では？」

「つまらねーから、帰ってきた…それよりお前ら面白い事してるな…」

「これのどこが面白い事何ですか?!」

「お前らの大事なものは何だ? そうだライだ!!」

それを私が…「」「黙ってる!!」「」「うぶおあ…」

ノネットさん、モニカ、アーニヤの三人の攻撃を受けて吹っ飛んで

しまった。

せつかくの助け船だと思っただが…一瞬にして肉塊になった…  
まあ…大丈夫だろう…一応『ブリタニアの吸血鬼』だし…再生する…  
…かな…

「ライはいるか？ 頼んでいた書類を…なんだこれは?…」

「エルンスト卿まで!」

「どうなってるんだ？ この状況…」

「実は…(ry)」

「なるほど…まあ、ルキアーノは放っておいてそれは、お前が悪い…」

「そんな!?!」

「ライはいるか?」

「ヴァルトシュタイン卿まで!!」

「何をしておるのだ?! お前たち!!」

「実はな、ライがな…次々に我々に手を出し、終いにはルキアーノを…」

「何?! あれがルキアーノだと?! ライ貴様!!」

「待ってください!! ヴァルトシュタイン卿!!」

エルンスト卿の話には、少し語弊が…いや少しではなくかなり…  
僕の話聞いてください。」

「よかるう…話してみるがよい…」

「はい…実は（ry）」

「なるほど…それは紳士としては当然だな…」

「ですよね…！」

「うむ、ルキアーノに関してはトマトジュースでも与えていれば治るだろ…」

「はあ…」

その後、ヴァルトシュタイン卿の御蔭でこの状況を打開することができた…

後日…4人にプレゼントをすることになったが…

ん？ 4人？ ノネットさんとモニカとアーニヤそれからエルンスト卿…

エルンスト卿？！ エルンスト卿は後からこの状況に介入したのだから

僕がプレゼントを贈る必要はないんだけど…あれ…

まあ、いいか…

## 08話（後書き）

さて、今回の内容とは関係なく。

「クロウ・クルワツハ」の名前をつけた由来について少しだけ…

ランスロット・モルドレッド・ガウエイン・ギャラハッドといった  
円卓の騎士の名を冠する機体が多いので、それに習おうとしたので  
すが「ガレス」がガウエインの量産型として出てきてしまったので…

円卓の騎士たちの名が、ラウンズの機体の名前となるわけではない  
ようだったので…

威圧感のある神様の名前とさしていただきました。

09話・TURN02(前書き)

前話から空気が一転しています。  
ご注意を…

## 09話：TURN02

「何で、呼ばれたか分かってるよね？」

「さあ、何の事だか…」

僕は今、ブリタニア皇帝を介してV・V・に呼び出されていた。

白ロシア戦線…その作戦終了後に皇帝とのダイレクト通信で見たギアスを持つ

皇帝の両目…僕がV・V・の名前を出したとき否定をしなかった…さらに皇帝は『我々の計画』と言った。

つまり、何らかの形で二人は関係がある…それが何なのか分からない…

だが、今回呼び出されたのには思い当たりがある…

僕がラウンズになって、もう二度と会えないと考えていた人物の一人…

ナナリー、彼女はブリタニアの皇女としてブリタニアにいた。

気になって、調べてみたがナナリーはエリア11でブラックリベリオンの少し後に

発見されたそうだ…しかし、そこで新たな謎…ルルーシュがいない。

何時もナナリーのそばにいたはずのルルーシュがいない…彼が一緒に発見された

という記録もない。ナナリーの証言でルルーシュがまだ生存していることが



分かり、捜索隊が出来ている。だがそれは形だけのもので実際は存在しない。

その代りに存在するのは『皇帝陛下直属の機密情報局』……  
ルルーシュを監視してC・Cを捕獲する……そういう命令が出ている機関。

ルルーシュの存在を確認しながら保護しない……むしろ餌としている感じだ……

「惚けないですよ。わかってるくせに……」

「……………」

「黙んまり？ まあ、それでもいいや、僕からの要求は一つ。

『この件について、あまり手を出すな』それだけだよ。」

「僕にとってはこれ以上ない楔だな……」

「良く分かってるじゃないか……君は逆らえない、裏切れない……」

「……………もう、これ以上用はないのか？」

「うん……一応伝えたいことは伝えたからね……」

「そうか……一つ聞きたい……ロロって誰だ？」

ルルーシュに妹はいたが弟はいなかった。だけど今のルルーシュのそばには

ロロという名の少年がいる。その少年に僕は記憶がある……僕がまだ

騎士団に

所属していたところに僕の単独行動でゼロとカレンの捜索に出たことがあった。

その時僕は一度この少年に殺されそうになっている。

「気になるの？ まあ、教えないけどね…」

教えない…つまりV・Vは何かを知っている。それもかなりの情報をつまりは、

V・V側の人間…そうなる…

「なるほど…ギアス保持者が…」

「流石に鋭いね…でもこれ以上の情報はあげられないよ…」

これ以上の探りは無駄だろう…ギアスの枷によって僕の意味を捻じ曲げられる。

『この件について、手を出すな』この命令の御蔭で僕は、これ以上の情報を

集めることがでなくなった。そして介入することも…

だがまだ今持っている情報をもとに思考を巡らせることはできる…

「それじゃあ、僕はもう行かせてもらおう…」

ロロ…ギアス能力者、そして皇帝も…

機密情報局からの報告書によれば、ロロはルルーシュの弟ということ…

ブラックリベリオン以降のアッシュフォード学園の生徒はほとんどが本国に帰還、そして教師はすべて機密情報局の人間……  
ルルーシュに弟はいない……

しかし、ルルーシュはロロを最愛の弟のように接している……ナナリーのように……

生徒会メンバーは、本国に帰国せずまだエリア11にいるようだ……

つまり、ルルーシュとナナリーを知っているはずのみんながナナリーのことを

気付いていない。むしろ昔からロロがそこにいたような感じ……  
報告書からの情報だけでは判断が難しい……だけ……

これだけの情報からわかることは、『記憶が書き換えられている』  
確証はない……ロロと皇帝、どちらかの能力であると考えられる……  
状況から見てロロのギアスがこれだと考えられる……

いやまで、確かブラックリベリオンときアッシュフォード学園が  
黒の騎士団に占拠された後、アヴァロンが生徒を収容した記録があ  
った。

つまり、事態が落ち着くまで生徒会メンバーも一時的にブリタニア  
本国に  
帰還した可能性がある。記録はない……だけど、ギアス関係だと考え  
れば

その関係上記録は残さない……つまり皇帝のギアスの可能性もある……

まで、そう考えると、嚮団のギアス能力者の可能性もある……  
考え出したらきりが……

……根本的な疑問が残る…なぜルルーシュがC・Cの餌になる？  
C・Cは謎の多い女だ…僕が黒の騎士団に入る切っ掛けとなった  
のもC・Cだ…  
クラブハウスで彼女を見かけたこともあった。それもルルーシュの  
部屋の前で…

あの時はルルーシュにごまかされたが、ルルーシュがゼロだとして、  
C・Cが  
ルルーシュにギアスを与えたのだとしたら…繋がる…一本の線にな  
る…

そうだ！！ 思い出した。『マオ』かつてのC・Cの契約者…

彼は以前、ナナリーを誘拐したことがあった。ルルーシュをおびき  
出すため…

あの事件の前に僕は彼と会っている『泥棒猫』彼はルルーシュをそ  
う言った。

ルルーシュとC・Cは明らかに関係を持っている。

僕が黒の騎士団に所属する経緯となったC・C…

ゼロとC・Cは共にいることが多かった。つまりゼロはギアス保  
持者…

だとしたら…スザクは…まさか…

「すみません。遅れました…」

僕は、V・Vから『あまり、手を出すな』と指示を出された後、  
ラウンズの定期的な会議を行うため円卓の間に行き扉を開けた。

何時もなら世界地図が映し出され戦力の割合や統治などの情報を表示されるが  
今日は…

『私は、ゼロ…日本人よ私は帰ってきた!!』

聞け、ブリタニアよ! 刮目せよ! 力を持つすべての者たちよ!

私は悲しい…戦争と差別、振りかざされる強者の悪…

間違つたまま垂れ流される悲劇と喜劇…世界は名に一つ変わっていない。

だから、私は復活せねばならなかった!

強きものが弱きものを虐げ続ける限り、私は抗い続ける。

まずは愚かなカラレス総督にたった今、天誅を下した!』

「おやおや、いきなりやってくれるね。イレブンの王様は…なあ、スザク」

「……」

「なあ、死んだんだろ? ゼロは…」

「ああ」

「じゃあ、偽物か? どちらにしても総領事館に突入すれば…」

「重大なルール違反だ! 国際問題になるぞ…」

「ゼロを名乗っている以上、皇族殺しだ。EUとの戦いも大事だけ

どろ…」

「どつちも蟻地獄…」

『私は闘う！ 間違った力を行使する全ての者たちと！』

ゆえに私は！！ 此処に合衆国日本の建国を再び宣言する！！』

「合衆国日本…」

『この瞬間より、この部屋が合衆国日本の最初の領土となる！  
人種も主義も宗教も問わない…国民たる資格はただ一つ！！  
正義を行うことだ！』

「これは?!」

「ライ！ 来ておったのか？」

「はい、つい先ほど…しかし、これは?!」

「ゼロが新たに現れたようだ。

EUの方はシュナイゼル宰相閣下が指揮をとっておられるので数  
日中に片付く」

「そうになると、エリア11には、誰かが派遣されるだろうな。

本物のゼロは枢木が捕え、刑が執行され死んだといえど…

ゼロを名乗るのだから、相当の切れ者と考えられる。で、誰が行  
く？」

「僕が行きます。ゼロを殺すのは自分です。」

「私もあのグレンってKMFとやってみたかったんだ。なあ、アーニヤも行くこうぜ。面白そうだしさあ〜」

「ライが行くなら…」

「何でライが出てくるんだよ？」

「ライは私のパートナー…私が彼を補い、彼が私を補う…」

「決めるのは皇帝陛下だろ、二人とも…」

まあ、スザクは土地の関係上確実だと思っけど…」

「僕からも皇帝陛下に頼み込むつもりだよ…ゼロの相手は戦力が欲しい」

不意に会議資料提示用のディスプレイにシャルル・ジ・ブリタニアの姿が映し出される。

「これは、皇帝陛下…！ 何ようでございましょうか？」

それまで姿勢を崩していた皆が姿勢を正し、片膝をつき頭を垂れる…  
勿論僕も体裁としては皇帝陛下の騎士であるから同じようにする…

「よい、頭を上げよ。我が騎士たちよ。先ほどの放送ジャックは見  
たな？」

「はっ、しっかりと」

「では、わかっておるな…枢木、お前をエリア11に派遣する。エリア11での指揮はお前に一任する。EUでの作戦終了後エリア11に向かえ」

「Yes Your Majesty」

恐れながら皇帝陛下、お願いしたいことがございます。」

「何だ、申してみせよ。」

「ゼロを相手にするには戦力が欲しいのです。」

「よかるう。ラウンズの中から数人お前の裁量で選んで構わん。」

「はっ、ありがとうございます。」

「もう一つ。ナナリーがエリア11の総督に就任願が出しておる。ワシはそれを受託した。数日中にナナリーはエリア11に着任するだろう。」

ビスマルク、例のことで話がある。あの部屋に來い。」

「Yes Your Majesty」

「私は、皇帝陛下のところへ行く。今日の会議は終了…解散だ」

そう言ってヴァルトシュタイン卿は出て行った。

「で、誰を連れていくんだ？ スザク」



「ナナリー皇女殿下のこともあるだから…」

「私とライ…これでいい…」

「私も行ってあのグレンと戦ってみたいのだが…」

「皇女殿下のはあまり…会ってない…私とライは時々、折り紙してる…」

「私も折り紙はしたぞ。」

「ジノは数が少ない…私たちは多い…」

「私とライの数はあまり変わらないはずだぞ。」

「4人でいいんじゃないか？」

割って入ったのはノネットさん。

「そうですね。皇帝陛下も『数人』『好きにしろ』と仰ってましたし…」

「EUの方も我々がいれば事足りるしな…」

続いてモニカにエルンスト卿

「いいんですか？ 僕が行かずにアーニヤとジノのパターンもありますか…」

「いいんだよ。最近お前は働きすぎだ。」

「働かせてるのはみなさんじゃないですか……」

「うっ、それは言い返さない……いや……あんな、お前がいるととても便利でな……」

「いつも見かけると頼んでしまうのだよ……あははははは」

「その件でヴァルトシュタイン卿が……」

「『流石に度が過ぎているのではないか？ ライに依存している！』と今日の議題に出そうとするくらいでな」

「そういうヴァルトシュタイン卿も僕にいくつか書類頼んでいただけ……」

「まあ、そういうこともあって思うところありなのだよこちらも……」

「だからどうぞ行ってきてください。」

「書類整理をしなければならぬのがつらいが、お前が来るまでは自分で」

「していたことだからな、いい機会だから始めて見るよ……」

「それってこんな機会がなければずっと僕に押しつけるってことですよね？」

「それじゃあ、エリア11に行くのはスザク、ジノ、アーニヤに僕。スザクこれでいいかい？」

「ああ、問題ないよ。とても心強い。」

それじゃあ、明日の作戦が終了次第、僕はすぐにエリア11に行くから

ランスロットのことはよろしく。」

「よろしくって、一緒に行けばいいじゃないか？」

「ロイドさんのことだからきつといろいろデータの収集とかの作業があって

すぐには動けないからランスロットは置いて先に行くよ。」

「準備ができるまで待つてればいい……」

「確認したいことがあるからね、向こうには……」

「そうか、わかった。僕たちは機体の準備が整い次第エリア11に向かうよ」

あれ…そう言えばブラットリー卿が…

「どうした？ ライ」

「いえ、ブラットリー卿の姿が見えないので……」

「ルキアーノ？ ああ、奴ならまだ、トマトジュースの中だ。」

「はあ？ トマトジュースの中って？ 何故？」

「それはな、まだ奴の体が治ってないからだよ。」

「治ってないって、ブラットリー卿負傷されたんですか？」

「何を言っている？ お前も現場にいただろ。」

「現場って…もしかして…あの正座のときですか…」

「そつだ。あのときすでに瀕死の状態だったようだな、

医療班の奴らもお手上げだったらしい。

だがトマトジュースの中に入れたところ、驚異の回復力を見せ、  
現在もトマトジュースの中で療養中だそつだ。

まあ80%程度まで回復しているようだが…」

ブラットリー 卿ってホントに何者だ？ もしかして、ホントに吸血

鬼なのか？

そんなバカなあるわけなよな…

きつとトマトジュースに見える培養液に違いはない…

10話(前書き)

戦闘？

私には書けません。

ごめんなさい。

誰か助けて・・・

## 10話

EU戦線…

左翼に僕とアーニヤ、右翼にジノとノネットさん、そして中央にスザクとエルンスト卿が展開して、シュナイゼル宰相閣下の下、指揮を執っている。

EU軍が高所を位置取りしているため、いくらKMFでの性能差があっても  
楽に攻略することができない…

『ライ…』

「何だい？ アーニヤ」

『スザクが単独突破したって…』

「流石スザク！ だけど…無茶するなあ。」

『ライ… 私たちも…』

「それはダメ…」

『何で？』

「シュナイゼル宰相閣下の作戦の意図がアーニヤにもわかるだろ。それに左翼の指揮を任されてる僕らが突入してどうするの？」

『ダメ？』

「ダメです。」

『ダメ……』

「そんな声出してもダメ。」

『ライのケチ……』

「なっ、どこでそんな言葉覚えたの!? おっと! E-7班ポイント3まで後退!」

F-6班はその間の援護。追ってきた場合はぎりぎりまで引き込み撃墜しろ!」

『流石……』

「アーニヤもこれくらいはできるだろ……」

『それはライのするごと……』

「じゃあ、アーニヤのS……降伏信号、これで終わりかな。」

『全機、攻撃を停止、その場で指示があるまで待機。しかし、まだ警戒を怠らない。』

「出来るじゃないか……」

『やれば出来る子……』

「それは自分では言うことじゃないよ……」

『それじゃあ、褒めて…』

「着艦したらね…」

『分かった…』

「こちらでもEU軍降伏の意思を確認しました。

ラウンズの皆さんは帰艦してください。

損耗率40%を超える機体または補給を必要とする機体も帰艦してください。」

「了解」「了解」「了解」

- - - - - Yes My Load -  
- - - - -

「さあ、アーニヤ、帰ろうか…って、もういない。」

先ほどまでいたはずのモルドレッドがいなくなっていた…

周りを確認して見ると、母艦に向かってモルドレッドの最高速度を出していた。

そんなに急いで帰らなくても…

『ライ、速く…』

「はい、はい…」

僕も母艦に向けてクロウ・クルワツハを駆る。



・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

母艦に着艦させるなり、アーニヤが僕に向かって走ってくる。  
何だどうかしたのか？

「ライ」

「何？ どうかした？」

アーニヤ『んっ』と言って桃色の髪をまとった頭を僕に向け背伸び  
をしている…

えーと…これは撫でろってことでいいのかな…

アーニヤの頭をなでる…時間にして1秒程度…もう充分だろと思っ  
て手を放す。

けど、アーニヤは不機嫌なようで…僕の顔を睨んで…

「これだけ…」

「え？」

「もっと…」

「何？」

「もっと撫でて…」

僕は、もう一度アーニヤの頭を撫でる…先ほどより長い時間。アーニヤの顔を見ると目をつぶっていた…猫みたいだな可愛い、これは可愛い

「おい、アーニヤ、ライ。」

「ジノ！」

僕らと同じように帰艦してきたようだ。

その後ろにはノネットさんとエルンスト卿も一緒にいて、皆が手を振っていた。

僕は咄嗟に手を振って返した。しかし僕のそばから『あっ』という声が出た。

「何だい？ アーニヤ」

「何でもない…」

「そっ？ ならいいけど…」

「ようライ！ 今回はあまり暴れなかったようだな！」

「まあ、僕とアーニヤがいれば突破は簡単だけど、今回は目的が違うから…」

「目的？ シュナイゼル殿下は目的まで言ってたか？」

「言っていないけど、作戦を聞けばそれくらいわかるだろ？ ねえ、アーニヤ」

「勿論、基本……」

「何！ お前そんなこともわかるのか？」

「分からないのはジノだけ……」

「そんなことはない！！ スザクだって……」

「僕が何？」

「おわあ、スザク！ 何時の間？」

「ついさっきだよ。それよりシュナイゼル殿下のところに行かなくちゃ……」

「ああ！！ そうだった。すぐに向かわなくては……」

僕らはすぐに司令室へ向かった。

「失礼します。ラウンズ6名ただ今戻りました。」

「ああ、お疲れ様。君達の御蔭でこの戦域もほど通りなく済みそうだよ。」

特にスザク君、君の活躍は素晴らしい。」

「お褒めに与りありがとうございます。」

「他のみんなもご苦労だった。おそらくこれからはこの戦域での戦闘はない。」

各自休んでくれ。」

「殿下、一つお願いしたいことが。」

「ん？ 何かなスザク君。」

「私は皇帝陛下よりEU戦線攻略後はエリア11に着任せよとの命が出ております。」

「ですので、早急にエリア11に赴きたいのですが…」

「ああ、そうだったね。ゼロが新たに現れたからなおざらだね。」

「それに私としても、ナナリーのことを気になる…だからよろしく頼むよ。」

「では…」

「うん、今すぐにも出て構わない。」

「ありがとうございます。では、失礼します。」

スザクが司令室から出ていく…焦ることはないと思うけど…

「殿下、私とライ、アーニヤの三人もスザクとともにエリア11に着任することに」

「なっているのですが…」

「なるほど、君達もエリア11に着任するんだね。」

「でも、シルバ卿にはすこし手伝って欲しいことがあるんだが…」

「交渉ですね。」

「うん、君にはEUが飲むと思われる条件をリストアップして欲しかったんだが…」

「構いません。僕らは、KMFの整備が終わってからKMFとともにエリア11に

向かうつもりでしたので…」

「そうか、それじゃあ、頼まれてくれるかな？」

「Yes Your Highness」

「ライ…」

「何？アーニヤ。」

「交渉って何？」

「ああ、それは私も気になってた。」

「ジノまで…、今回の戦闘ではスザクが司令部を抑えて勝利したよね。」

「ああ、それで？」

「だからEU軍には戦力がまだ残っている。」

「だから？」

「ここまで言ったらわかると思っただけど…ねえ、アーニヤ…」

「……………」

「もしかしてアーニヤも分からない？」

「……………うん……………」

「……………ごめん僕が悪かった……………」

するとシュナイゼル殿下とその副官、ノネットさん、エルンスト卿から

笑い声が聞こえてきた。

「優秀なライもジノとアーニヤの二人にかかったら形無しだな。」

「まったくだ!!」

「お二人も少しは勉強した方がよいですよ。」

「そうだね、私としても、ブリタリアとしてもシルバ卿のような人材は必要だ。

君達の武は十分すぎるほどだ、これからは文でも活躍してくれると助かる。」

「……………」

「二人とも……………?」

「私はそういうことは苦手なんだよ。戦うのは好きだけどな!」

「私はライのパートナー…それはライがやる……………」

「それいいな、じゃあ私もライのパートナーになろうかな。」

「ダメ…ライのパートナーは私だけ…」

「あの…話を戻していいかな…」

「おお、忘れてた！ いいぞライ！」

「はあ…、敵が戦力を残したままでこちらが勝つ…」

エリア１に似ている状況になる。そこで「交渉…」　そういうこと。」

「それでは、シルバ卿。リストアップの方をよろしく願いします。」

「１時間後には出来上がると思います。どちらにお持ちしますか？」

「部屋の方へ頼むよ。」

「分かりました。では…」

司令室から出て僕に割り当てられた部屋に行く。

頼まれた仕事をするために…後ろでは、『これからどうする？』などの声が聞こえてくる…できれば手伝ってほしいのだが、手伝う気は無いらしい。

まあ、何時も僕に書類を押しつける人たちなのだから当たり前なのだが…

さて、何故僕はそれを当然のように受け入れているのだろうか…

.  
. .  
. . .  
. . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .

つまらない…私は今、エリア11に向かう輸送船の中にいる。

正確には、その輸送船の中のライに割り当てられた部屋の中にいる。

EU戦線の戦闘後にライは、宰相閣下の補助をしていた。初めに頼まれた仕事も

宣言したとおりに、1時間で終わらせてデータを提出していた。

私たちのKMFの整備などの準備が終わるまで時間があり、私は暇だった。

ライのところへ行き時間をつぶそうとしたのだがライはまた宰相閣下に

仕事を頼まれ、エリア11に向かう準備を整うまで時間をずっと仕事をしていた。

そして現在、彼はまた書類整理をしている…つまらない…

彼の写真を様々な角度から取って見るがライはあまり気にしない。

ライがラウンズに入りたての頃は私が写真を撮ると気になって困った顔を



していたが今で慣れてしまっていて私にかまってくれない…

「ふう〜、やっと片付いた…」

書類整理が終わってライが眼尻を抑えている。この光景も何度も見た（撮った）。

「ライ……つまんない…」

私が今、考えていることを言ってみる…

「つまんないって…僕にはどうにもできないよ…」

「何とかして…」

「だからできないよ…」

ライはいつも笑顔…今も苦笑してるけど笑顔…たまに困った顔もするけど笑顔…

でも、本当の笑顔とは違う。時々『本物』かもと思う笑顔もあるけど…

だけど、何か違う…

扉の外から足音が聞こえる…騒がしい足音…これは…

「おーいライ、いるか？」

ジノだ…私とライの時間が…これと言って何かをしているわけではない。

でも私とライの時間が減った…なんだかムカつく…

「おっ、アーニヤも一緒か…」

「どうしたんだいジノ？」

「騒がしい…」

「実はな、面白い話を聞いたんで、いろいろ調べてきたんだ。」

「調べてきたって…」「何を…」

「二つ名」

「二つ名？」

「ライは、自分の二つ名を知ってるか？」

「いや、知らないけど…それが？」

「下士官のラウンジの前を通った時に」

「そこにいた奴らがお前のことを話していたんだよ。」

「それが、ライの二つ名とどう関係があるの？」

「最後まで聞いてくれよ。そいつらの話を聞いてるとライの二つ名は複数あるらしくて…」

「それで調べてきたってわけだね。」

「いくつあったの？」

「2つだ!」

「2つ? 味方からと敵国からってことかな?」

「どんなの?」

「『戦神』『亡霊』」

「『戦神』?」

「それが、お前が何時も指揮を取って常に勝ち続けてるから戦の神なんだから。」

「なるほど…でも、ラウンズのいる戦場は僕以外だって敗戦はないよ。」

「もちろんこれは、味方からの呼び名だな。で…次に『亡霊』だが…」

「ライのイメージに合わない…」

「まあ、そうでもないんだよアーニャ。」

「どづいづいと?」

「ライは近距離の銃弾でも、すべて交わすからな。」

「それで、敵からは銃弾がすり抜ける様に感じるのだろうよ。」

「それに僕は、phantomだからね。間違っではないよ。」

そういつたときのライは、少しだけ遠い眼をした。  
その眼がどんな事を思ってた表情かはわからないけど、  
私は少しだけライの過去に触れた気がした。

不意にノックの音が扉の方から聞こえる。

『Knight Of Phantom様、いらっしゃいますか?』

ライを呼ぶ声：そうだった此処はライの部屋だった…

ライは、立ちあがって扉へ向かい扉を開けた。

「どうしました。何かありましたか?」

「15分後にエリア11に到着する予定です。ですが、事前の手続き  
きがされておらず

入島するのに時間がかかります。Knight Of Three  
様とKnight Of Six様のも

「ご報告とご確認をするためにお部屋に伺ったのですがいらっしゃ  
らなくて…」

「その二人ならここにいます。申し訳ない。手間を取らせてしまった  
ね。」

「いえ、構いません。仕事ですので…」

「事前手続きは確か…ジノがやるって…ジノ!!」

「すまん!! 忘れてた!!」

「……本当に申し訳ない。入島後の手続きは僕がします。報告お疲

れ様です。」

「では、これで失礼します。」

報告に来た士官は去って行った。扉が閉まりこちら向いたライは…  
ため息をついていた。

「ジノ…君は…」

ライはジノを呆れた目で見ていた。

「そんな目で見るいなよ。正確には忘れたんじゃないだよ。」

「どづいつ…こと…?」

「面白いことを思いついてな」

「面白い…こと…」

「おっ、興味があるかアーニヤ?」

「退屈…だから…」

「また…余計なこと考えてるのか?」

「余計なことじゃあないさ、これはエリア11の体制の強化のため  
だ。」

最終的にはナナリー総督のためにもなると思う。」

「で、どんな内容なんだ?」

「政庁を襲撃する。」

「はぁ？」

「ジノ、変なもの食べた？ それとも頭打った？」

「面白そうだろ、な！」

「な！ じゃないだろ…それがどうしてナナリー総督のためになるんだよ？」

「だから、私たちが政庁を襲撃して守備体制を確認するんだ。私たちの襲撃を止めることができたなら守備体制は万全だが、止めることができなかつたら守備体制は策だ。だからこれを機に立て直す。」

「待ってくれ！ 僕たち3人の襲撃を止めらるはずがないだろ?! 特にアーニヤのモルドレッドの攻撃では政庁自体がなくなる!！」

「でも…私は賛成…」

「アーニヤ?!！」

「はいこれで2対1。いくらお前でも皇帝陛下の命なしに私たちに命令出来ない」

「つまり…」

「協力するしかない…」

「そついで」と

「だが、モルドレットでの襲撃はなし。これは譲れない!」

「ダメ?」

「ダメです。」

「じゃあ、クロウ・クルワツ八貸して…」

「いいよって言いたいけど…ダメ。」

「何ですか? ライはこの前モルドレット乗ってただろ。」

「アーニヤにもクロウ・クルワツ八に乗せてやれよ。」

「あれは、アーニヤがブログのデータが消えたからどうのって落ち込んで」

「でもあの時の作戦でどうしてもモルドレットの火力が必要で…それに…たぶん乗りこなせないと思う………」

「ライは私を馬鹿にしてる? 私もラウンズ」

「いや、違うよ、けどスザクにも、動かせなかったんだよ。」

「下手なうこつくなよライ」

「嘘じゃないって、この前、格納庫に動かすだけの作業があつて、でも僕は書類整理が忙しくて、手が放せなかったときがあるんだけど」

その時スザクが代わりに動かそうとしてくれたんだけど…扱えきれなくて…」

「マジで…？」

「マジでー！」

「私には出来る…と思う。」

「……………」

「貸して…」

「待って…一回コミュニケーションしてからだよ。それで動かせたら考えよう。」

「分かった。それじゃあ今すぐ…」

……………



.....  
動かせなかった…なんてピーキーな設定…そして敏感すぎ…  
フロートも安定しない…ライは何時もあんな設定でKMFを動かして  
るのか…  
すごいと思う…でも悔しい…

今はジノがシミュレーション中…  
モニタリングするとわかる素人以下の操縦技術  
ライも隣で苦笑いしてる…

「ライ…私もあんな感じだった？」

「うん…まあ…ね…」

「どっちの方がひどい？」

「……………」

ライは答えてくれない…考えてるのだろうか？  
それとも私の方がひどい操縦だったから気をつかってるのかな？

「クロウ・クルワツハ大破、シミュレーション終了します。」  
シミュレーションを手伝ってくれた士官が終了を告げると、  
ジノがシミュレーションから降りてきた。

「すごいな、いつもらいはこんな設定で戦場にいるのか？」

「僕自身はあまりすごいとは思わないけど…」

僕専用の設定だしね…これで理解してくれた？　アーニヤ」

「……………理解はした…でも納得できない。」

「じゃあ、どうするんだよアーニヤ？」

「トリスタンに乗る！」

「ちよつとまって、じゃあ私はどうするんだ？」

「モルドレット…」

「観戦してろってか?!　それは無理だ。そもそも私が考えた計画だからな！」

「つまらない…」

「仕方ないだろ、ライがモルドレットはダメだって言ってるんだから…」

「我慢してよアーニヤ、今度何か埋め合わせするから…」

「ホント？」

「ああ、約束するよ。」

「だったら、我慢する…」

「良かったな、アーニヤ」

「それじゃ、襲撃部隊は私とライで決定だな！」

「僕は手伝わないよ！」

「何で?!」

「ラウンズ二人が襲撃して落とせないところはほとんどないよ…  
僕まで襲撃したら確実に政庁は陥落するよ…  
だから僕もアーニヤと一緒に観戦してるよ…」

「仕方ないか…」

ライも私と一緒に観覧…ライと一緒に…一緒に…

10話(後書き)

クロウ・クルワツハの設定は、ピーキーといふことになってください。

11話・TURN05-1(前書き)

青マント視点からです。

政庁が襲撃された?! しかもMRF一機で?!  
今日は確かライたちが来る予定だったはずだけど…

まさか?! ジノのトリスタンか?!

いや、ライが付いているからその心配はないはずだけど…でもこの  
状況は…

PPPPPP

電話?! こんな時に!!! ライから?!

「もしもし?」

『ゴメン! スザク…ジノを止められなかった。』

「やっぱり、この騒ぎはジノなんだね?」

『ジノだけなら止められたんだけどアーニヤまでこの計画に賛成し  
ちゃって…』

「モルドレッドまでこの作戦に参加してるのかい?」

『流石にモルドレッドは政庁が崩壊してしまうから、やめさせたけ  
べ…』

「分かった。とりあえずジノを止めてくるよ。」

『ゴメン、迷惑をかけてしまった。』

「いいさ、それじゃあまた後で…」

「ああ、それじゃあ…P」

まったく…ジノは…

目の前でグラストンナイツのグロースターが  
オートレスモードのトリスタンと相対している…

『何者かは知らぬが此処で終わりだ!!』

トリスタンがKMFモードへ変形していく…

『何?!』

『まさかこの機体は?!』

変形が終わりトリスタンが地に足を付ける。

『そついうことですか…可変KMF…トリスタン…ということとは…  
Knight Of Threeジノ・ヴァインベルグ卿ですね  
』?』

『ああ、君達を試しにきた…さあ、私を止めて見せる!!』

トリスタンが鶴嘴型MVSを構える。

『いいでしょう。私たちも恥をかかされたままでは収まらない。』

二機のグロースターもランスを構える。

『そう、そ。本気で頼むよ。』

『言われずともおおお。』

一機のグロースターがランスを前に突き出し。ランドスピーナーで加速する。

『ありがとおお！』

トリスタンはそれを鶴嘴型MVSであっさり回避す。

攻撃を避されたグロースターは素早く向きなおり、もう一度トリスタンに

攻撃を加えようとするが…その攻撃も簡単に防がれる。

もう一機のグロースターがトリスタンの背後からランスによる攻撃を加えようとするがまたしても防がれる。

両機とも体制を崩す…そこにトリスタンが機体を回転させ、グロースター両機の頭部を構えた鶴嘴型MVSで破壊する。

『こおのおおお！！』

頭部を破壊された両機のグロースターはそれでも戦意を失っており、

姿勢を立て直し、ランスを構えトリスタンの両脇からランドスピーナーで

滑走して来る…しかし、もう決着はついている…これ以上は…

「やめる！！」



トリスタンは僕の声を確認したのか、  
両脇のランスを構えて滑走するグロースターを鶴嘴型MVSで停止  
させる。

「そこまでだ！ 決着はついた！」

『それはKnight Of Sevenとしての判断ですか？』

「そつだ！」

『くううううう！！』

悔しそうな声が聞こえてくる中…

「おおお、ス〜ザク〜」

ジノの何時も道理の声が聞こえる…

「ジノ、ランスロットを持ってきてほしいと頼んだのに…」

「ああ、来週ロイド伯爵と一緒に来るよ…それより何だいこの服？」

トリスタンから降りて僕に駆け寄ってくる…

「学校帰りだからね制服…」

「へえ〜これが！」

ジノは僕の後ろへ回り制服を観察していると思ったら後ろから抱き

ついできた…

「ジノ、いくら名門貴族とはいえ、少しは普通の…あの…重いんだけど…」

ジノは僕が話している途中で体重をかけてきた…ベタベタしすぎだよ…

『お終い…』

その声共に地面が少し揺れた…

「モルドレット…アーニヤまでKMFでここまで来ていたのか？」

ジノは僕から離れ、僕の目線の先には赤い重装甲なKMFが

『お終い……』

「終わりだつてさ…スザクが」

「そう言えばライは？ さっき電話してきたんだけど…」

「僕なら此処にいるよ。」

後ろから声があった。てっきりライもKMFでここまで来ていたと思っただが、

ライはラウンズの正装のまま、こちらに向かって歩いてきた。

「ライ！ 君のKMFは？ それにどうして僕の後ろから？」

「僕のKMFはコンテナの中、あとはジノが事前の手続きを行っていなかったおかげで入島するのに時間が掛ってしまったんだよ。」

「でも二人は…」

「二人はKMFでさっさと飛んで行ったよ…」

「なるほど…お疲れ様ライ！」

これで戦力は十分すぎるほど整った…戦略もライがいれば確実だ！  
ルルーシュ…三日後の歓迎会で全てを明らかにしよう。  
でもこの襲撃の報告書どうしよう…

『ライ！』

モルドレットの外部スピーカーから声がした。

「何だい？アーニヤ」

『約束…』

「分かってるよ。ちゃんと覚えてる…」

「ライ、約束って何？」

「モルドレットを襲撃に参加させないために  
今度何か埋め合わせする約束をしたんだよ。」

「もう、その内容は考えているのかい？」

「いや、まだ…というか全く…」

「ああ、それならいい案があるよ。」

「助かるよ。それでどんな案？」

「実は3日後に僕が復学したアッシュフォード学園で僕の歓迎会があるんだ。」

「歓迎会？ それがあるんだい？」

「学園全体で僕の歓迎会を開いてくれるらしくて、一般開放されるんだ。」

それに二人で参加してみれば？」

「なるほど…アッシュフォード学園らしい…」

「ライはアッシュフォード学園を知ってるのかい？」

「え？ ああ、まあ…昔ちよつと此処にいたし…」

ライの返答が濁る…何時ものライらしくないな…

「ちよつと待ってくれ、その歓迎会は一般参加なんだから？  
だったら私も参加できるんだよな！！ 私も行くぞ！」

『ダメ！！』

モルドレッドから声が…

「何でだよアーニヤ？」

『ライと私の約束…ジノは関係ない…』

「私だってスザクの学校に行きたいんだが…」

「ダメ！」

「絶対行く！」

アーニヤとジノも口論が始まってしまった…二人とも僕では止められない…

アーニヤはライと二人で行く事を主張して、

ジノは三人で行く事を主張している…話は平行線で和解する可能性はない…

そのうちKMFの模擬戦で決着をつけるという話になってジノがトリストランに

乗り込んで臨戦体勢に入った。

まずいこのままでは、政庁が…崩壊する?!!

「ストップ!!」

ライがモルドレッドとトリストランの間に入って大声を出した。

『いくらライでも邪魔はできないぞ〜いくらなんでも生身ではな〜』

『ライ…危ないどいて…』

「二人とも落ち着いて、此処で二人が戦ったら損害が大きい。それにちよつと確認させてほしいことがある。」

『何だ？ ライ』 『何？』

「まず、ジノ。君はどうしてもスザクの歓迎会に行くんだね。」

『ああ、これだけは譲れない。』

「次にアーニヤ。なぜ、3人でないといけないんだい？」

『ジノは今日楽しんだ、私はまだ…それに約束…』

「僕との約束かい？ スザクの歓迎会じゃなくて、別の日にしないか？」

『別の日…二人で？』

「まあ、その時は二人で何処かへ遊びに行こう…」

『デート…』

「ん？ 今何か言った？」

『何でもない…それでいい…』

「良かった…それじゃあそのまま二人はモルドレットとトリスタンを格納庫へ移動させよう、今日動かしたから整備と補給が必要だろ。」

「

『分かった』』

二人はKMFを格納庫へ移動させるために奥へ向かった。  
すごいなライは、二人をうまく動かしている…

「はあく、疲れた…」

「お疲れ様ライ…」

「ありがとうスザク」

「すごいなライは二人をうまく乗せてる。」

「そんなことないさスザクもいつもこれくらいはしているだろ？」

「いや、KMFの模擬戦で決着をつけるところまでいった二人を僕は止められない」

「そうかな？ まあ、此処で僕らが言い合っても話が進まないね。  
そうだ、今回の件は僕とジノが報告書を出すよ。」

「そんな、悪いよ…」

「気にしないでよ。今回の計画の立案はジノだし、  
それを止められなかった僕にも責任があるからやられてよ。」

「じゃあ頼んでいいかな？」

「ああ、任せてくれ！」

11話：TURN05-1（後書き）

今回は短かった…かな？



12話：TURN05 - 2

もう二度とこの場所に帰ることはないと思ったけど…  
戻ってきてしまったな…

「へえ、ここがサクが通う庶民の学校か」

「賑やか…記録…」

ジノもアーニヤもいつもの調子…

「じゃあ、早速中に…おっ！！ あそこでアイス売ってるぞ。」

ジノはアイスの模擬店に走って行った。  
貴族なのにどうしてあんな風になったんだろう。少し疑問が残る…  
気がつくと僕の上着の裾が引かれている…

「私たちも…」

アーニヤだった…

「ああ、そうだね。ジノも放っておくと何かしそうだし…」

僕はアーニヤと一緒にジノのところまで向かう。  
すると案の定…

「乗せれるだけ乗せてくれ。」

「えっと…どれにしますか？」

「全部！ それぞれ乗せれるだけ乗せてくれ、そっちの方が楽しい  
だろ！」

ジノが学生に向かって無理難題を出している。学生はとても困って  
いて一緒に

仕事をしている仲間と相談している。だがジノが『限界に挑戦』と  
か何とか

言っているテンションに乗せられ学生たちもその気になったようだ。

最終的にジノの手に渡されたコーンの上には十色以上のアイスが盛  
られていた。

盛りすぎだろそれ…

ジノがアイスの料金を払うためにポケットに手を入れそこから出し  
たのは、

財布ではなくカードだった。それを店員の学生に手渡そうとするが、

「カードじゃお支払いできません。」

と困っている。

「え？ 支払はカードじゃないのか？」

ジノは支払いがカードが当然かのように不思議がっている。

いや、普通こういう場合の支払は現金だよ。いくら上級貴族だから  
って…

支払の手続きをしている学生の後ろで他の学生が小声で何かをして

いる…

しかもジノの顔を見て…普通ではありえない常識の持ち主のジノについて

話しているようにも見えるけど次の瞬間…

「あの…もしかしてラウンズのジノ・ヴァインベルグ卿じゃないですか？」

今、ジノは変装用のサングラスをかけているがその他の変装は一切ない。

ばれた！！このままでは騒ぎになる。帝国最強の12騎士その一人が

一般の学校に來ている。そんなことがばれたら騒ぎになる。

ジノだけならまだしも今はアーニヤもいる。

アーニヤに至っては変装すらしていない。だけど普段のラウンズのイメージから

離れた服装をしているため気がつく人間はほとんどいないだろう…だがジノと一緒にいることでアーニヤまで他の人間にばれる可能性もある。

僕は公務中やメディアに移るときはサングラスをかけているためほとんども

僕の姿を知らないだろうから心配は少ないだろうけれど…

アーニヤは…いくらラウンズとはいえまだ14歳だ。

大勢に囲まれたらひとたまりもない…

何とか誤魔化さなくては…

「アレックス！！ 何やってんだよ?! またタダ食いか？  
いくらお前がジノ・ヴァインベルグ卿に似てるからってそれはダメだろ。」

そっくりさんそう思わせてごまかす。我ながらバカな作戦だ。

「あ？ 何言ってるんだよライ。私は正真正銘のジノヴァいんんん」

危なかった。ここでジノに本人だと名乗られると收拾がきかなくなる。  
何とかジノの口を塞いでこれ以上喋らせることを伏せることができた。

「悪かったね君達、こいつはたまに自分がジノ・ヴァインベルグ卿に似ている

ことを利用してタダ食いを行おうとする奴なんだよ。

代金は僕が払うから許してね。」

納得してくれるとありがたいんだが…

「そうなんですか？ ホントに似ていらっしやるのでっつきり…」

「んんんん」

ジノはまだ本人だと言おうとしている。

察してくれジノ、今ばれると後々面倒なんだよ…

「あれ…そう言えばライって…もしかしてライ・シルバ卿ですか？  
」！

なんてひらめきだ、ラウンズつながりだけで僕の名前まで出てくる  
とは、

誤魔化すのが難しくなってきた。厳しいか…

「ライテのは愛称だよ。本名はライエル。」

「そうですよね…髪型も違いますし…」

普段は髪形を気にしないで自然体に任せた髪形だったが念のために  
髪と梳かして

落ち着いた髪型にしておいた。ホントは髪を染めておきたかったの  
だが

断固としてアーニヤが染めさせてくれなかった。

「代金足りたかな？」

早くここから離れなければ…少し騒ぎになりかけている…

「ハイ結構です。お買い上げありがとうございます。」

「ほら行くぞ、アレックス…」

ジノの腕を掴んでアーニヤのもとへ引いていく。

「ライ、アレックスって何だよ？ それにライエル？」

「偽名に決まってるだろ、こんなところではれたら大騒ぎになる。」

「ジノだけならまだしも今はアーニヤもいるんだから…」

「私は平気…」

「そんなこと言ったって此处で僕たちがラウンズだつてばれたら大騒ぎになる。」

「そしたら僕たちは囲まれて僕たちの時間がなくなってしまうよ。そしたらスザクの歓迎会を回れなくなってしまふよ…」

「それはちよつと困る…」

「だから、ジノもアーニヤも目立つ行動は避けてくれいいね。」

「了解」「…分かった」

「おお！ ライ、アーニヤ！ ちよつとこつちに来てみるよ。」

了解と言つたはずのジノはすぐにほかの模擬店に近寄つて行った。ホントにわかつてるのかジノは…

「面白いな！！ アーニヤほらこれ！」

ジノに指を差されたものをアーニヤは素直に携帯で写真を撮る。

「記録」

「好きだね！ そついつの！」

「なあどうする特にやることはなさそうだし、庶民の学校つてのを見学するか？」

「なあ、ライ…」

「一応僕に許可を求めているのか？」

目立った行動をして正体がばれなければいいんだけど…

「構わないよ…アーニヤは？」

「あれ…」

アーニヤはある学生達を指差している。その指の先には…

イチゴを模様した被り物をしたて通常では考えられない格好をしている女性生徒

ウサギの耳を付けバニーガールのような格好をしている女性とがいた。

他にも虫などを模様した服装をしている者や一般的にはあまり着ることのない

服装をしている人たちがチラホラと確認できる。

「写真撮りたいの？」

「着て見たい…面白そう…」

「お！ それいいな。」

そう言うとジノはイチゴの被り物をしている女性の方へ走っていき、何か聞いているようだ。すると女性は校舎の方を指差して何か話している。

「校舎の中に『コスプレ喫茶』ってのがあって、そこで着られるらしいぞ。」

「行く…」

「ちよつと待つて

」

アーニヤは僕の腕を掴んで校舎の方へ走り出した。

僕はほとんど引きずられる形で校舎内の『コスプレ喫茶』着いた。

そこで僕は、押し込まれるように更衣室に押し込まれてしまった…  
更衣室の簡易的なものでカーテンで遮る程度の物だ。そのカーテンは、

まだ占められていない。その開けられたままのところから数人の女生徒が

僕を見ながら服を物色している。おそらく僕に着せる服を探しているのだろう…

だけど…その服は全部、女性物じゃないのか？

「やっぱり、これがいいよ。線細いし、美形だし」

」

そう言っている女性とが持っているのは…『旗袍』

中華連邦で多く着られているドレス…つまりチャイナドレスだ…

このままではチャイナドレスを着ることになる…それだけは阻止しなければ…

「いや、僕はただの付き添いで来ただけなのだ」ダメです！」「…」

僕が断ろうとしたらすぐさま否定された…

一応僕はお客に当たる人間なんだよね…僕のことを尊重してほしいんだけど…

「さあ、お着換えしましょう^^」



「ちよつっつ！ まっつ！！ 僕の服を剥がないでさい！！  
あっ！！ 下は！ 下だけは！！」

女性とが集団で僕を抑え込み、服を剥いでくる。上着から始まり、  
ついには

ズボンにまで手を伸ばし、パンツまで手をかけている。後方にいる  
女生徒が

持っているのは女性物の下着…まさかそれを僕に着せる気なのか？！

「ちよつと待つて、下着まで替えなくても…」

「ええ、スリットから見えるのかいいのに…」

何を考えてるんだこの人たちは…

「やめてください…」

「仕方ないな、それじゃあこれはいでください。」

そう言つて手渡されたものはスパッツ…しかも肌色の…  
ホントに何考えてるんだ…

「早く履かないと剥ぎますよ^^」

眼が本気だ…怖い…ホントにこの人たちは剥ぐ気だ…逆らえない…

しびしぶスパッツを履くとチャイナドレスを着つけられ、  
頭にはお下げとお団子ののオープンションが付けられた。

そして胸部にはシリコン性の詰め物を…

「できた〜可愛い〜」

「お人形さん見たい〜」

「カメラ持ってきてカメラ！」

女生徒たちは僕を見てとてもはしゃいでる。

何だかもう穴があったら入って出てきたくない…

そこに僕を着換えさせた女生徒たちとは別の女生徒が来て…

「お連れさんの着替えは終わったの？ こっちはもう終わったよ。」

その女生徒の後ろには着替えを終えたアーニヤの姿があった。

気がえる前はピンクを基調にした服装だったが、

今は黒を基調にフリルがたくさんついた服を着ている。確かゴシッ

クロリータ…

とか何とか言っただかな？ あれ……………？

アーニヤの後ろにラウンズが着るパイロットスーツのようなタイトな

白を基調にした服を着てランスロットを模した仮面をかぶったにと

がいる…

他のお客かな…あんなものまであるのか…

そう言えばジノは何処にいるんだ？ アーニヤに引っ張られてきた

からジノの

事を忘れていた…どこかで騒ぎになってなければいいんだけど…

そんなことを考えているとさっきのランスロット仮面が僕に抱きついてきた。

「なっ何なんですか?! あなたは!?!」

「可愛いなライ! お前が女性なら求婚してるところだ!」

仮面せいでこもった声となっているが聞き覚えのある声…ジノだ…この光景を見ていた女生徒たちが『キヤー』と黄色い声をあげている。

そしてもものすごい勢いで写真を撮っている。

とりあえずジノを何とかしなくちゃ…

「あの…重いんだけど…離れてくれるかな…」

「んあ? そんなことよりほら、アーニヤになんか言ってやれよ。」

いつの間にかアーニヤが僕の正面に立っていて僕をじっと見ている…

「え…えつと…」

「どっ?」

アーニヤが両手を顎のところまで合わせ、首をかしげている。

「可愛いよ、アーニヤ。とても…」

「ホント?」

「勿論。」

「アリガト…ライも可愛い…」

「あまりうれしくないんだけど…というか、いい加減離れてくれな  
いかな…」

「だってまだ私の感想を聞いてないぞ！」

「感想って…仮面だから誰がつけても一緒だからなそれは…」

「誰でも一緒…」

「しまった！ 選択を間違えたか…」

自分で選んで着たのかそれを…君のセンスを疑うよジノ…

・

・

・

・

・

・

・

その後、僕は衣装の貸出時間の間、この姿のまま学園内を歩いて  
回った。

その中で僕とアーニヤは何故だが、アッシュフォードの学生や一般  
の来場者に

『一緒に回らない？』と声を掛けられた。何人も、何人も…

アーニヤは興味がなさそうに携帯を弄っている。ジノはランスロッ  
ト仮面に

成りきって声を出さずにポーズをとっている。

もしかして『間に合ってます』のポーズなのか……？  
だけど完全にスルーされている……  
仕方ないから僕が『結構です。』というが……

『そんなこと言わずに』と返され、諦めてくれない……  
僕の声聞いても誰も僕が男だと気付いてくれる人はいない……  
ばれなくてホツとしているのだが、男だと気付いてもらえないのは  
ちよつと……

仕方がないから毎回、僕の胸部に入っているシリコン性詰め物を出して僕が  
男であることを理解させる……ほとんどの人はそれで映えっっていくの  
だが……

数人名は、『私はそれでも構わない！』だとか『僕はそっちの方が  
好みだ』とか  
言う人間がいた。何だか身の危険を感じたのでついギアスを使って  
しまった。

結局僕たちがコスプレ喫茶で着替えてから貸出時間を終えて着替え  
直すまでの

2 / 3 の時間を寄って来た男たちを断ることで過ごしてしまった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

着替えた後、僕らは少し疲れたから人ごみは避けて模擬店のない校  
舎の裏側に

来ていた。学生の姿もチラホラと見えるがどうやら休憩をしている

ようで何か

あるわけではないようだ。だけど学校にはあまり必要なさそうなモノがそこに

あった…旧型のKMF…と言っても運送用のだが…

その近くにファイルが落ちていたので中を確認してみるとKMでピザを作る計画が書かれていた。そしてKMFの点検用のチェックシート…まだ途中のようだが…

「何だいこれ？」

ジノが僕の手からファイルを抜き取った。

「KMで巨大ピザ?!」

「表側の方に大きな竈があった…」

「へえ〜面白そうだな!」

そう言うとジノはKMFに飛び乗り途中で放棄された点検を始めた。残り項目も少なかったためにその作業はすぐに終わった。そしてジノはファイルを僕に投げKMFに乗り込んでしまった。

「ちょっと?! ジノ!! 何をする気何だい?!」

「面白そうだから行ってくる!」

ジノはKMFを起動させ走り出していった。僕も入って追いかけてよ

うとしたが

アーニヤに腕をつかまれていた。

「何、アーニヤ？　すぐにジノを追わないと！」

「いくらライでもKMFには追いつけない……」

それはそうなんだけど……

「だからって無視はできないし……」

アーニヤは僕の持っているファイルを指差しながら……

「だったら先回り……」

そうか！！　気が動転して気がつかなかった……

えっと……あのKMFの通るルートは……

ここからだと言に合うのは最後の曲がり角か……

「じゃあ、行こうアーニヤ！」

僕はアーニヤの手を引いて表側の方へ走った。

だけど僕は気付いていなかった。

たとえ先回りできてもKMFを止める術を僕は持っていないことを……

くさあ、パレードルートに出たようです！

校舎をまわってからこちらに来ますよ〜>

何とか間にあつた……これでジノを止められる。

<来た〜〜!! Knight Of Seven 枢木スザクが

アンデス産のアルティメットトマトと共に登場だ〜〜!!

さあ、来てくれ僕らは君を待ってい

た〜〜〜!>

ちよつと待て!! 確かに先回りはできたけど僕は今、生身だ…

KMFを止められるわけがない…

それに今、KMFに追われている猫はスザクのペットのアーサーじゃないのか?

何がどうなってるんだ? とりあえずアーサーを助けなくちゃ…

「間にあえええ!!」

僕はKMFの前を横切り、かろうじてアーサーをキャッチすることができた。

けどその時KMFを横切ったのは僕だけではなかった。スザクも一緒だった。

<だけど…>

中の人、違いま〜〜す。

「ライこんなところで何してるんだ?」

「それはこっちのセリフだよ! いや、合ってるか…」

ジノがKMFを動かしてこうなったんだから、

スザクが僕に対して『何してるんだ?』と問うのは正当なはずだ…



「何言ってるんだい？ ライ…」

「いや、何でもな…何だこれ!?!」

大竈の方から大量の泡が吹き抱いていた。

「ライ！ とりあえずこっちへ…」

スザクは僕の腕をつかんで植木の方へ引っ張った。

「木の上に！」

「分かった！」

僕とスザクは木の上に乗って大竈から泡が出ているのを眺めている。

「あああ。」「」

スザクと一緒にハモった。まあこの状況をここから見れば誰でも同じことを

呟くと思うが…

あれ…そう言えばアーサーは何を銜えてるんだ?…羽ペン? 何で?

「ありがとうライ…アーサーに羽ペン盗られちゃって…」

「これはスザクだったのか…でも何で?」

「僕がKMFのチェックをしている時にいきなりアーサーに盗られちゃってね…」

「なるほどあのKMFのパイロットはスザクの予定だったか…  
ゴメン、またジノを止められなかった…歓迎会を台無しにしちゃったね。」

「そんなことないよ。それに夜の部のダンスもあるし…気にしないで…」

もう来ることもなく、もう会うこともない。

そう考えていた…がだ、僕はまた此処にいて…また彼らと会っている。

ミレイさん。リヴァル。シャーリー。ルルーシュ…

カレンにもあった…

スザクとナナリーにも…

ニーナにも会っているシュナイゼル宰相閣下のところ…

結局…僕はもう一度彼らと出会ってしまった…

守りたい人たち…だけど僕の力は彼らを危険にさらす。

だから眠りについた…

彼らとの別れは辛かったが、彼らを守れるなら僕は、自らを捨てる。だが僕の得た『絶対遵守』の対価に僕は自らは死ねない。

故に寝むりについた。だがV・Vによって僕は呼び起された。

それだけでなく。僕はもう1つのギアスを持つことになる。

しかも、V・Vと奴の仲間…

同じ考えを持つ同志に対し僕は、裏切れない、逆らえない。実質絶対服従…

もう一度、眠りに就こうとしても僕に掛けられたギアスがそれをさせない。

もどかしい……だけど今は……今だけは……

彼らともう一度出会えたことを喜ぶべきなのか……悲しむべきなのか……

13話・TURN06-1(前書き)

やっと、本来の主人視点です。

13話：TURN06 - 1

Kn i g h t   O f   T h r e e ジノ・ヴァインベルグ  
Kn i g h t   O f   S i x アーニャ・アールストレイム  
スザクの他に！ 2人のラウンズだと?!?!

どれだけの戦力をこのエリア11に集結させる気なんだ?!  
だがまだ、戦略で片付けることのできるレベルだ…

本当に問題なのはKn i g h t   O f   P h a n t o m ライ・シル  
バ…

俺の考えが正しければこいつは俺の知っているあのライだ…  
一年前記憶喪失者として学園の敷地内に倒れていた男…

そして、しばらくの間、黒の騎士団に所属し、  
戦闘隊長兼作戦補佐の任に就いた男であり、俺がスザク並みに信頼  
を置いた男。

俺は忘れていた…いや…忘れさせられていた。ブリタニア皇帝に…  
違う…

この男…ライ本人にだ…俺の記憶変化時期があのと一致しない。  
俺が全てを思い出したのはあの時…バベルタワーの一件からだ…

時は逆戻る      俺が真に目覚めたあの日に

「C・C…」

「私ではない。あの男にギアスを与えたのは…」

「ナナリーは何処にいる？」

「お前の妹を探そうにも黒の騎士団が壊滅状態ではな…」

「咲世子はどうなった？」

「デイトハルトと共に中華連邦へ逃れた。あの女はゼロの正体を知らない…」

「ナナリーの重要性が分からずとも仕方がないだろ…」

「皇帝にギアスを与えた者を探し出し…ナナリーを…」

俺に妹はいたが弟はいなかった。誰なんだあいつは？！  
それと…

「アイツは何処にいる？」

「アイツ？」

「ライだ。ライは何処にいる？」

「ほお、ライのことまで思い出したか…」

「今この時代にいることは確かだが場所までは分からない。」

「思い出す？ この時代？！ 何のことだ？！ C・C…？」

「ライはこの時代の人間ではない。過去の人間だ。」

そして最後のキーワードだ。『一人ぼっちの皇子さま』…導き出される答えは…」

「何を言っ…」

待て、C・C・の言っていることが本当だとすれば…  
今までのライの情報を整理すると…

ライは日本の古き血筋…貴族の血を継ぐ者…  
しかも現在には途絶えたはずの血筋

C・C・の言っ…過去の人間と当て嵌まる…

ライが消えた時期は俺が神根島からガウエインを奪って脱出した少  
し後…

ライはあの時神根島に俺とカレンを単独で搜索しに来ていた。

脱出の際に不意の事故があり、ライだけは共に脱出できなかった。

ブリタニアの軍が撤退したのを確認した後に彼を搜索しに行った。  
生きて神根島にいる可能性は低かった。だが彼はそこにいた…ちゃ  
んと生きて…

だが、その後にライは消えた。神根島…ギアスに関する遺跡がある  
場所…

ギアス…『一人ぼっちの皇子さま』に出てくる魔法の力がギアスだ  
とすると…

『一人ぼっちの皇子さま』については俺がまだ皇子だった頃に気に  
なっ…て色々

調べた…があった…この物語は『狂王』の物語をモチーフに描かれ  
ていた。

『王の力は自らを孤独にする。』 C・Cの言葉だ。『一人ぼつちの皇子さま』も

『狂王』も…どちらも孤独となった。これがギアスを得たことによる事象なら…

『狂王』…その王の名はライ…偶然にも一致しているのだと思っただが…  
考える情報の全てがアイツがその本人と裏付ける…

アイツの智略は王だった頃の力、  
KMF操縦技術と現在の知識はC・Cが俺と出会う前にいた研究所で人体強化、訓練、学習させられた結果だろう…繋がる…

全てが…

「ギアス…」

「物分かりが良くて助かる…」

「アイツは何故消えた？」

「繰り返ししたくないそうだ…過去の過ちを…だから眠りについた…一度は…」

「何故また出てきたんだ？ アイツは…」

「そんなこと私を知るわけないだろ…それより今は現状の打破が先だ」



「分かっている。チツ、建物の構造図はあったが認識番号のメモは無いな…」

やはりこのKMは使えないか…」

時は戻る 現在へ

あの時はうやむやになったが今のようには現実に付きつけられると…

「本当にすみません。計画をむちゃくちゃにできて…」

「別にいいのよ。消火用ガスの噴出はこちらに不手際ですし、

実際に大きな被害が出たわけでもないの…ねえ、ルルーシュ。」

「ええ、勿論です。それにラウンズの方に来ていただけて光栄です。」

「

「ああ、その事なんですけど、僕たちのことは伏せていてもらえますか？

これ以上騒ぎになって折角スザクのために開いていただいた歓迎会を台無しに

してしまいかねないので…」

「分かりました。ですが夜の部のダンスには参加していただけますか。」

「ええ、それはまあ「勿論！ 楽しそうだしな！！」「…ジノが担当します…」」

何故お前がここにいる。ライー！！

何故お前がラウンズと共に…ブリタニア側にいる？！

まさか?! ライもギアスに?! 記憶を書きかえられたか?!  
だとしたら厄介だなライは…戦術はスザク並、戦略も俺と同等…

敵に回すとこれ以上ないくらい厄介な奴はいない。  
やっと学園内の障害を全て排除できたと思っただら!!

「お詫びに仕事をお手伝いしますよ。えっと…ルルーシュ君だっけ?  
何か仕事はあるのかな?」

「私も行く…」

「アーニヤはジノが何かしないように見張っててよ。頼りにしてる  
から…」

「……………分かった……………」

「えっと…こっちでいいのかな?」

ライは部屋から出て行ってしまった。

「待ってください! シルバ卿!」

後を追って俺も部屋に出るがそこにライの姿はなかった。

周りを見渡すとライは…階段の一番下にいる…

こちらを見据えて右手で襟をつかみ引つ張る仕草をする。

これは…俺とスザクとの間で交わしたサイン『屋根裏部屋で話そう』

…  
このサインを知っているのは俺とスザク…

そして、偶然にも一年前にこのサインに気づいたライだけ…  
ライは記憶を書き換えられていない？！

いや、しかし偶然ということも…

ライはサインを出した後にすぐ上に登って行った…  
俺もすぐにあとを追って屋上に向かう。

屋上の扉を開けた先には、手すりに背を預けこちらを見ているライ  
がいた…

「此処にはカメラ無いよね。」

「は？」

「率直に聞くよ…君がゼロか？」

「仰ってる意味が…」

「まあ、それが普通の対応だね…コレを…」

ライは俺に近寄って紙切れを手渡してきた。

「君がゼロならそれを開いて中身を見る、ゼロでないなら中身を見  
ずに燃やせ、

もし君がゼロであるならば、その中身の意味が分かるはず…それ  
じゃあね。」

ライは一方的に紙切れを俺に押しつけて去って行った。

何なんだアイツは…敵なのか…味方なのか…  
取りあえず中身を見ないと話にならないな…

中身は唯の数字の羅列…それだけ…  
何だこれは…何かの暗号であるのは間違いない。

0 9 0 6 . 2 5 1 5 2 1 .  
2 3 0 1 1 4 2 0 . 2 0 1 5 .  
1 1 1 4 1 5 2 3 . 1 3 0 5 ,  
0 1 1 9 1 1 . 2 0 1 5 .  
0 4 0 1 1 2 1 2 0 1 1 9 . 0 8 1 5 1 2 2 5 1 9 2 0 1 5 1 4 0  
5 .  
2 1 1 9 0 9 1 4 0 7 . 1 9 1 6 0 5 0 3 0 9 0 1 1 2 .  
2 0 1 8 2 1 2 0 0 8 . 1 9 0 5 1 8 1 9 2 1 1 3 .

だが黒の騎士団における情報伝達にこの暗号は使っていない。  
良く見ると0、1、2の出現頻度が多い…

『.』で区切られている数字に「桁の数」は全て偶数…  
分かりづらいが『.』が一つまぎれている…  
書き間違いではない…すべての文字がしっかりと書かれているから  
間違いない…

そうか！ そういうことか！  
なんてことはない単純な暗号だ…

『僕を知りたければ、  
ダラス・ホーリーストーンに特別な自白剤を使って聞け。』

ダラス・ホーリーストーン…確か今回の来賓の中に居たな…  
特別な自白剤…恐らくギアスのことだろう…

..  
..  
..  
..  
..  
ダラス・ホーリーストーン：まだ学園内にいた…  
普通来賓は学園内を一通り回ったら帰るのだが…不自然だな…  
やはりギアスにかかっているようだ。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる、ライについて教えて！  
！」

「……これを…」

そういつてボイスレコーダーを出してくる。  
受け取ると…『では私はこれで』と言って去っていく。

ギアスが掛けられていたか、やっぱり…  
周りに誰もいないことを確認しつつボイスレコーダーを再生させる。

『…やあ、やっぱり君がゼロだったね。  
安心して、君のことを誰かに報告するつもりも、話すつもりもな  
いから…』

ただ、確認したかったただだから、君が昔の君かどうか…  
まあ、君は僕のことを覚えていないだろうけど……』

やはりライもライもギアス保持者か…  
これで俺の記憶が書き換えられた時期の謎が解ける。

ライ自身が俺の記憶…いや俺たちの記憶を消した、あるいは書き換  
えたんだ。

『ちなみに僕は君の敵じゃあない。ただ立場的には君の敵となってしまうけど…』

『僕自身は敵じゃあない。だから安心してくれていいよ。』

何故ライがブリタニア側にいて俺たちの記憶をイジったのかは分からない。

だが奴は俺の敵じゃあないと言った。こんな危険な手段をこうしてまで…

嘘ではないはず…だからこれで、ライのことはクリアされた。

次は星刻にC・Cとカレンを回収してもらわなければ…

「また君に借りができたようだな…」

『外交特権を使ったただけだ。それに…こちらこそ早く借りを返しておきたいね』

「ではもう一つ頼んでもいいかな？」

『慣れ合うつもりはないな…』

「大宦官に連絡を取ってほしい」

これで、ひとまずの障害はすべてクリア…

ライの様子も探らせているが変わった様子も、俺を探っている様子も報告されていない。ライの言葉は真実か…ならばとりあえずは…

後、残すは攻略はスザクだけ！！

「ルルーシュ。」

スザク！！…何故此処に…

「主役はメインステージにいてくれよ。」

「ん？ みんな楽しんでるみたいだから…

それに話したいことがあってさ…」

「何だい？」

「僕はね、Knight Of Oneになるつもりだ。」

「おいおい、それは帝国最高の騎士…」

「Knight Of Oneの特権に好きなエリアを一つもらえるというのがある。」

僕はこのエリアを…日本をもらうつもりだ。

僕は大切な友達と掛替えのない女性を失った…

これ以上誰も失わないためにも、力を手に入れる。

だからもう日本人にゼロは必要ないんだ。」

「ふん、間接統治か、保護領を目指して…」

「答えはこの人に…」

「え？」

スザクは携帯を取り出し操作をしてどこかに電話を掛けているようだ。

「来週赴任される。エリア11の新総督だ。」

「唯の学生が総督と?」

「枢木です。はい、今、目の前にはい。」

「困るんだけどな…そんな偉い方なんかと…」

『もしもし、お兄様?!』

な?!

『お兄様なのですよ? 私です。ナナリーです。総督としてそちらに…』

あの…聞こえていますか? お兄様? ナナリーです。』

スザクやってくれたな。

『あの…お兄様でないのですか?』

ダメだ…ナナリーに嘘を吐けない…俺は…俺は…

ん!! □□!!

□□が胸に手を翳しギアスを発動させる…

「良くやってくれた□□、そのまま頼む。」



「時間制限を忘れないで…」

「分かっている。聞いてくれナナリー！」

『お兄様！ やっぱり！！』

「今は他人のふりをしなければならぬ。」

「え？」

「俺に話を合わせて欲しい。必ず迎えに行く。必ず！」

だからそれまで…それまで…  
愛しているナナリー！！！！」

口口の胸に翳されていた手の指が全て折り曲げられギアスが解除される。

「あの…人違いではないかと…」

『人違い…』

「はい、唯の学生ですし…」

『お兄様じゃあない…』

「はい、すみません…」

『こちらこそ、スザクさんの大切なお友達だと聞いていたので  
早とちりしてしまって…あの…私…』

「いえ、皇女殿下とお話できて光栄です。」

『あ…あの…電話を戻してもらえますか？』

「Yes Your Highness」

「ごめん、ナナリー誤解させるようになったちゃって…」

うん、それじゃあ…」

スザクは携帯を着るとポケットに戻した。

「ビックリしたよ、新総督だって言うからもって高齢の方だと思っただけど…」

皇族のまだ若い皇女殿下だったんだな。

まあ、それよりも驚いたのは俺を誰かと間違えてるみたいだったけど…」

違う…!! 間違っただけなんかない。俺がナナリーの兄だ!!  
スザク…お前は…!!

「ごめんルルーシュ…もしかしたらって思ってた…」

「何がだ？」

「ごめんこれ以上はダメなんだ。」

「何だよもったいつけて…まあ、皇族関連だからしかたないか…  
ほら、みんな、お前を探しているようだぞ…」

まあ、主役がないんだから当り前か、ほらすぐ戻れよ。」

「うん、ちょっと行ってくるよ。」  
そう言ってスザクは走って階段を下りて行った。

スザクめ、俺を試したな?!

だが、これは明らかかなミスだぞスザク。

来週に赴任する新総督「ナナリー」取り戻してみせる。  
必ず…

13話：TURN06-1（後書き）

本当にすいません。

安直な暗号でm（　　）m。

私の非力な頭脳と文才では、この程度の暗号しか思い浮かびませんでした。

「これじゃ、簡単に解読されてしまうだろう。」という意見があると思いますが、ご了承ください。

なにぶん、過去の私が書いた「データの残骸」ですから、

えっ!!!

なら、書き直せて？

過去から何も成長できていない私に高度な暗号を考え付く恥じないでしょう。

というわけで、暗号の答え合わせです。

まず最初に、アルファベットに番号を振ります。

A：01      B：02      Z：26      といった風に。

次に、文章をアルファベットで置き換えます。

0906・251521・  
23011420・2015・  
11141523・1305・  
011911・2015・

0 4 1 1 1 2 1 2 1 1 1 9 . 0 8 1 5 0 9 2 5 1 9 2 0 1 5 1 4 0  
5 .

2 1 1 9 1 4 0 7 . 1 9 1 6 0 5 0 3 0 9 0 1 1 2 .

2 0 1 8 2 1 2 0 0 8 . 1 9 0 5 1 9 2 1 1 3 .

とこんな感じで…

あとスペースは「.」で代用。

カモフラージュも兼ねてね。

あつ！ もちろんブリタニア語（英語）ですよ。

私には、日本から出たことがないので、正しい文であるかはわかりませんが…

誰か、答えわせして…orz

そして誰か修正して…

14話・TURN06-2(前書き)

まだ、残骸が残ってました。  
ではどうぞ。

アッシュフォード学園でのスザクの歓迎会から連日、中華連邦との外交をスザクを主体とし、僕がサポートしながら進んだ。

しかし、引っかかるな。

此処での外交相手は『星刻』…確か武官ではなかったか？

確か、僕らが来る前の藤堂さんたちをはじめとする、黒の騎士団の捕虜が『ゼロ』…

いや、ルルーシュによって救い出されたあの事件に、総領事の『高亥』は死亡したとのこと。

その代わりとして、別の誰かと交渉を行うところはいい…

だが何故？ 武官である『星刻』何だ。

通信による交渉であれば、本国ににいる宦官での良いだろうに…

そもそも、『高亥』は、なぜ死んだ？  
流れ弾か？

いや、それならば、ブリタニアに対し、別の要求があっても、おかしくはないはずだ…

だがそれはない。





「ゼロも一緒に?!」

「そのようだ。KMごといなくなっているしな…  
地下の階層から立ち去ったようだ。」

やはり、そう簡単には捕まるわけにはいかないよな…

「何処へ?!」

「さあ、そこまでは…」

何処へか…

よく考えれば分かるぞスザク…

今日は、ナナリーがブリタニア本国からこちらに来る日だぞ。

「まさか、ナナリーを?!」

間違いないルルーシュならば必ずナナリーのもとに行くはずだ…

「十中八九そうだろうな…」

「やられたな…」

「御返し…する?」

「どうするスザク?」

「すぐに出る!」

「了解、高速艇を用意させる。僕とジノが先行する。  
内密にアヴァロンにはギルフォード卿も乗っている。  
僕らが向かうまでの間は何とかなるだろう。」

「私は？」

「アーニヤは後方支援…というかモルドレットでは僕のクロウ・クルワツハと

ジノのトリスタンの速度に追い付けないだろ。それに紅蓮は要注意だ。

モルドレットとは相性が悪い…」

「相性？」

「紅蓮の輻射波動の攻撃は、どんな装甲も貫通…いや、伝達する。  
紅蓮より機動性の劣るモルドレットとは相性が悪い…」

「分かった…」

「良く知ってるなライ…」

「それが僕の仕事だからね…色々調べたから…」

違う…共に闘ってきたからこそ知っている…僕も簡易型ではあるが使っていた…」

「紅蓮がいなくなったら前線に出る…」

「グレンは私が相手を「いや僕がする！」何でだよ？」



.....

『ログレス級戦艦上に敵を確認…これより攻撃を開始する。』

「僕の方でも確認した。ジノが攻撃後30秒後に戦闘に参加する。」  
トリスタンからハーケが発射され戦艦上にいる無頼の一騎を破壊する。

『さあ、お仕置きタイムだ!』

付近にいた月下がトリスタンに気づきKMFを後退しながら、左腕に装備されたハンドガンでトリスタンを狙う…

『可笑しな戦闘機だね! でもさあ…』

月下を狙撃していた月下のパイロットは  
トリスタンを唯の戦闘機だと思い込んでいる。しかし…  
トリスタンはスラスターを逆噴射させながらKMFモードへ変形する。

『KMF?!』

月下はいきなりこのことで驚いたのかトリスタンの鶴嘴型MVSで右腕に  
装備していた迴転刃刀をなぎ払われ、そのまま胴体を真っ二つにされた。

月下の脱出システムが起動しコックピットブロックは射出される。  
戦艦上の黒の騎士団KMFは残り4機…だけど…

右翼の護衛艦が航行不能になりログレス級の方へ流れってくる。

『はあ？』

このままでは、衝突してしまう…仕方ない！！

「アーニヤー！！」

『分かってる…』

モルドレッドのシユタルクハドロンで護衛艦を破壊する。  
何とか衝突は避けたが…少々強引だった…

『相変わらずだな…モルドレッドのやることは…』

アーニヤ、もうそれは使うなよ。総督殺しは不味いだろ。』

『守ったのに…それにライの指示…』

「仕方ないだろ。緊急だったんだから。」

それに僕が言わなくてもアーニヤはやっただろ？」

『Yes』

こら、こそはサムズアップすることろじゃないよアーニヤ…

「さて、お喋りはこのぐらいにして、そろそろ総督を救出するよ。  
僕が指揮を執る。よろしいですかギルフォード卿！」

『Yes My Load』

「戦艦内に2機の月下を確認。ジノ、ギルフォード卿はそちらをお願いします」

『了解』 『Yes My Load』

「アーニヤは後方支援よろしく。僕は甲板にいる残りを片付ける…」

甲板にいるKMFは2機…月下と紅蓮…

「黒の騎士団に告げる！」

甲板にいる二機のKMFの一機…月下は艦内にその身を隠す…  
もう一機の紅蓮はこちらを見据える…

その腕は、やはり本来の紅蓮の右腕ではなく簡易型の甲吉型輻射波動だ。

「投降してください！！ 今ならまだ間にあいます。

僕の権限で身柄の安全も保障します。 条件次第では自由も保障する。」

『ふざけるな！！ このブリタニアが！！』

やっぱり無駄か…

「残念です…ではこの戦域から離脱してもらいます。」

僕は甲板に機体を下ろし紅蓮と対峙する。

『やれるもんなら！！』

紅蓮は右腕を全面に押し出し、こちらに向かって加速してくる。通常のKMFでは太刀打ちできない。放射波動は生半可な攻撃では防がれる。そしてその攻撃も生半可な対応では防げない。

「いい攻撃だ。だけど!!」

『消えた?! 何処?!!』

『紅月!! 後ろだ!!!』

僕は一瞬だけクロウ・クルワツハのリミッターを外し、エナジーウィングによる高速移動を行い紅蓮の後ろに回る。

「これで終わりです。」

紅蓮の右腕をMVSで斬る。

だかカレンならこの状態でも戦うだろなら!!  
メインカメラを破壊させてもらう。

「はあああ!!」

『んっああああ?!!』

紅蓮は驚異の回避能力を見せ、完全直撃コースから逃れた。それでも完全によけることはできなかったよう。頭部側面を損傷、さらに無理なよけ方をしたためなのか、体制を崩し甲板から足を踏み外し海へ落下する。

『紅月イ！！ 脱出レバーを！！ 貴様ア！！』

戦艦内に身を隠していた月下がこちらに向かって突進してくる。通常の状態出会ったのならば、慌てる必要はないのだが、僕の駆るクロウ・クルワツハは、リミッター解除後は各装備の熱を放射を

行う必要があるため、戦闘を行うことはできない。シクったな…どうしたものか…

『ライらしくない…』

「アーニヤ?!」

『お終い…かくれんぼは…』

モルドレッドは月下の後ろの降り立ち月下の頭部を鷲掴み、そのまま甲板に押しつけ、月下を破壊する。破壊される寸前に廻転刃刀で切りつけられていたようだが、モルドレッドの装甲にそんな物は利かない。

『ライ!! 状況は?』

スザクから通信が入る。

「甲板上のKMFは殲滅終了。」

『こちらも終了した。』

続いてジノとギルフォード卿から、



『我が隊は藤堂を追います。』

『ああ、こっちは総督を…あつ、空に…黒の騎士団もフロートを…』  
ギルフォード卿も気づいたようで紅蓮に向かってマシンガンを放つ。  
しかしその攻撃は防がれる。

ギルフォード卿は紅蓮がフロートとシールドを得たと理解し接近しようとしたが  
紅蓮から紅い光を放つ砲撃が放たれる。

その攻撃にギルフォード卿の部隊は避ける事ができずに直撃。

グロースターはその攻撃に耐えきれず爆散、ギルフォード卿のヴィンセントは  
流石にランスロットのを元にした先行量産機であり、  
ギルフォード卿が脱出するまでその機体の原型が残っていた。

「遠距離で…」

『ライ!! まだ動けないのか?』

「あと90秒くらいは動けない。」

『だったら…スザク、お前は総督を』

『油断するな、相手はジェレミア卿に勝ったこともあるパイロットだ。』

『あのオレンジにかよー!』

紅蓮からは遠距離の輻射波動が発射される。  
しかし、直線的な攻撃はラウンズにはめったに当ることはない。

ジノはトリスタンをフォートレスモードにしてマシンガンとハーケンを紅蓮に  
射出しながら突進するが交わされる。

『おいおい、ラウンズ並の腕前か？』

『でも、これで…』

モルドレットはシユタルクハドロンの発射体勢に入る。  
通常モルドレットにロツクオンされれば否応なしに撃破されるが…  
紅蓮は違った。

シユタルクハドロンが発射されるがすでにその射線上にはいない。  
紅蓮はシユタルクハドロンの射線上のすぐ側に飛行してモルドレットに近づき  
モルドレットの頭部にそのまま蹴る。

「土足で…」

紅蓮はそのままモルドレットに対し複写波動を放とうとしたがモルドレットから  
無数のミサイルは発射されたため後退する。

そのミサイルに紅蓮はシールドで対応し傷の一つも負わない。

今までトリスタンとモルドレットが紅蓮を戦艦に

近づかせないような位置取りだったが先ほども攻防で完全にトリスタンとモルドレッド抜かれていた。

紅蓮は追いかけてくる二機に対し右腕を構える。

その腕から放出されたのは先ほどの遠距離型の輻射波動ではなく、拡散された輻射波動…あれを喰らったら…やばい?!

トリスタンとモルドレットのSignalは?!……健在!!目視でも確認!!

威力はそれほどでもないのか…

でもトリスタンとモルドレッドは動かない。

「二人とも大丈夫か?!」

「何?! あのKM…!」

「いやあ〜パイロットでしょ…本気出しときゃよかった。」

とりあえずは無事のようだ。

紅蓮は向きなおりランスロットへ向かって飛んでいく。

スザクもそのことに気づいたのか紅蓮へ向き直る。

紅蓮の背面部から何かが発射される…ミサイル…ではない…ランスロットの周囲に射出されたものが停滞している。

まさか、小型のゲフィオンデイスターバか?!

だが、対策はされている。つまり無力。

スザクはハドロンプラスターを紅蓮に向け放つ。

だが、紅蓮はそれを容易に回避し、右腕をランスロットに押しつける。

ランスロットはそれをブレイズルミナスで防ぐ。

「スザク！！ 紅蓮は僕に任せて君はナナリーを！ おそらくあと1分もない！」

僕はやっとクローウ・クルワツハが動くようになりランスロットと紅蓮に向かつて飛んでいく。

『ライ！ でも何処にいるのか…』

『スザク君！ 総督の現在位置が分かったわ。』

メインブリッジ後方のガーデンスペース、でも墜落まであと47秒！！』

『くっ、必ず助けます！ ライ此処は任せた。』

「よそ見をするな！」

『しまった！！』

紅蓮が放ったスラッシュハーケンがランスロットの頭部を掠める。損傷的には大したことはない。

「そのままナナリーのところへ！！」

『すまない、任せる！！』

僕はランスロットと紅蓮の間に機体を滑り込ませる。  
そして、黒の騎士団が使っているチャンネルに合わせて通信を開始する。

「此処は僕と一緒にいてもらうか！ カレン！」

『なんでアンタがこのチャンネルを?!』

「ゼロにでも聞いてみる」

『カレン今はそいつより!』 『ゼロ様を!』

『分かってけど、何処に?!』

「メインブリッジ後方のガーデンスペース、ナナリー総督はそこにいる。」

ゼロの目的が総督なら……」

『そこにゼロが』

紅蓮は僕を無視して僕を抜こうとする。

「行かせると思っかい？」

機体を紅蓮の進行方向に滑り込ませ侵攻を防ぐ

『私の邪魔をするなああ!!』

紅蓮の右腕が向かってくる。

「今、君が行ったらスザクと鉢合わせになってナナリーもゼロも危ない。」

「少しは考えてくれカレン。」

エナジーウイングを全面に展開しその攻撃を防ぐ

『気安く呼ぶなああ』

力任せに腕を振りぬこうとしているが出力はほぼ同等であるから停滞…

「そろそろだな…」

『何がだ？』

「ポイントD - 6に向かえ…そこにゼロが投げ出されるはずだ。それじゃあ…」

『あつー!!』

戦艦からナナリーを抱えたランスロットが出てくる。とりあえずは成功か…

あとは…カレンがゼロを…ルルーシュを助けられれば…

「ん…」

一瞬ルルーシュのナナリーを呼ぶ声が聞こえたが…  
紅蓮を見ると先ほど僕が指定した位置にいる。

あそこは、スザクの開けた穴から吹き込む風と

ランスロットが飛行することによって

生まれる風がルルーシュを吹き飛ばす確率の高いところ……  
もし別のところに吹き飛ばされてもすぐに対応できる……  
紅蓮がこの戦域から離脱していく……

どうやら無事にルルーシュを受け止められたようだ。

14話：TURN06-2（後書き）

いかがでしたか？

ほぼ初の戦闘シーン・・・

ほぼ原作遵守ですのでKMFの動きを説明するのは難しかったです。

私にこれ以上の描写はできません。

だって、文才ないもの…

それにしたってライ君かつこいいですね。

ライをお嬢さんに…いや私が…

いえ、高望しません。

もう、愛人でも構いません。

と、5割本気の冗談は置いといて、  
あと残す残骸は、プロット2話分…

いえ、確認してみたら、1話分くらいしかありませんでした。

今から新しく書き始めるのは、とても時間がかかるので、書かなくていいですか？

「レクイエム」後の話は3話程度、書いてありましたので、そちらを投稿して、また次作品…

ということでもよろしいですか？



たくさんの応援があれば頑張れる気がします。が、時間はかかりそうです。ね。

15話：TURN07（前書き）

だめで。やっぱりモチベーションが上がりません。

完成度が低い…

構成が甘い…

説明不足…

やっぱり文才が足りないと書きたいことが書けませんね。

「黒の騎士団の襲撃で多少日程は変わったけど、今日総督就任挨拶を行うんだろ。」

「ああ、そうだよ。っていうか、君達は何故僕の部屋にいるんだい？」

黒の騎士団からの襲撃からナナリーを救出し、政庁へ帰ってきた僕たちは、通常の任務に戻っている。

スザクが全体の責任者として皇帝に派遣され、僕たちは、対黒の騎士団用の戦力兼サポートとしてエリア11に派遣されている。

現在、僕は政庁内の書類整理をしている。

本来なら総督とその副官たちが行うものだが、エリアに来てまだ日も浅いことや眼が見えないことなども重なり、総督の代理となりえる僕らラウンズが行っている。

……のはずなんだけど……

「暇だから……」「暇で退屈だからかな」

アーニヤとジノは仕事もせずに僕の部屋にいて、ソファでくつろいでいる。

ソファの前においてあるテーブルには、自ら持ち込んだであろう菓子まで置いてある始末だ。

いや、あれは菓子なのか？

袋に『黒糖』って書いてあるけど…

「暇じゃないだろ?! ちゃんと仕事してよ。」

「仕事って書類整理だろ？」

「だったらライがやる方が速いからいいじゃないか。」

「まさか二人の仕事を僕にやらせる気か?!」

「何言ってるんだよ。もうやってんじゃないか…というか、もう終わってるし…」

「……もしかして、アーニヤも？」

「………」

アーニヤは声は出さなかったが顔をコクンと上下に揺らした。

「道理で多すぎると思った…」

「ライってどこか抜けてるよな。」

「うん…」

「少しは混ぜてくかと思ったけど、まさか全部僕に押しつけるとは…  
スザクの方もやってるから…事実上、僕がエリア11の責任者か…  
…」

「はあ?! お前、スザクの分もやってるのか?」

「何で?」

「いや、何でって言われても…」

スザクはナナリーに付きつきりだし、行政特区のこともあるし…」

「なるほど、そういうことか」「納得…」

「理解できたら、手伝ってほしいんだけど…」

「そんなこと言ったって、ほとんど終わってるじゃないか…」

「各部署にこれらの書類を届けるんだよ。」

そろそろナナリーの総督就任挨拶があるから

僕だけじゃ間に合わないんだよ。」

「了々解々」「分かった…」

「それじゃあ、書類を届けたらそのまま会場に集合ってことで…」

僕は処理の終わった書類を3つに分け、それぞれジノとアーニャへ手渡す。

そしてそのまま、僕の自室を出ようとするが…

「おい、待てよ。ライ」

ジノに呼び止められる。

しまった…僕より配る書類の量を多めにしたのが、ばれたか?!

「そのまま、会場に向かうんだろ？ マント忘れてるぞ。」

「おっと、そうだった。忘れてたよ。ありがとうジノ。」

「やっぱ、抜けてんなライは、」

そう言っているジノ顔を見ながら僕は「そうかもね。」と相槌をしながら、

踵を返してに持っている書類を菓子の乗っているテーブルの隅に置き、クローゼットへマントを取りに行った。

「それじゃ、先に追ってるぞライ。菓子の残りはお前にやるよ。私には甘すぎる。」

そう言って、ジノとアーニヤは部屋から出て行った。

僕がマント身に付け、テーブルに置いた書類を手に取ると…

あれ？ 何か多くなってる？

えっと…これは…

ジノに渡したヤツ…

これも…あっ！これも…

こっちはアーニヤに渡したヤツ？！

やられた…

完全にやられた…

この分じゃ、2人に渡した量より僕の方が多くなってる…  
完全に癖になってるな。

もしかして、このままいくと、将来的に領地の仕事もまかされそう  
だ…

.  
. . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
. . . . .  
疲れた…

最初から最後まで走ってた気がする…  
書類を渡しているとき以外、ずっと走ってたな僕は…  
疲れは見せないようにしないとな。  
マスコミが取れれでもしたら大変だ…

総督赴任挨拶のには、この日本…エリア11に居を構えるブリタニア貴族…  
本国や、各地域に放送するために集まったマスコミがこの部屋に集  
めっている。

僕とジノ、アーニヤの3人は部屋の端で壇上にいるナナリー、スザ

ク、ローマイヤを見守る。

「皆さん、初めまして。

私はブリタニア皇位継承第87位ナナリー・ヴィ・ブリタニアです。

先日亡くなられたカラレス公爵に変わり、

このたびエリア11の総督に任じられました。」

ナナリーは堂々として挨拶をしている。

まだ幼いながらも流石は皇族と言ったところか…

まあ、僕もその血を半分だが引いているが…

「皇女殿下なかなか様になってるじゃないか…」

「勿論…たくさん練習した…」

「二人とも静かに…」

二人とも緊張感がないんだから…

「私は見ることも歩くこともできません。

ですから皆さんに色々と力をお借りすることとなります。

どうか、よろしく願います。

早々ではありませんが、皆さんに協力していただきたいことがあります。

私は行政特区日本を再建したいと考えています。」

「な?!」隣に立っているスザクは目を見開き驚いている。



参列していたエリア11に在住する貴族たちはざわめいている。

スザク…君がそんなに驚いた顔をしていてはダメだろ…  
今の君は見られる立場なんだから。」

「おい、ライ。お前は知ってたか？ この話…」

「一応…ね…」

「あの様子だとスザクは知らなかったようだけど…」

「ああ、だけどその話はまた後で…」

此処で騒いでしまつては迷惑がかかる。

「特区日本ではブリタニア人とナンバーズは平等に扱われ、  
イレブンは日本人という名前を取り戻します。」

人種を理由に人と人が分けられることはありません。  
同じように暮し、同じものを食べ、同じように笑つていいのです。

かつて特区日本では不幸な行き違いがありましたか、  
目指すところは間違つていないと思います。

等しく優しい世界を…

黒の騎士団の皆さんもどうかこの特区日本に参加して下さい。

共に歩みよりませんか？

互いに過ちを求めればきっとやり直せる。

私はそう信じています。」

ナナリーの赴任あいさつの後、ジノ、アーニヤの2人は、僕の部屋に集まっていた。

「で、何でライはあの件について知ってるんだ？」

「まだ本国にいるときにナナリーに相談されたんだよ。」

「私はされてない……」

「たぶんスザクもな……」

「僕も何故、相談されたのか分らないけど……」

事実として何故、僕に相談されたのか分らなかった。

僕に関する記憶を全て忘れているはずなのに

以前のように接してくれるナナリー……

「それでなんて答えたんだ？」

「『何を決めるにも相当の覚悟がいる。またそれを決めるのも君自身だ。』

「ただナナリーが決めたことなら僕は僕の力の限り助けるよ。』  
つて……」

「それ……相談の答えじゃないだろ……」

「でも事実だよ……何を決めるにも自分の意思だ。」

時にはどんなに反対されてもそれを貫く決意をするときだってあ

る。

たとえそれがどんな愚かな考えだとしても…」

そつ…過去に僕が犯してしまったあの出来事の発端となった決意。

「それはそうだけどさ」

「これからどうするの？」

「勿論、公の場で行政特区のことを公表したからには、実行に移さなければならぬだろう…」

たぶんこれからはその準備に追われることになるね。

何も準備してない分大変だ。」

「そつ言えばスザクは？」

「海の上だよ。」

「海?! 何で？」

「元々、精密検査の予定だったんだけど、

殿下のあの演説を聞いて、何か思うところがあったみたいだよ。

『ナナリー達の優しい世界にゼロは不要だ!』って生き込んで、さらに、ゼロの捕縛に躍起になったみたいだ。

そして、黒の騎士団が中華連邦の総領事館からいなくなった。

地上では、彼らの基地になりつるところはない。

だとしたらどこに行くか…」

「なるほど、それで海か…」

「でも…殿下の意思を尊重するなら…」

「そうだね、見つけても手を出すべきではない…」

「でもまあ、ここではスザクが責任者だ、従うしかないさ。」

・

・

・

・

・

・

『シルバ卿、枢木卿から援護要請です。』

海上で不審な戦艦を発見したとのことです。』

「分かった、すぐに出る。正確な位置のデータはKMの方へ送っておいてくれ。」

『畏まりました。』

危惧したとおり、というか案の定スザクは黒の騎士団を捕えるつもりだ…

あの優しかったスザクを一年前の事件が変えた…

ユーフェミアの虐殺皇女…僕の知る彼女ではありえない。

たまに政庁を根け出し疎開に出ていた彼女に僕はあったことがある。あの時の印象はナンバーズにも別け隔てのない皇女だと感じた…

実際にナンバーズであるスザクを専任騎士に任命したほどだ。

らしくない…ありえない…

通常はそのくらいの考えしか浮かばないが僕にはその原因に心当たりがある。

ギアス…ゼロがルルーシュであることは  
アッシュフォード学園でのスザクの歓迎会で確認した。

僕が渡したボイスレコーダを時間になってもルルーシュが取りに来ない場合は、  
解体し焼却するようにギアスを掛けた。

逆にルルーシュがボイスレコーダを取りに来た場合は、  
僕宛てに何も書いていない手紙を無記名で出すようにギアスを掛けた。

実際にその手紙は来た。つまりルルーシュはギアスを持ちゼロであることがわかる。

スザク…君はルルーシュの友達…親友だったはずだ。

だけどユーフェミアの事件が君を変えた…のか…

君はゼロをルルーシュを恨んでいるのか…それとも…

「よう、ライ…!」

KMFの倉庫につくとそこにはジノとアーニヤがいた。

「二人にも援護要請があったのかい？」



「この手を打たれたらどうしようもない…」

そんなことを話しているうちに現場に到着する。

『何だ何だ？ スザク！ 援軍以前の問題だろこれは?!』

『…』 「やっぱりか…」

海面全体が泡だらけになっている。

メタンハイドレードによるものだろう…

燃料として、海中に貯蔵されていたタンクの魚雷を打ち込めばおのずとこうなる。

圧縮されているメタンハイドレードを解凍するとその体積は164倍に膨れ上がる。

さらにメタンとともに圧縮されていた水が幕の役割をして、現在のような泡となる。

その泡の御蔭で戦艦や潜水艦は浮力を失い転覆…

水中専用KMFも泡の上に押し上げられ身動きが取れない。

しかも、メタンである故に、火器を用いることを封じられた。

使用するものならば、引火し大爆発を起こしかねない。

『生き残った部隊を集めろ！ 黒の騎士団を『ゼロです。』 ん！』

『ゼロがこちらに向かってきます!!』

ゼロがヴァインセントの手に乗ってこちらに向かってくる。

『これがお前の答えなのか!!』

スザクはゼロに向かってVARIISを構える。

「スザク!! 待て!!」

スザクは、メタンのことに気づいていない、このままでは!!

『撃つな!! 打てば君命に逆らうことになるぞ。』

『何?!』

『私はナナリー総督の申し出を受けよう。そう特区日本だよ。』

『なっ?! 本気か?』

『ゼロが命じる。黒の騎士団は全員…特区日本に参加せよ!!』



15話：TURN07（後書き）

メタンハイドレートについての説明を書こうとこのこと見たのですが…  
シーン展開スピードが遅くなるため断念…

せっかく調べたのに…

よし、これからこもります。

バンクにある程度たまるまで、次話を投稿することを中断します。

完結したら、すべて投稿させていただきますのでよろしく願います。

いや、途中で飽きて、この作品を忘れてしまうことあるかも知れないので、

すでに出来上がっている「レクイエム」後の物語を明日投稿させていただきます。

もし、途中ストーリーを飛ばして読みたくない場合は、我慢してお待ちください。

いくら待っても途中ストーリーが投稿されることが永遠にない確率が1割ほどあります。

投稿するにしても、いつになるやら…

1か月では足りません。半年…1年？いや1年半カモ…

たくさん応援があれば頑張れる気がしますが、  
以外にも仕事が忙しいもので…

睡眠を削るのはお肌に悪いっていうし…

とりあえず、そんな感じで…

皆さんよろしく願いします。

-----

追記

指摘頂いたので修正

&

メタンハイドレートについて加筆しました。

仕事が始まるまで、まだ時間はある…

がんばります…

でもやっぱり、無理かも…

16話・TURN08（前書き）

描き下ろし、直後…

読み返しの確認はしていません。

だって、ストーリーを追ってるだけだもの…

私としてはつまらないんだもの。

たぶん皆さんもつまらないかも…

16話：TURN08

ゼロを手にのせたヴァインセントが転覆した戦艦の上に降り立ち、ゼロはヴァインセントの手から飛び降りる。

ヴァインセントはゼロが飛び降り後にすぐ空へ上がる。交戦の意思がないことを伝えるためなのだろうが…

『行政特区に協力する?! だからと言ってお前の罪は消えない。』

『スザク…』

興奮しているスザクをジノが諫める。

『分かっている。此处は退こう…』

「前軍撤退!! 政庁へ救助要請、損害報告は後でいい。身動きのできる者は、できるだけ救助を行ってから撤退せよ。

くれぐれも、メタンへの引火には注意しろ!

ゼロ、我々は貴公の言葉を信じ此処は退く。」

『ありがとう!! ブリタニアの騎士よ。』

では、翌夜この時間に連絡を出させてもらおう。』

『Q-1、私だ、海面に上昇し、私を回収してくれ。』



.....

会議室に着くとそこには、藤堂さんを中心に、朝比奈さん、千葉さん、扇さんが集まっていた。

暫くすると、南さん、神楽耶様、ラクシャータさん、C・Cが中に入ってきた。

少し遅れて、玉城が到着し、壇上の階段に腰をおろした。

「行政特区日本に入るなんて何を考えてるんだろうね？」

朝比奈さんが誰もが疑問に思っていることを口にする。そうだ、ゼロは…ルルーシュは何を考えているんだろう？

あの時とは違う、ユーフェミアの時とは…  
今度は、あのナナリーなのだ。

ルルーシュが溺愛でいていたあのナナリーに…

「さあな」

千葉さんは、皆同じことを考えているのだから、聞くなといった風な口ぶりで流す。

それを皮切りに藤堂さんは、扇さん呼び。

「ゼロの判断が我ら日本人のためにならないものなら、」と口にした。

扇さんは藤堂さんのその先の言葉を察し「藤堂さん…」と、押し殺

した驚きを口にした。

その時、ちょうど、作戦室の扉が開きゼロが入室する。誰も、ゼロに対し、声を開ける者はいない。

ゼロのより、あの窮地から脱出できたのにもかかわらず、静まり返っている。

それもそのはずだ、行政特区日本参加宣言の後なのだから…

私は、意を決してどうということな口を開いたとき、神楽耶様に割つて入られてしまった。

「ゼロ様！ 新妻をこんなに待たせて！！」

と言って、ゼロに抱きついた。

ゼロは、そのことを「神楽耶様、変わらぬ元気な御姿安心しました。

」と流した。

神楽耶様は「ゼロ様こそ、相変わらず人を驚かせてくださいますね。

」

そう言って、誰もが疑問に思うあの事を口にした。

「特区日本に参加するなんて…」

そのことを聞いた扇さんが、「そうだ、あれはどういうことなんだ」とゼロに問いかける。

それに、玉置が「だから、誘いに乗ったふりしてブリタニアを潰すんだよ」と自らの意見を述べる。

それに対し、ゼロは全面否定する。

「戦って、戦って…それでどうする…」

衝撃だった。

私たちは日本を取り返すために、戦ってきた。

それを全て否定されたような気分だ。

行政特区日本に参加したとして、日本という名を取り戻す。

しかし、それでは本来の日本を取り戻したことはない。

エリア11というブリタニアの国の中にある日本…

これは、本来の日本ではない…

「さてよ!! 仲良くしようってんじゃないよな。」

「それともあるのか? 戦わずにすむ方法が…」

「ブリタニアの中から変えるつもりか? 我らは独立のために…」

玉置、扇さん。藤堂さんの意見は、私の考えを全て言い表していた。それに対しゼロは、話を逸らす。

「藤堂、日本人とは何だ?」

咄嗟のことで藤堂さんは答えられない。

私でも答えることができない。

実際に日本人とは、何か?



それ答えることは難しい。

私は、日本人の母とブリタニア人の父を持つハーフだ。ただ私は、自分が日本人であると言い切れる。

何故だ、考えたことは無かった…  
いや…一度だけある。

あのとときだ。

ライと買い出しに時、ライがなぜかいつものライじゃなくて…

ライが倒れたあのとときだ。

私は、ライに聞いたんだ。

『ライの性はなに？』

それに対し、ライの答えは、『どちらを？』だった。

私は、その時に民族：日本人とは何かを考えて自ら答えを出したんだ。

『私は日本人の紅月可憐。私自身がそう思うのだからそれは変わらない。』

そう、私自身がそう思うこと。

それは自身の『心』…信念で決まると…

「言語か、土地か、それとも血族か？」

ゼロの問いかけは進む。

それでも誰も答えない。

私は、確信をもって答える。

「心よ。私とライはハーフ、だけど私たちは自信を持って言える。私たちは、日本人。紅月可憐と妃ライよ。」

ゼロは「そうだその通りだ。自らが日本人としての心持っていれば日本人だ。」と言い切った。

「だから、何が言いたいんだよ?!」

とそう、玉置が立ち上がり「意味がわかんねんだよ」と身振りを加えながら言い放つ。

「行政特区日本、に参加してもしなくても、この日本の地での活動は制限される。」

私はゼロ、望まれば何度でも奇跡を起こして見せよう。そのために、私は帰ってきた。

私は…黒の騎士団は日本人の希望だ。協力してくれる一般人も多くいるだろう。

だが、我らは1度失敗しているのだ。その一因により、ブリタニアに憑く者も出てくる。

すなわち、この地に我々の定住ができる場所はない。そこで、拠点を別の大地へと移し、体勢を立て直す。

行政特区日本への参加は、我々黒の騎士団と我々に

賛同してくれる日本人をこの地から逃がすための策だ。

明日の交渉により、百万人の日本人を救い出す。」

でもどうやって？と思う私の心を扇さんが代弁してくれる。

「しかし、どうやって？」

特区日本に参加しても特区区画に隔離されるだけじゃないのか？」

「間違っているぞ扇。たとえ、特区日本に参加しても我々の犯した罪は消えない。」

特に私の犯した『皇族殺し』は許されることはないだろう。

そこで『ゼロ』を、国外追放処分とするようにこちらから誘導する。」

「な！？ また、自分だけ逃げるつもり？！」

朝比奈さんのその発言を皮切りに藤堂さん、千葉さん、扇さん、南さん、玉置がゼロに向かって反論をする。

玉置に至っては、ただの暴言だが…

それに対し、ゼロはいつものように、

「違うな、間違っているぞ。私はゼロ』を、国外追放処分と言ったが、

私を国外追放処分とは言っていない。」

「何が違うんだ。同じ意味だろうが！」と玉置のヤジは続く。

「では玉置…私がこのマスクを外したとき、私がゼロであるとだれが証明する？」

「え?! そりゃあ、仮面だろ？」

バカ丸出した。

仮面を外したときと言ったのに…

「不正解だ。玉置、だが今回の作戦の根本であること合っている。

」

え?! どういうこと?!

「私がゼロである証拠、それは、心だ。

日本を独立させる。ブリタニアを倒す。そう言った思想を持っている。

つまり、この思想を持っている者は皆、ゼロと言える。

今回の作戦は、ブリタニアに『ゼロは国外追放』だと言わせ、

百万人全員でこの地から一時離れるそういう作戦だ。」

衝撃だった。

合法的に百万人が国外追放なんてありえないことだ。

「理解はした、だが納得はいかない。この地を離れるとは…」

藤堂さんは、この地…日本から離れることに抵抗があるようだ。

「ならば、藤堂さん、いや、いい、これは私個人の心の問題だ。」そう



.....  
「なるほど、そんなことがあったのか……」

私は、今C・Cの部屋で、C・C、ルルーシュ、私の3人で、ルルーシュの記憶が書き換えられた時に起きた出来事。

その時に合った、ライのことを話していた……

「情報は足りないが……少なくとも

ライの記憶が書き換えられている可能性は捨てきれない……」

厄介であるのは、狂王としてのライが覚醒している可能性……

記憶喪失前と後では、人格の形成がとこなることはいくつかあるパターンだ……

その可能性を捨てきれない以上……」

ルルーシュは、私の話を聞いて考え込んでしまった。

その時の独り言で何か引つかかる……

「ちょっと、ルルーシュ、あんたはライを知っているの？」

「ああ、知っているとも、君も知っている。

ただ単に、君が忘れていただけだ。」

私が忘れて……だけ……

そんなはずはない。ライとはあのとき初めて……

いや、なぜかあのとき、彼と顔を合わせたとき何故か懐かしく感じた。

初対面じゃなかった…じゃあ、なぜあの時ライは言ってくれなかったの？

「混乱しているところ悪いんだが、もう面倒だ、思いだせカレン。ライとお前は、黒の騎士団の双壁と言ってもよいコンビだったのだぞ。」

C・C・はそういいながら両手を私の両頬にあて、そのまま顔を私の顔に近づけてきた。

「ちよつ、C・C…」「動くな…」

私の静止は無視され、そのまま、C・C・の額が私の額についたその時！！

私の中に多くの情報が流れ込んできた。

いや、私の忘れていた記憶が克明に浮き上がってきた。

そうだ、ライは確か記憶喪失で…

あの後、僕らは政庁に帰還し、さまざまな事務処理に追われる…

事実僕は、ジノが『ゼロからの連絡が来た。』と呼びに来るまでは、

ずっと部屋に缶詰…一睡もしていない…

なんだか納得行かないのは、着々と処理いして数を減らして行ったはずの

書類が一向にその数を減らしていないこと…

その理由は、別のところで書類整理をしているジノとアーニヤが僕

の方へ  
書類を回していることに原因がある。

書類を運んでくる士官と文官の話によると、

『ライの方が処理が速いからライの方へ持って行け』と命令された  
そうだ…

確かにラウンズに命令されれば総督であるナナリーを除けば  
その命令に逆らえる者は同じラウンズしかない…

よって、この書類は僕が処理することになる。

有無を言わずにジノとアーニヤのもとへ突き返せばよいのだが、  
ジノとアーニヤの場合は…言わずとも分かるか…

ジノが僕を呼びに来た時には奇跡的に書類整理を終えた時だった。  
なんと言うか、タイミングが良すぎて悪意を感じるほどに…

ジノの話によると、スザクとアーニヤもこれから呼びに行くから、  
僕にも動向してほしいとのこと。

というか、すかさず僕の首に腕を回し強制的だったか…  
肉体的にかなり辛い、指摘されてはじめて気付いたが僕の眼にはク  
マができていた。

自らの健康管理がおろそかになっている。  
気付けばあしもおぼつかない。

そうして、ジノに振り回されながら、自らの確認をしていると、  
不意に視界が暗くなり始めた。



気付いた時には、僕の視界は完全に暗転していた…

16話：TURN08（後書き）

次話からなんと新展開？！

するといいな…

誤字脱字の報告よろしくお願いします。

## 17話（前書き）

難産でした…

今回の内容は、直接ストーリーの関係するものではありません。

ストーリーとの合間の繋ぎ部分です。

読みどころ部分はありません。

そして短いです。

次話で、ライ君にフラグを建てられた人を出そうと思っていますのでもうちよつと待ってください。

できれば1年単位で…

P・S・

今回、ルビに初挑戦です。

わかりにくい描写だと思いますが察してください。

## 17話

「おい、いい加減に起きろ。」

誰…？

僕を起こすのは…

「起きろ…」

僕は、その声に逆らえずに目を開ける…

しかし、目を開けた目の前のその空間は、真っ黒だった。

自分の手さえも視認できないほどの暗闇…

暗闇が、僕の前に広がっていた…

真っ暗で、何も見えないはずなのに

広い空間が広がっていると確信をもって言えるのは何故だ。

「やっと起きたか…」

「誰だ？ 君は…」

「誰だ、とは聞き捨てならないな。酷いじゃないかなあライ

私だよ。私…」

真っ暗で何も見えないので確認はできないが、

私を起こしたこの者は、どうやら私の知っている人物らしい…

だが心当たりはない…  
僕はこいつを知らない…

「そんなはずは無いぞ。ライ、君は私を知っている。  
知っていないければならない。」

心を読まれた？  
ギアスなのか？

じゃあ、こいつはマオという名の男…  
しかし、こいつはC・Cに…

「ギアス保持者であることは正解だが、私はマオではない。  
私は、あんな奴よりもっと早く君に合っている。  
私は、誰よりも先に君に会っている。」

「知らない！ 僕は君を知らない！」

「知らないことはない。私は君の罪そのものなのだから…」

僕の罪？

何が…僕の罪…なんだ…

「忘れたとは言わせない。

君は多くの命を奪ってきたんだ。それを忘れたとは言わせない。」

そつだ。僕は、一度目から目覚め、眠りにつき、  
再び起きて今に至るまでたくさんの命を奪ってきた…

それが僕の罪…でも、それは…

「戦いだから…戦争だからと言って許されるのか？  
それに、その罪は、君私の罪の一部でしかない。」

思い出せ。私君が犯した罪を…  
眼をそらすな。自らの罪から…」

僕私の罪…

何だ？ それは…

「今の君は、どこから始まったのだ？  
今ここにいる私君は何故此処にいる？」

僕は、V・V・に起こされて此処にいる…

「その前は？」

神根島で眠っていた…

「その前は？」

記憶を失っていた僕は、アッシュフォード学園に拾われ、  
そこで様々に人にであった。

世界の色を、自らの失っていた色をその人たちの御蔭で取り戻せた  
んだ。

「しかし、なぜ君私は再び眠りに就いた？  
そもそも、なぜこの現代まで眠りについてた？」

それは、僕の力が大切な人を傷付けたから…  
大切な人を…母と妹を…

僕が守るべきあの二人を僕が自ら…

だから僕は、眠りについた。

そして、自分の罪の重さから逃げるためにギアスを自分に掛けた…

全てを忘れ、眠ってた僕は、起きたとき記憶喪失として…  
過ごした…

でも、思いました。

僕のは皆を傷つける…そう思ったから僕は再び眠りについて…

そうだ。私は、眠りに就いた。

だが呼び起こされた。V・Vによって…

彼らの駒としてギアスを掛けられた。

だから僕は此処にいる。

それを知っているってことは、君は僕はなのか？

そうだ。私は君だ…君が忘れた。狂王としての私《僕》だ。

そうか…君は…僕が忘れていた私…

僕の罪を…僕がこれから進むべき道を…行動するための指針を…

いや、そんな、崇高な意はない。

これは、私が忘れてはならぬ事を思い出したにすぎない。





そうだ！　ゼロとの通信会合はどうしたの？」

「ライが倒れちゃったから、ジノとスザク、ローマイヤ、それから、キャメロットのロイドとセシルが出た。」

話し合った内容はこれにまとめてあるって…」

そう言って、アーニヤは数枚の紙が止められているバインダーを手渡してくれた。

あれ？

「アーニヤは、会合に参加しなかったの？」

アーニヤは「心配だったから…」と言って顔を伏せた。

「もしかして、ずっと僕についてくれたの？」

アーニヤは、顔を伏せたまま、小さく頷いた…

「そっか…ありがとう…」

「アーニヤはこの書類の中身見た？」

「まだ、暇がなかったから…」

見る暇がないほど何があっただんだ？

「そっ…それじゃあ、一緒に確認していこっ」

- 1 帝<sup>ド</sup>国<sup>コ</sup>臣<sup>シ</sup>民<sup>ミン</sup>として「日本人」の名を取り戻す。
- 2 ブリタニア人の特権は存在しない。
- 3 日<sup>イ</sup>本<sup>レ</sup>人<sup>ブ</sup>としての規制は存在しない。
- 4 黒の騎士団の団員はすべて特区日本に参加する。
- 5 またゼロは、百万人の参加者を確約
- 6 犯罪歴のあるものは罪一等を減じる。
- 7 三等以上の犯罪歴があるものは執行猶予扱いとする。
- 8 シズオカゲッターに特区の拠点を設置する。
- 9 のちに特区参加者が増えてきた場合、特区を拡張する。
- 10 また、産業基盤が確立するまで、  
サクラダイトの輸出を行う権利の一部を与える。
- 11 ゼロはエリア特法12条第8項に従い、国外通報処分とする。
- 12 Knight Of Phantom ライ・シルバ卿に  
命<sup>イ</sup>ず、  
周辺状況が終了次第、速やかに本国に帰還せよ。

大体的内容は、前回の行政特区日本の確約と変わらない。  
大きく違う点は、ゼロが国外追放となる点…

そして、僕にブリタニア本国へ帰還命令が出ておりこと。

「ライ…最後のは違う…それはあなたへの指令書…」

「ああ…本当だ…」

確かに、最後の1枚だけは、僕への帰還命令書だった。

「ライ、やっぱり疲れてる。

少し、休養しないと…」

「いや、でも帰還命令が出てるし…

すぐに帰還しないと…」

「この帰還命令は第3級の命令書…

5日の猶予期間がある。

緊急帰還命令の第1級命令書でなくてよかった。

ここから本国まで、半日、十分に休み時間はある。」

「確かにそうだけど、本国に帰還するまでに行政特区日本のこととか、

やらなくちゃいけないことも、たくさんあるから休んでられない

よ。」

「ダメ、ライは休んで…」

仕事は私たちに任せて…」

「でも…」



## 17話（後書き）

すみません。

つまらなかったですよね…

今回は、ライ君の一部である狂王を表面化させるための一種のフラグです。

えっ？

なぜかって？

それは、新展開だからだよ。

ライ君にフラグを建てられた人に対しての心理描写を描いていくための！

えっと…

ライ君にフラグを建てられた人は…

LOST COLORSから数えると…

いっぱい過ぎて全員書けませんね…

だから、とりあえず、すでにLOST MEMORYSに出てる人物から数人出そうかなと思っています。

誰がよいかは、感想か、私にメッセージを書いてください。

参考にさせていただきます。

というか紅い人と桃色の人は繋ぎの関係上出てくるんですが…

と…

ここまで書いておいてなんですが…

次の更新はいつになるかわかりませんので未長くお待ちください。

まだ読んでいない人は絶対に「大切なお知らせ」は読んではいけません。

読むとしても『まえがき』までで我慢してください。

時間が取れる限り、執筆に力を入れますので応援よろしく願います。

## 18話（前書き）

PCが直りました。

詳しいことはわかりませんが、保存中に電源が切れてしまったため、メモリアドレスへの書き込みエラーが発生していたみたいです。

やっぱり、パソコンが不慣れな人に貸すのはやめた方がいいですね。

何かしら問題が起きます。

というわけで次話の投稿となります。

一切読み返していないので、誤字脱字等が多いと思いますがよろしくお願いします。

紅いあの人からの視点です。

P.S.

大切なお知らせ（最終話）を削除しました。  
理由は、あとがきで…

## 18話

思い出した…

私が始めてあったのは、アッシュフォード学園…

気を失って倒れておたところをミレイさんが匿って  
ペントハウスで寝泊りすることになったんだ…

その生活の中で彼は記憶探しをしていた。  
でも…彼は、黒の騎士団に入団した。

確かあの時は、C・C・が連れてきたんだ…  
ライは、記憶を失ってたけれど、KMFの操縦ができた…

いや、卓越していた。  
それだけじゃない。

作戦を立てることや指揮能力も高かった。  
だからこそ、私は一緒にいて安心できたのだ。

だけど、それだけじゃない。  
ライは、優しかった。

誰よりも…  
だからこそ安心して背中を預けることができたのかもしれない。

そして、私たちは知った。  
ライがキョウト六家と遠い親戚に当たる家系のハーフであることも。



あの時、私は、嬉しかったんだ。  
心から嬉しかった。

ライが日本人とのハーフであることが…  
私がライと同じハーフであることが…

でも彼は、いなくなった。

黒の騎士団から、アッシュフォード学園から…

そして私たちの記憶から…

その理由がC・Cとルルーシュから聞いたけど…  
納得できない！

ライが過去の人間だなんて！  
だって、ライは現にここにいた！

私の隣で笑ってた。

そんなライが敵かもしれない、なんて信じない！

『ライは今、Knight Of Phantomとして、日本に  
赴任している。』

君も交戦したことがあるだろう。

棺桶を背負ったあのふざけたKMFだ。

しかし、アッシュフォードの件で俺のことが  
ばれていないことから、スザクや機情との直接的な繋がりはない

のだろう。

そうなるよ、あの接触は不自然だ。

ライは、なぜ俺に接触してきたんだ？

俺に味方だと思わせて油断を…

いや、それならば、ラウンズ等ではなく黒の騎士団に直接…

いずれも、憶測の域を出ない。

俺の願いとしては、ライ自らの意思で行動していることだ。

最悪なのは、ライの記憶が書き換えられていること。

どちらも。ライが味方だという確証に至らないが…

前者の場合は望みがある。

後者の場合は…

いや、現在の状態では、敵側に所属していることに変わりない。  
百万の奇跡  
今回の作戦で出方を見るかしないな…

カレン…辛いと思うが割り切ってくれ…

それに…俺が記憶を取り戻す以前までに合ったライ…

あの時からすでに、操られていた可能性も捨てきれない。

もしもの時は、迷わず討て！』

違う。絶対に違う。

ライは絶対に敵なんかじゃない。



まるで、死体安置所におかれている一つの死体のようだった。

それは、なぜか注意してみればわかった。  
主張が少なかったのだ。

呼吸は少なく、一度に吸い込む空気も少ない。  
心臓の鼓動も限りなくゆっくりで、体温も感じさせないような表情  
でライは寝ていた。

だから不安に、なったのだ。

目の前で寝ているこの人がライなのか…

たとえライだとしても、本当に目覚めることがあるのか…

医務室にいたドクターがただの疲労だといっても私の心は不安に染  
まっていた。

ライが起きるまで片時も離れなかったのはその不安があったからな  
のかも…

私は、ライが起きてくれた心から嬉しかった。

私がつけているもので、誰にも奪われることのないはずの記憶は…

何故か、私の付けている記録日記と食い違う…

たまに、意識が消えているときもある。

自分が今どんな状態になっているのか分からない不安が今までには  
あった。

だけど、ライと出会ってから、何故かその不安もなくなっていた。

でも、ライが倒れて、ライを失うことを意識した瞬間に私の心は不安に染まるのだ。

今までは、ライの傍にいただけでよかった。  
でも、今回、ライが倒れたことで気がついた。

傍にいただけじゃダメなんだ。

唯、傍にいただけでは、何時どんな時に失ってもおかしくない。

傍にいてもらいたいとき、支えてもらいたいとき、

安心をしたいとき、幸福を感じたいとき、感情を共有したいとき、

そんなときが、何もしないで得られるわけじゃない。

私自ら行動しなくちゃいけないんだ。

何時でもライの傍にいたために、ライを支えて、

ライの不安を和らげて、ライと幸せという名の感情を共有するために…

ライは、本国へ帰還命令が来てしまったのでしばらく離れ離れになっ  
てしまっけど…

私はこのときに決めたんだ。

ライのパートナーだと胸を張って言えるように！！

ライの力になれるように！！

自ら行動しようって！！

『黒の騎士団に告げる！』

投降してください!! 今ならまだ間にあいます。  
僕の権限で身柄の安全も保障します。 条件次第では自由も保障  
する。』

改めて聞いてみれば、ライの声だと分かる…  
だけど、私はこのとき、冷静じゃなかった。

『ふざけるな!! このブリタニアが!!』

そうだ。こんな風に言い返したんだ。

日本人のライに対して…

『残念です…ではこの戦域から離脱してもらいます。』

そう言って、ライの機体は戦艦の上に降りて私の紅蓮と向き合った。

『やれるもんなら!!』

私は、問答無用で、甲壱型輻射波動をライに向け、突貫した…

『いい攻撃だ。 だけど!!』

『消えた?! 何処?!』

だけど…一瞬にして交わされちゃった…

『紅月!! 後ろだ!!』

『これで終わりです。 はああ!!』

このときに右腕と紅蓮の頭部を破壊されちゃったんだ。

でも、完全に後ろを取られていて、  
コックピットを狙われてもおかしくはなかった。

やっぱり、ライはワザと…

『んっあああ？！』

そして、バランスを崩して海に落ちちゃったんだ…

『紅月イ！！ 脱出レバーを！！ 貴様ア！』

『ダメ…動かない！！』

んっ！！ んんっ ああうっ！ 落ちちゃっ…

ごめんね紅蓮…お母さん…お兄ちゃん…

助けて…ライ…』

！！何で？！

私…無意識にライの名前呼んでたんだ…  
目の前のKMFがライだと知らずに…

『ベストポジションじゃない』

でも、もし、ライが通信を聞いてくれてたら…

『えっ、ラクシャータさん?!』

きつと…助けてくれたのかな…

『お待たせ、黒の騎士団特製の飛翔滑走翼。』

教本の予習はちゃんとやってた？』

このときは、ラクシャータさんの声で、現実に戻されたんだ。

『あつ、ハイ大丈夫です。』

不思議と不安感は、なくなってた。

『じゃあ、本番言ってみようか』

実践では、初めてであるはずなのに…

『基本誘導はこちらでやりますね。ゼロ様の救出を頼みます。』

現在も落下中であるはずなのに…

『ハイ』

失敗して…

『3番垂直発射艦解放』

海へ落ちることもありえたはずなのに…

『紅蓮式式本体との接続信号を確認』

成功する、確証はなかったはずなのに…

『舞い上がりな、飛翔滑走翼』



不思議と冷静でいられた。

『回れ!』

何故だろう？

『誘導信号確認。同調軸索敵良し』

やっぱり…

『連結』

ラクシャータさんの声なのかな…

『連結!』

緊迫感のないあのイントネーションが、  
現実を覆い隠すのかもしれない。

『飛べえ!』

現に、私はライについて何か分かるかもしれないと思って、  
機乗記録を聞きに来ているのに、すっかり別のことを考えていた。

『続けてえ〜徹甲砲撃右腕部』

『右腕部。連結速度まで減速中、伝送ニューロン0.5から0.8  
MMP

生涯に感無し、第壱から第五まで正常に稼働しています。  
衝撃コントロール。始動を確認、連結できます。』

この瞬間、紅蓮式は可翔式へと生まれ変わった。

『敵がどれだけいようと!!--!』

今までの紅蓮とは、違う。

『紅月くんゼロを...!』

空を飛べるだけじゃない。

『助けて見せます!』

でも、この紅蓮が通用しなかったらおしまいね...!』

ゼロという存在が、日本人の希望なら、

この瞬間の希望はまさにこの紅蓮だった。

『でも、やるしかないから撃ってみましょうか。』

『そりゃあ、そうですね。』

新装備である輻射波動砲弾を発射し、

ト部さんがなくなった原因ともいえる、KMFの同型機を撃破。

『やれる!この紅蓮可翔式なら』

この後すぐに、トリコロールの機体と、超重量を思わせる機体が、こちらに仕掛けてきた。

『!』のお!!--!』

紅蓮は私の思い通りに動いてくれた。

『紅蓮をなめるあ!!』

敵のKMFをもつわまる旋回性で、2機の上空を掠め取ることができた。

『あんたらは後回し!!』

まだ、ゼロが：ルルーシュがまだ戦艦から出てきていなかった。迎えに行きたいけど、目の前のランスロットが邪魔だった。

『どけえ!!』

新装備のゲフィオンネットを使って、ランスロットの動きが止まれば、一番だったけど、

『でも足は止まったね!!』

やっぱり対策は取られてた…

この後、紅蓮の輻射波動とランスロットのシールドがぶつかって、数秒均衡状態が続いたけど…

『今だ!!』

一瞬だけランスロットに隙ができたから、スラッシュハーケンを討ちこんだけど、頭部にことしかできなかった。

そして、その後に…

『此処は僕と一緒にいてもらおうか！ カレン！』

すぐに、新手のKMFが出てきた…

棺桶のようなものを背負っているふざけたKMFだ…

『なんでアンタがこのチャンネルを?!』

しかも、しかもこちらの通信チャンネルで交信を行ってきた…

『ゼロにでも聞いてみる』

まって、違う!!

このKMFはライのKMFだ。

だから、私に直接通信をつないだんだ。

私とライだけの通信チャンネル。

『カレン今はソイツより!!』

『ゼロ様を!!』

だけど、何で、私はライのことをしっかりと思い出した…

『分かってるけど何処に?!』

今では、ライが何故、記憶喪失になったのか。

『メインブリッジ後方のガーデンスペース、ナナリー総督はそこに  
いる。』

ゼロの目的が総督なら…』

信じたくはないけど、ライの過去を…

『そこにゼロが』

『行かせると思っかい？』

ライと過ごした時間。

『私の邪魔をするなああ！！』

『今、君が行ったらスザクと鉢合わせになってナナリーもゼロも危ない。』

少しは考えてくれカレン。』

ライの優しさ…

『気安く呼ぶなああ』

『そろそろだな…』

ライのぎこちない笑顔…

『何がだ？』

『ポイントD - 6に向かえ…そこにゼロが投げ出されるはずだ。それじゃあ…』

ライの本当の笑顔…

『あっ！！！！』

でも何で、さっきの一瞬までライのことを忘れていたの？

これじゃあ、まるで…

「カレン」

！？

不意に聞こえる女性の声…

「一つ、お前に忠告することがあったのを忘れていた。」

自分勝手な、物言いで、他人の意見や心境を一切考えないこの口ぶり…

C・C・だ…

「何よ？」

「カレン、貴様は確かにライのことを思い出した。だが、それだけだ。

力から完全に解き放たれたわけではない。そのことを忘れるな。」

「何が言いたいのよ？C・C・！！」

「端的に言えば、貴様にかかった力は解除ギアスされていないということだ。

気をつけるよ…油断しているとまたライのことを忘れるぞ…」

えっ！？ 何て…

それだけ言つて、C・C・は後ろを向いて去つていた…

私は、C・C・の言つていたことと、今現在自分の体験したことが重なつて、混乱していた…





やっぱり、途中で、最終話を投稿してしまうと、最後はこうなるからといった、盛り下がりがあつたために削除しました。

読んでくださった方にはありがとうございます。

読まずに待つていてくれた人もありがとうございます。

これからのストーリーでどのように、最後につなげるのかをお楽しみください。

## 19話(前書き)

お久しぶりです。

ナナミです。

やっと次話の投稿です。

待ってくれた人はありがとうございます。

そしてごめんなさい。

進行が遅くて…ストーリーと投稿速度の二つの意味で…

そして、一気に読んでくださっているご新規さん。

このような作品を読んでいたただ恐縮です。

できれば、感想、アイデア等を頂けると助かります。

あまり、驚きの展開がない内容だけど19話をどうぞ…

結局僕は、日本で休養をとり…

いや、アーニヤに無理やり休養を取らされたと言えいいのか…

帰還命令期限のギリギリまで、ベットで寝かされていた。

僕の本来行っていた仕事までも、すべてアーニヤが行っていたようだ。

サボりがちだったジノまで、ものすごい剣幕で仕事をさせられていた…

何時も、二人がああの調子であれば今回僕は倒れずに済んだと思うんだけど…

「お久しぶりです。ベアトリスさん。」

「随分、遅い帰国ですね。シルバ卿…」

それと今は公務中です。そのような呼び方は感心しませんね。」

僕は今、ブリタニアの本国へ帰国し、その報告を彼女…

ベアトリス・フランクスさんに行っているところである。

「失礼しました。フランクス卿。」

Knight Of Phantom ライ・シルバ。現時刻を持って本国へ帰還しました。」

彼女は、現皇帝であるシャルル・ジ・ブリタニアの主席秘書であり、同時に、皇帝の警護を務める帝国特務局の総監も担っている。

皇帝の直轄であるはずのナイトオブブラウズが帰国報告する対象は、皇帝であるはずだが、『皇帝』という立場上、人事の異動などの事務処理は行わない。

それを行うのが彼女、ベアトリス・フアランクスなのである。

彼女は、以前、Knight Of Twoとして、その実力を発揮していたという。

その彼女が、なぜ、現在皇帝の主席秘書を行っているのかは僕には分らない。

彼女自身の年齢は20代半ば、Knight Of Oneである  
ビスマルク・ヴァルトシュタイン卿が

現在でも、現役を続けていることから、彼女がナイトオブブラウズから席を外したことは謎が残る。

「帰国報告受領しました。

シルバ卿、あなたの本日の校務はこれにて終了とします。」

それと、明日10:00、あなたは皇帝陛下との面会が予約されています。  
決して遅れぬ様にしてくださいね。」

ベアトリスさんは、そう僕のことを睨む。

信用に足りないのだろう。

いきなり現れた男がすぐにラウンズになったのだから…

「分かってますよ。ベアトリスさん。それと、これ…一応お土産です。」

僕は、手に持っていた紙袋をベアトリスさんに挿し出すが、ベアトリスさんは、僕をキッと睨んでこう言った。

「シルバ卿、ですから校務中にはそのような呼び方は感心しないと…」

「いえ、僕の本日の校務はもう、終わりましたから…さつき、ベアトリスさんが仰ったでしょ？」

僕の反論に、ベアトリスさんは、少し困った顔をしながらさらさらんでくる。

「確かに、そう言いましたが、私自身は、まだ校務中です。」

「まあ、そう言わずに…たまには息抜きも必要ですから…」

僕は、紙袋をベアトリスさんに紙袋を押しつけてその場を後にした。

何時も冷静で物静かなベアトリスさんが『待ちなさい』と声を上げているのを聞こえた気がしたが、自分でありえないと思  
い…

僕はその場で振り返ることはしなかった。

. . .  
. . .  
. . .  
. . .  
. . .  
. . .  
. . .  
. . .  
. . .  
. . .

謁見の間…

僕は今、現ブリタニア皇帝と対峙している。

皇帝の距離は、5メートルほど…

皇帝がギアスを発動してから十分すぎるほどに対処をできる距離だ。

僕のギアスの効果範囲でもある。

だが皇帝は、僕のギアスを警戒するでもなく、使用する素振りをするわけでもない。

寧ろ、堂々構えているようだ。

「久しいな。狂王よ。」

皇帝が僕を堂々と狂王と呼ぶのは、周囲に僕ら以外がないからなのか…

それとも、僕が気付いていないだけで、この謁見の間には、『同志』となっている者が隠れているのか…

「いまさら、何の用だ？」

僕を駒として使うとあってラウンズに加入させたが、その扱いに困ったか？」

現に、僕がラウンズに加入してから、ギアス関連の指令は下っていない。

むしろ、僕が関わろうとした時、V・Vは、

『この件にこれ以上関わるな』

と、僕に楔を打ち込んだ。

まるで、僕を持て余しているかのようだ。

「そう、ではない。

単に、今までは貴公を同志に迎える準備が整っていなかっただけのこと。」

『同志』に迎え入れる？

ふざけている。

僕を眠りから覚まし、ギアスで自由を縛っておいて…

「何を言っている？ それは、僕を真に取り込もうとしているのか？」

「違う、貴様ではなく。貴様の中にいる狂王殿へ申し出ているのだ。」

皇帝は、静かに、そう言った。

まるで、僕を相手にしてはならず、僕の中にいるであろう狂王を呼びかけるように…

だが、それは、より一層僕をいらだたせた。

「謀っているのか？」

確かに僕は狂王と呼ばれる存在であったことは認めよう。

だが、それは過去の僕であり、今ここにいる僕と同一人物だ。

僕の中にいる、狂王に申し出ている？

ふざけるのもいい加減にしておらおう！…」

「ならば聞こう…」

狂王であった頃の貴公と今の貴様…

まったく同じ考えで行動をしていると言えるのか？

否！

断じて否だ。



貴様は、一度記憶を失い、現在の俗世に染まった。

そこに、狂王としての一部の記憶を取り戻したとしても、それは別人だ。」

皇帝は、僕を否定した。

過去の狂王と僕は別人であると…

「ならば、なぜ僕を『同志』に誘う?! 答えろ!!」

僕が感情を荒げそう叫んだのを見て皇帝は少し微笑んだ。

「貴様は、すべてを思い出したはずだ。

貴様が狂王となった理由。

狂王の強さ。

狂王として行ったこと。

狂王としての失敗。

狂王の罪。

狂王の弱さ。

「そう、貴様が狂王だったことろの全てを…」

何故?

何故、皇帝が僕記憶の全てを思い出したことを知っている？！

僕は確かに、夢を通じて全てを思い出した。

今まで全てを思い出した気になっていたが、一部の記憶は、なくしたままだった。

だけど、思い出した僕の『罪』の記憶。

僕は、母と妹を自らのギアスに掛け殺めてしまった。

悲しみの海に溺れた僕は、眠りに就いたが、それだけが僕が眠りに就いた理由ではなかった。

2人を失って悲しみの中で気付いた。

僕はやりすぎた。

多くの命を奪いすぎた。

敵味方、守るべき民、受け入れるべき民。

僕は必要以上に奪いすぎた。

僕は、悲しみの海の中で、罪の意識を背負い、どこまでも沈んで行った。

誰も、僕を支えられない。

誰も、僕を理解できない。

誰も、僕と並ぶことはできない。

誰も、僕を癒せない。

誰も、僕の罪を責めない。

誰も、僕を殺せない。

誰も、僕を救えない。

「世界は、嘘を付いている。」

皇帝の声が僕を現実へ引き戻す。

今の僕を支えているのは、

僕が記憶を失っていた時に得たこの世界の記憶

再び目覚めてであった人たち…

ルルーシュ・ナナリー・スザク・ミレイさん

シャーリー・カレン・リヴァル・ニーナ

たくさんの人たちへの僕の思いが、僕を守っている。

僕を、僕として形作る。大切な思い…確固たる意志…

「飢餓・貧困・戦争・差別・暴力・虐殺・破壊・テロ…」

「ふざけるな、飢餓も貧困も、貴様が動けば救えるだろう!!  
貴様はそれだけの地位も力も、そのすべてを手に行っている。」

それだけじゃない! 戦争も、差別も、暴力も、テロも、破壊も、  
全ては、貴様が行っていることだろう!!」

「狂王である貴公なら分かるはずだ。我が…ブリタニアが、  
行動を起こさなくとも、戦争は起きる。差別・暴力・テロ・破壊  
も仕方。」

狂王とならねばならなかった貴公であれば…

安寧を得るために全てを奪うことを命令した貴公であれば!!  
ブリタニアの国はそのものとして名を残した貴公であれば!!」

そうだ。

私は、あの時選んだのだ。

母と妹を守るために…

他の全てを犠牲にしても必ず守ると…

守るために、兄たちを殺し、王としての地位を手に入れ、

国が攻められる前に攻め…侵攻していった。

たくさん障害があった。

侵攻した国の民・兵。

侵略された彼らは、私の統治を認めない。

彼らは、憎むべきできてある私に全て反旗を翻す。

母や妹は何時も心配していた。

彼らの待遇はどうなるのかと…

反旗を翻したとしても寛容な対応をと…

私は、そこで嘘を吐く。

『大丈夫だよ。』と…

実際はとても危険な状態だった。

何時、反乱が起こってもおかしくはない状態だった。

そこで私は、彼らにギアスを掛けその心を捻じ曲げ偽りの心を植え付けた。

「我らと共に行こう、狂王よ。

偽りのない、嘘のない、優しい世界へと作り変えるのだ。

我々は手に入れたのだ。アーカーシャの剣を…神を殺す武器を…  
貴公が此処にいるのは偶然ではない、必然なのだ。」

「必然… そうなのかもしれない。」

この世界の住人でない私が今ここにいるのは、  
貴様の言う『神を殺す』ことが私の運命なのかもしれない。

だが、私はそれを否定しよう。

根拠はない。ただ私は、それを全力で否定したいだけなのだ。

貴様は言ったな、『狂王であった私』と『現在の僕』が別人だと。

それは、やはり違う。

『過去の僕』も『今の僕』も変わらぬ同じ存在だ。

それは、何より、僕が一番知っている!!」

「そうか、狂王である記憶を全て取り戻した貴公でも、  
聞き入れてもくれぬか…」

やはり、この俗世に染まりすぎたのが原因か…

ならば、解き放とう貴公の心を、気高き魂を!!

シャルル・ジ・ブリタニアが刻む…

貴公の真実の記憶を…」

皇帝と僕の間的气氛が一転した。

この空気は、僕がギアスを使うときとまったく同様のモノ…

拙い…このままでは、ギアスを掛けられる。

口ぶりから察すると記憶を操作する類いのギアスなのだろう。

この力は危険だ。<sup>ギアス</sup>

記憶の改変とは、すなわち人物の変貌を意味する。

それこそ、僕は本当の意味での『駒』となる。

とにかく、皇帝のギアスの効果範囲から脱しなければ…

僕のギアスが『声』で発動するように…

ギアス嚮団でY - 0862と呼ばれた、

『契約遵守』のギアスをもつ少女が、触れることで発動するように、

ギアスは万能ではない。

必ず、ギアスの効果発動範囲があるはずだ。

この距離で、発動するのであれば、

僕と同じ『声』なのか、それに準ずる何かのはずだ！

まだ十分に時間はある。

十分に対処は可能なはず！！

だが、そうはならなかった。

僕の体は、動かなかった。

手を動かすことさえ、指を動かすことさえ…

いや、瞬きをすることさえ…

僕の記憶が…書き換え…

いや、再構築されて…行く…

ダメだ…僕のこの世界<sup>色</sup>がまた…失われてゆく…

このままではだめだ。

世界<sup>色</sup>をなくしては、それでは僕<sup>私</sup>ではなくなってしまふ。

どうにかして、打破することは…《気付け…ライ。私の存在を…》

そつだ。ジェレミアという男を使えば…

ダメだ…ギアスを掛けられた後では遅い。

今のこの状況を何とかしなければ！！《気付け…ライ。私に記憶の操作が意味をなさぬことを…》

待てよ…

ジェレミアという男はギアスを無効化、解除する力がある。

なら、Y・0862と呼ばれた彼女に掛けた僕のギアスを解除したとき、



僕自身に掛けられた僕のギアスも共に解除されているはずだ。

だが僕の記憶はここでは真に目覚めなかった。

ジェレミアという男の力は未完成なのか…

いや、それはないだろう…

ならば、なぜ？

…僕のギアスが無効化の力よりも強かった？

それほどの力を持つギアスの力が有って、なお僕は記憶を取り戻した。

何故？ 如何して？。

僕は記憶を取り戻したんだ？ 《私は、打ち勝つたのだギアスに…》

もう一度よく考えるんだ。 《私自身のギアスという逃げに…》

ギアスの力は万能ではない。

だから、ジェレミアという男もギアスキャンセラーを持ち得る。

僕の記憶も蘇った…ならば、僕自身にもギアスキャンセラーが…

いや、それはない。

現に、僕はV・V・との『契約遵守』のギアスに縛られている。

僕の記憶のみがギアスの檻から解放されている。

「解せぬ… なぜ貴公に、我がギアスが利かぬ…」

僕に絶えず掛っていた、ギアスの圧力が消えた。

どうやら、皇帝は僕にギアスを掛けるのを中断したようだ。

「いや、効果は出ている。だが、数刻もせずにギアスを打ち消している…」

これが、狂王としての貴公の力なのか…」

確かに僕の記憶は、皇帝によって、再構成されながら書き換えられていた。

だが、僕はすぐの本来の記憶を呼び戻している。

自身の現状も分からないが、皇帝についても疑問が増えた。

僕の内面精神を何故把握できる？

一つの個である僕らの精神心を知るすべはないはずだ。

いくらギアスだからと言って…

いや、一人いた…マオという男だ。

他人の心を読むギアスを持つ者。

だが、皇帝のギアスは記憶の操作のはずだ。

それで何故…

「ワシが何故貴公の心を読んだのがそんなに不思議か？」

今度は確実に僕の心を読んだ。

僕に加わるギアスの圧力もそれを物語っている。

表情で、心を読んだ。

不可能だ。

現在の僕は、なぜか瞬きもできない状態だ。

勿論、表情を変えることなんて出来ない。

「ワシが読んだのは、心ではない！ 記憶だ！」

記憶？！

そうか、僕が思考しているこのときでも、記憶は増え続けている。

思考の記憶軌跡を読んだということか。

「ご名答、ワシが読んだのは、貴公が思考をして導き出した疑問・  
確信…

貴様が思考し、ワシのデータとしての記憶《情報》だ。」

だが、なぜ？

「ワシのギアスは『記憶操作』ではない『記憶を書き換える』ギアスだ。

すなわち、記憶を覗き、その一部を変更するのだ。

よって……いや、もういい……」

皇帝は、自らのギアスを僕に打ち明け、その力の本質を説明する途中で、突然意欲をなくした。

「Knight Of Phantomライ・シルバ。

しばらく、本国で休養を取り、その後、

貴様は引き続き、エリア11で、植民地の制定の努めよ。

では、下れ！！」

皇帝がそう言った瞬間、体が自由になった。

だが、数秒もしないうちに誰かに背を触れられた。

次の瞬間には、僕の意識が暗転していくのが何故だかわかった。

僕の意識と視界が暗転して最後の瞬間僕は、渾身の力で振り向いた。

そこには、2人の少年が立っていた……ような気がした……

## 19話（後書き）

ちよつと質問…

ほかの作者さんは、どの程度を1話として投稿しているのですか？

私は、メモ帳で10KBを目安で書いています。

次話は、きつと『百万のキセキ』に入れるはず？

## 20話(前書き)

30分書き上げました。

結局、百万のキセキは書けませんでした。

書こうと思ったのですが…

あのゼロの群れを表現できる文才がないので逃げました。

「やっと、起きましたか…」

僕が目覚めたとき、僕の意識に入ってきた情報はこの声だった。

一体だれの声なのか。

目覚めたばかりの僕は、思考が停止していて誰かが判断することはできない。

眼を開けて声のした方向を見るとそこにはベアトリスさんがいた。

「何故、ベアトリスさんが此処に…」

そこには先日、僕が帰還報告をしたベアトリスさんがいた。

驚きもあり、僕は身を起こす。

「何故とは、失礼な…」

「ここは、私の部屋です。私が私の部屋にいるのは当然でしょう。」

そう言っつて、ベアトリスさんはため息をついた。

「ベアトリスさんの…部屋…何で僕はベアトリスさんの部屋に…」

「あなたが、皇帝との謁見中に倒れたからですよ。」

医者を呼んで、検査をしてもらいましたが、原因は不明。」

念のために、安静のとの指示がありました。  
ですが、この帝都ペンドラゴンには、兵士を安静にさえるための  
部屋は存在しません。

そのまま、処理室や医務室で寝かせることを考えましたが、  
陛下や殿下の方々の体調が変化することもあります。

だから、あなたは、私の部屋で寝ているのですよ。」

「だからって、何故ベアトリスさんの部屋に……」

「帝都ペンドラゴン内にある部屋は、私のこの部屋を除き、  
すべて皇室、皇族のための部屋です。あなたが、それを使えると  
？」

ベアトリスさんの声からは圧力があつた。

僕は、その圧力に若干押されながら「い……いえ……」と答えた。

「体調は大丈夫ですか？」

そこから一転して、ベアトリスさんからの圧力が消えた。

僕は、その空気の変化のあつけをとられ、「えっ?」と返答してし  
まった。

「エリア11でも、倒れたとの報告を調書での報告を見ました。  
最近では体調が優れないようですね。

十分に休養を取っていますか? 食事は? 睡眠は?」



僕は呆気にとられていた。

今までのベアトリスさんとまったく違う対応に。

僕を本当に心配しているような感じた。

まるで、大事な弟が体調を崩したような…

いや、僕を大切にしてくれる姉はいなかったから確かではない。

でも、以前に感じた事があるこの相手からの好意は…  
気持ち

僕が記憶喪失だったころ、アッシュフォード学園で僕の身柄を匿い、  
されには、僕に様々に尽くしてくれたミレイさんの感じに似ている。

「きちんと聞いていますか？ ライ…

やはりまだ体調が優れないのですか？」

僕が戸惑って、返答がないことでさらに心配をしたのか、

ベアトリスさんは、僕のベットに乗り上げ、僕の顔を覗き込んだ。

良質なベットのようで、彼女の体重がベットに掛り僕の体は少し揺れた。

「大丈夫ですよ。

そしてありがとうございます。」

僕を此処に寝かせてくれて、心配もさせてしまったようですね。」

彼女に、ギアス関係のことを話すわけにもいかず、自分の出来る最大限の笑顔で、何とか話を切り替える。

彼女は「べっ別に、そう言うことではありません。」と、急に身を引いた。

彼女が急にベットから下りたことで、ベットの反発力が僕をまた揺らす。

「わっ私が心配しているのは、ラウンズの一角であるシルバ卿が倒れれば、

その分の戦力がそがれることを心配しているのです。

決して、ライだから心配しているのではないのです。

そこを勘違いしないよう。」

彼女は、少しだけ慌てたが、すぐに何時もの調子に戻り、僕の心配ではなく、戦力の低下の心配だと言いつつ放った。

少し不自然だったのが、僕を表す呼称が『シルバ卿』と『ライ』の二つが使われていたぐらいだ。

彼女の性格は、非常に堅い。

皇帝の代わりにジノ・アーニヤ・ブラットリー卿・ノネットさんといった、

ラウンズの一癖も二癖もある人たちを統率しているだけのことはあり、非常に厳しい。

僕も、初めてあったときは、その厳しさに面を食らってしまった。

僕の現在使っている『ライ・シルバ』という名前の『シルバ』は偽名だ。

それと同時に僕が傀儡くわいであることを示す名だ。

流石に『シルバ』と呼ばれ続けるのはいい気持ちではなかった。

だから、僕はラウンズのみんなや身近にいる人には、『ライ』と呼んでくれるように頼んでいる。

勿論、彼女にも頼みこんだ。

だが彼女は、僕を頑として『シルバ卿』と呼ぶ。

でもそれは、公務中のときのみになった。

彼女がOFF非番のとき、彼女は僕のことを『ライ』と呼んでくれるようになった。

「たとえば、そうだとしても、ベアトリスさんが

僕の体調を心配してくれたのに変わりはないので、ありがとうございます。」

僕がそう言っていると、彼女は、一瞬だけ表情を変化させたかのように見せた。

「そ、そうですね。あなたがそう思うのであれば、それでいいですよ。」

とこころで、ライ。

あなたがお土産だと言って持ってきたこれはいったい何なのでしょう。」

そう言って、彼女はお皿に移された黒糖を僕に見せた。

「見た目からして、とても食べ物には見えませんが、すごく甘い香りを発しています。」

「そういう芳香剤なのですか？」

「いえ、これは『黒糖』と言って、歴とした食材です。」

「食材とてもそうは見えませんが…」

彼女は、そう言って、黒糖の塊を一つ掴んで眺めた。

「少し抵抗があるかもしれませんが、もう少し小さい塊を食べてみてください。」

彼女は、少し渋りながらも、極小の黒糖の固まりを掴み口の中に入れた。

「……甘い……、これは砂糖ですか？」

「ええ、そうです。この砂糖は、白い砂糖とは違い精製を行っていないそうです。」

「精製を行わずに、作るため自然本来の甘さを味わえます。」

「しかし、これだけの量は…」

「ライも知っているように、私は忙しく、あまり此処を離れない。」

料理もしない。これをどうしろと…」

「確か、ベアトリスさんはコーヒーを嗜みますよね？」

この黒糖を砕いて粉末状にして、白い砂糖の代わりに入れてみてください。

いつもとは違った味が楽しめますよ。僕も、エリア11で試してみたらおいしくて…」

一応、僕のお気に入りです。」

「そうですか…ならばいつしよに…」

とベアトリスさんが何かを言いかけたその時に部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「(ファランクス特務局総監。お休みのことと申し訳ございません。Knight Of Phantomライ・シルバ様への指令書をお持ちしました。)」

僕に対しての、指令書が発行されたようだ。

主席秘書であるベアトリスさんが現在非番OFFであるために、他の秘書が行ったのであろう。

その、指令書がこの部屋に持ち込もある時、彼女は、一時的に校務に入る。

「分かりました。入ってきてください。」

そう言われて入ってきた文官は指令書を挟んだバインダ をベアト

リスさんに差出し、すぐに部屋から退出した。

「シルバ卿、次の任務は護衛です。」そう言ってベアトリスさんは、指令所を一度目を通し僕に手渡した。

その指令書を見て僕は驚きを隠せなかった。

その指令書には、こう書かれていた。

神聖ブリタニア帝国第1皇子と中華連邦の天子との婚姻に伴う、  
祝賀会、婚姻式中のオデュッセウス殿下とシュナイゼル殿下の護衛  
任務：

20話（後書き）

ベアトリスさんのキャラがわかりません。

だって、小説読んでないもの…

アニメだけだもの…

でも何となくローマイアさんをイメージしてしまっている私がいま  
す。

21話：TURN09-1（前書き）

お久しぶりです。

ナナミです。

長い間待つてくれた皆さま本当にありがとうございました。

このたびは、私の分布地にて…まあ、わかってください…

とりあえず報告させてください。

私、生きてます。

．  
．  
．  
．  
．  
．  
．  
．  
．  
．

やっと落ち着いてきて、私自身に余裕が出てきました。

さあ、今回の21話目ですが…

記述の形式が7割方変化していますので、新規一転して読んでいた  
だけると幸いです。

今話のメインは、カレンさんです。

しかし、とりあえずいちばん最初は、カレンさんではないので勘違  
いなさるよつに…



トモ、ムシ...

ライが現在就いている任務は、

神聖ブリタニア帝国第一皇子オデュッセウス及び、

第二皇子シュナイゼル宰相

の護衛だ。

物事には、必ず原因が存在する。

故に、ライが遂行している護衛任務もそれ相応の原因がある。

その主としたが原因が、第一皇子オデュッセウスと中華連邦の天子との婚姻。

急遽浮上したブリタニア第一皇子と中華連邦の天子の婚姻…

やはり、その裏にはそれ相応の原因が存在する。

それは、エリア<sup>日本</sup>11での百万人のゼロが国外追放されたことだろう。

百万人という人間が国外追放されて行く先は、ブリタニアの支配されずにいて且つ、距離的に近い中華連邦のみである。

中華連邦という国は、EUとは違い表立った戦争をブリタニアとはしていない。

友好関係とはいかないまでも、外交を行っている程度だ。

しかし、そこに黒の騎士団が逃げ込んだとあれば、一気にその関係は一転する。敵性勢力

だが、それも表立って公表がされていければの話…

中華連邦と黒の騎士団の関係は完全に裏での取引であり、その真相は表には出ていない。

そこで、ブリタニアとの外交で黒の騎士団をの名を出した場合、大問題になりかねない。

それは、中華連邦側も、ブリタニア側も、況してや黒の騎士団側も分かっていた。

故に、外交ではなく別の方法で、黒の騎士団を公に曝す方法が必要であるブリタニアは

『ハイブ婚姻』の名のもとに中華連邦と手を結ぶ。

黒の騎士団も十分にこの危険性があることは検討しており、事を起こされる前に、天子を抑える手だてを遂行しようとしていた。

だが、黒の騎士団が中華連邦の大地を踏み、まだ数日しかたっていない状況で事を起こされてしまえば、討つ手立てはない。

黒の騎士団からしてみれば、全ての出端を挫かれてしまうような悪魔の様な一手を打つ相手…

神聖ブリタニア帝国第二皇子シュナイゼル宰相の護衛に任務についているライが彼のことが分からなかった。

狂王であった自分より遙かに知将であり、その気になれば、皇帝にも手が届く位置にしながら、野心も野望もないその人物に…

ライは、シュナイゼルに言い知れない何かを感じ取っていた。

他のものより遙かに秀でて、幼少の頃より、何不自由ない人間が、どのような「色」も持っていないことを…

行政特区日本に参加した私たちは『ゼロは国外追放』というブリタニアとゼロとの間で行われてた密約…

実は作戦の一部だったのけど…

この『ゼロは国外追放』という密約を逆手に、百万人の日本人を植民地と化してしまった日本の土地から解放した。

『ゼロ』というのは、記号…ブリタニアに敵対し、植民地とされている日本を取り戻すためにブリタニアと戦う決意をした者…

すなわち、日本人であった私たちはほとんどの人が『ゼロ』となりえるのだ。

だけど、実際、『ゼロ』を認識させているのはその容姿ところが大きい。

ならば、百万人すべてが『ゼロ』の格好をしていれば…

実際のところかなり、きわどい作戦ではあったと思う。

もしこの作戦がブリタニアにとって造反であると取られた場合…

考えたくもないけど、あの場でほとんどの日本人が殺されてしまったと思う。

だけど、作戦は一先ず成功した。

百万人の日本人が誰一人欠けることなく

今は、中華連邦の潮力発電用の人工島を借りて生活していく事になるだろう…

そのために現在は、引っ越し中…

日本からこの中華連邦まで来るのに使っていた海氷船…

この海氷船はいわば期限付きの借り物だ。

目的地に着いた現在では中華連邦に返還しなければならない。

しかし、移動中にこの船に残った私たち黒の騎士団の全てのデータを消去しなくちゃならない。

私とルルーシュは今そのデータの処理をしている。

「とりあえず、システムを全て初期化してしまえばいいんでしょ？」

私の問いに対してルルーシュが「ああ、そうだ…」と言いかけたところ

突然の声がかかる…この声は…ディートハルトだ…

「ゼロ様、今お時間はよろしいですか？ 報告しておきたいことが…」

ルルーシュは、「構わない、報告してくれ」と答えた。

「黒の騎士団への、新たな入団希望者のリストアップ及び、一般市民のリストの作成が完了しました。

それと…幹部候補の人材ピックアップも終わりました。  
当面は斑鳩の方に？」

現在の私たちは窮地とまではいかないが苦境の中にいる。

KMFもある。藤堂さんや四聖剣の皆…エースパイロットもそろっている。

だけど圧倒的に戦力が不足している。

だから、一緒に逃げてきた百万人の中から義勇兵を入れるしかない。分かってはいるけど…

「そうだな。あとは内政担当者だが…」

「承知しております。

情報管理のセクションと合わせ、構築しましょう。では…」

デイトハルトは、ゼロが考えているであろうことを先の予測していたようだ。

ゼロがまだ指示を出していないことまで進言して部屋から退出した。

「デイトハルトは信用できるの？沙代子さんの時みたいに独断で…」

私は、今まで行っていた作業を中断して、ゼロであるルルーシュに問いかける。

するとルルーシュは「逆に読みやすくなった。」と言って、コンソールを操作して、

この部屋の窓を外からは見えないようして、マスクを外した。

私は、ルルーシュの「逆に読みやすくなった。」の意味をあまり理解できずに「え?!」という声を出していた。

「あの男は、ゼロという記号を神にしようとしている。

行動はそこから推測できるだろう。

それに情報操作に関しては得難い逸材だからな」

神…って…そんな大袈裟じゃ…

「まあ、確かに神は大袈裟かもしれないが、それに似たモノへ押し上げようとしていることは確かだ。」

どうやら、私が考えていることは、ルルーシュにとって簡単に見破られてしまったようだ。

「それよりもこの船に残っているデータの処理だ…」

「どうやら初期化するだけでは、駄目のようだ…」

「バックアップ用のメモリが付いているみたいだな。」

「そう言っただけでルルーシュはバックアップ用のメモリを探し始めた。」

私も、システム初期化の処理に戻って操作を終えた後に、メモリ探しに移った。

「ただ、いくら探してもコンソールの下にはそれらしきものはない。」

「確か、上の所にも何かあったはず…」

「そう思って上を見たがその位置がかなり高かった。」

「コンソールの上に登って見たがそれでも高い…」

「仕方がないので部屋に置いてあったボックスをコンソールの上においてその上に乗ることにした。」

「それで、これからの計画は立ててあるの？」

「未だに、これからの具体案についてルルーシュから聞いていない。今この場には、私とルルーシュしかない。」

「あの時のことも気になるし…」

「丁度いいかな。」



「これからどうするつもりなの？」

「どう、とは？」

ルルーシュは私を見ずに受け答えた。

どうやら作業をしながら答えてくれるみたいね。

私も作業しながら聴くことにした。

「これからのプランよ。」

「まだ、具体的なストーリーは考えていない。

だが、目標は変わらない。ブリタニアを倒す。

そのためには、活動する基盤が必要だ。

まずはこの中華連邦を取り込む……」

もう大丈夫みたいね、あの時はどうなるかと思ったけど……

「じゃあ、本気で中華連邦の首都を落とすつもり？」

「侵略者にならない方法でね……」

洛陽さえ落とせば、ブリタニアを倒す条件はほぼクリアされる。」

もう、ルルーシュの中では、ブリタニアを倒す流れが出来上がっているみたい。

ナナリーがかつてのユーフェミアと同じ政策をとったときに相当落ち込んでいたのが嘘みたい。

「どうした？」

「うえ?! わあっ!」

自分の思考の中に入っていた時の不意のルルーシュの声でびっくりした。

一瞬だけけど、体がこわばって、バランスを崩してしまった。

なんとか体制を立て直そうと踏ん張ってみるけど。

足場に使っていたボックスが傾いて完全に私は倒れてしまった。

私は、下で作業をしたルルーシュの上に覆いかぶさるようにしてコンソールから落ちてしまった。

ふと気がついた瞬間、目の前にルルーシュの顔があってびっくりした。

ちよつと気恥ずかしかつたのがあったのかもしれない。

どうして、あのかなり落ち込んだ状態からルルーシュが復帰できたのか。

どうしてルルーシュは戻ってきてくれたのか…

いろんなルルーシュのことが気になった。

「教えてルルーシュ どうして戻ってきてくれたの？」

「カレン全てが終わったら一緒にアッシュフォード学園に戻らないか？」

「えっ?!」

ルルーシュの言葉は、私の問いに直接答えるものではなかった。

だけどそれは、私にとって心を震わせるに足りえた言葉だった。

アッシュフォード学園…

あそこでの生活はレジスタンスとしての隠れ蓑として通っていた。

だけど…すごく楽しかった…

「俺は…」

「タバスコ…」

「ん?! あっ…」

「お前?! いつから?!」

ルルーシュが何かを言いかけた時、不意に第三者からの声が聞こえた。

C・C だった。

椅子に腰を掛け、人形のチーズ君を抱いて、片手にはピザを１ピースを持っていた。

「それよりタバスコだ、ここにはラー油しかない。どうしよう?」

「それは…」

「どうしましょう…」

突然のことで私もルルーシュもC・Cへの返答が追いつかない。

と、そこへブザー音に近いコールサインが鳴り響き、放送が入る。

この声は確か、神楽耶様の声だ。

「ゼロ様、斑鳩に来て下さい。大変なことが…」

「何か、重要案件が出たようだ。斑鳩に向かう。」

カレン、悪いが俺の上から退いてもれえるか…」

「えっ?! あっうん。」

ルルーシュは、私から退くと置いてあったマスクをすぐに被り、斑鳩へ向かった。

私もすぐに、立ち上がり、部屋を出ようとした時、C・Cに呼び止められた。

「何、C・C・?」

「お前、また忘れてるぞ…ライのことを…」

「ライって…」

ライって誰のことよ?と言いそうになり、自分でもはっとする。

また忘れていたのだ。

ライという人物のことを…

思い出したはずだった。

私がライと会った最初の時からの記憶を…ギアス だけどまた忘れていた。

あの時の記憶だけじゃない。

2度目の初対面の時の記憶も全て忘れていた。

私はライという存在を全て忘れてしまっていた。

「もう一度言っておく。貴様にかかった力は解除ギアスされていない。気をつけるよ…油断しているとまたライのことを忘れるぞ。」

私は、C・C・の言葉に咬みついた。

「C・C・教えて、

私は、確かにライのことを忘れていた。

しかも、以前の記憶だけでなく、つい最近のライの記憶まで…

私はライのことを忘れてしまうのがギアスの力なら…!!  
なぜ私は、以前の記憶だけでなく、最近の記憶まで忘れてしまうの…!!

ライのギアスは…!!」

別にC・Cの言葉に腹が立ったわけではない。

絶対に忘れないと自分自身で誓ったはずなのに忘れてしまった自分だ。

ライのギアスが私に作用しているならそれはどんなギアスなのか…

とても気になった。

「声を張り上げるな。喧しい…」

ライのギアスはルルーシュと同じ『絶対遵守』だ。

ライがお前に『忘れる』と言ったのであれば、最近の記憶はなくなるらない。」

「じゃあ、何で!?!」

「言ってしまうえば、貴様に掛っている力は、ギアスではなく、ギアスを媒介にした『願い』だな。」

ライは、おそらく『自分と関わった人が自分を忘れるように…』  
とでも願ったんだろう。」

理解が追いつかない。

「それが、私がライのことを全て忘れてしまつこととどんな関係が…」

C・C はあからさまにいやな顔をして、「黙って聞け」と説明を続ける。

C・C が言うには、私が、ライを『過去に会っていたライ』だと認識したことで、

ライの『自分と関わった人が自分を忘れるように…』の願いによって忘れてしまつたことだ。

つまり…

ライが忘れて欲しいと願ったのは、

『私たちが初めて出会った時から、また居なくなるまでのライ』

それ以後に会ったライに関しては、初めてあつた別人として働いていた『願い』の力が、

私が、2度目に初めて会ったライを、忘れてしまったライと認識してしまった。

だから、私の最近の記憶まで忘れてしまった…

ギアスを媒体にした『願い』つてのがよく分からないけど…

神根島には、それを可能にする遺跡があるみたい。

その後、いくらC・C・に聞いても、「詳しいことは、私も知らないんだ、」の一点張り。

せめて、『願い』に逆らって忘れないようにするための方法を聞いても、私でも思い浮かぶ方法しかない。

他には何かないのかと聞くけど「斑鳩に行かなくて良いのか」とあしらわれた。

そこで、私も斑鳩に向かうことにした。

ライのことを絶対に忘れないと、新ためて心に誓って…



21話・TURN09-1（後書き）

お目汚しですが、楽しんでいただけましたか？

誤字、脱字、などの報告よろしくお願いします。

もちろん感想・評価・レビューも大歓迎です。

本心では、誰かにレビューをものすごく書いてもらいたいです。

22話・TURN09-2（前書き）

ゴールデンウィークいかがお過ごしでしたか？

ナナミです。

楽しく過ごせていただいたのであれば幸いです。

明日（投稿時間的には今日なのですが…）からいつもの日常に戻るわけですが、やり残したことないですか？

私はたくさんありすぎて…大変です…

まあ、そのひとつである。

次話の投稿をさせていただきます。

今話もカレンさんがメインです。

では、どうぞ…

斑鳩のコントロールルーム…

此処には、今、黒の騎士団のほとんどの人間が集まっている。

ゼロ、扇さん、藤堂さん、朝比奈さん、千葉さん、南さん、杉山さん、

ラクシャータさん、神楽耶さま、C・C、デートハルト、

そして、オペレータとして、新しく加入した、双葉さん、日向さん、水無瀬さん…

えっと、あとは…ああ、そうだ玉城もいたんだ。

何故、黒の騎士団の早々たる面々が戦闘中でもないのに集まっているのか…

それは、黒の騎士団の存続を脅かす事象が存在するからだ。

中華連邦の象徴たる天子がブリタニアの皇子と婚姻を結ぶというのだ。

それが、意味するのは、明らかに明白。

今現在、中華連邦からこの蓬莱島を借り受けている黒の騎士団だけど、

この蓬莱島の持ち主がブリタニアにつくという事は…

玉城は分かっているように、「ブリタニアとは関係ない。」なんて言ってるけど違う。

私たち黒の騎士団と百万人はゼロとして『国外追放』をされたが、それで、すべての罪を許されたわけではない。

ブリタニアにしたら、見つけ次第攻撃を開始するものであることは変わりない。

ああ、玉城…いくらなんでもバカ丸出しよ…「黒の騎士団は結納品」だなんて…

神楽耶さまも「うまいこと言いますね」だなんて乗っからないで、

C・C…「使えない才能に満ち満ちているな」は流石に玉城でも傷つくわよ。

「冗談言ってる場合か！！大ピンチ何だぞこれは！！」

バカ…本当に分かっていたのね…

今その話をしているのに…

ほら…みんな呆れてる…

「玉城少し静かにしてろ、

神楽耶さま、式の日取りは？」

ゼロは、玉城を諫め、話を先に進めた。

「明後日です。今夜は、祝賀会と称して前夜祭を行うようです。勿論、そちらにも招待されています。」

神楽耶さまは、すぐにゼロに対し答えを返した。

その後ろで玉置が、何だか騒いでるみたいだけど…

「ならば、その祝賀会に参加しましょう。」

おそらく、今回のことを陰で進めた者も参加しているでしょう。

戦う相手がわかれば、対策も立てやすい。

多少危険が伴うが偵察の意味でも此処は、祝賀会に参加した方が得策だ。」

前夜祭に参加することはかなりのリスクを負うことになる。

例えるなら、お腹を空かせた肉食動物の群れに手足を縛られ放り込まれるようなものだ。

「新しい、作戦はもうお考えで？」

デイトハルトの問いに、ゼロは淡々と答える。

「ああ、ブリタニアに婚姻を破棄させる。」

「どのような？」

「恐らく、大宦官とブリタニアの間には、何らか知らの密約があるのだろう。」

ブリタニアもバカではない、大宦官の無能さを見せてやれば…」

「なるほど…では、では、私たち情報管理部の方で…」

ゼロの言葉は、すべてのことを言っているわけではない。

ただ、デートハルトは、ゼロがどのような作戦を考えているのかを察したようだ。

「ああ、そちらは、任せる。」

詳細な作戦は、今夜の前夜祭の後に伝える。

私は、これより作戦の準備を始める。後のことは頼む。」

ゼロが…ルルーシュがデートハルトのことを優秀だと言っていたことを思い出す。

ほとんど何も説明していないにも拘らず、デートハルトは、ゼロの思考を呼んでいる…

確かに有能だ…今現在、後ろで騒いでる玉城より遙かに…

いや、比較するのは、玉城がかわいそ…いや、ブリタニア人でもデートハルトに失礼だ…

「ゼロ待ってくれ、我々にも作戦の概要を…」

ゼロが立ちあがって、コントロールルームから出ようとした時に、扇さんが声を掛ける。

「今は、説明している時間が惜しい。」

後で、斑鳩のデータベースに作戦をアップしておく、各自眼を通してくれ。」

しかし、ゼロは、時間がないといいつてまた部屋から出ようとする。

「待って下さい。ゼロ様!!」

今度は、神楽耶様に呼び止められる。

「…、何です？ 神楽耶様…」

若干だが、声にうんざり感が…

「前夜祭には、ゼロ様が私のパートナーということでもいいのですか？」

招待状が送られているには、神楽耶様なので、ゼロ自身が招待されているわけではない。

なので、前夜祭に参加することは普通では出来ない。

参加するためには、招かれるか、招かれた者の連れ人…まあ、パートナーになるしかない。

「そういうことになります。」

「まあ、それでは、やっとゼロ様の妻らしい事ができますわ。」

神楽耶様は、ゼロの答えは聞いてはしゃいでいた。

以前から、ゼロの妻だと自身で口にしていたが、実際にゼロ自身から、「妻だ」とは言われていない。

今回の前夜祭において、パードナーとなる者…

ブリタニアのパーティーには多く慣わしとして、ともに参加する異性は、恋人または、伴侶の場合であることが多い。

神楽耶様は、それで嬉しくはしゃいでいるんだろう…

「そうだな…護衛も念のために必要だろ…カレン、君も一緒に参加してくれ。」

「えっ?! 私ですか?!」

ゼロの不意の指名に驚いてしまって、勢いあまって「私ですか?!」と声を出してしまった。

「ああ、ではよろしく頼む…」

ゼロ…ルルーシュは、私の返事を聞かずにコントロールルームから出て行った。

その他のみんなも、いろいろ話し合っていたが、それぞれの仕事に戻るためにバラバラに部屋から出て行った。

此処に残ったのは、私とC・C…だった…



その残ったC・Cも椅子から立ち上がり、部屋の出入り口に向かって歩いている。

出入り口の前まで来たところで、C・Cは立ち止まってこちらに振り向き…

「忘れるなよ、カレン…」

それだけ言って、部屋から出て行った。

私はC・Cへの返答として「ええ、絶対にね…」と誰もいない部屋に対し声を出した。

私も斑鳩のコントロールルームから退出し、蓬萊島に設置されているネットワーク室へ向かった。

理由は簡単、ライの写真の入手だ。

C・Cに言われるまでもない。

私が、ライのことを忘れずにいるために私が考えたのは、傍らにライの物：ライの写真を置く事だ。

人の記憶は厳密に言えば『忘れる』ことはないらしい。

だけど現実には、人は簡単に『忘れ』てしまう。

これは、脳内でのシナプスに対し、電気信号が伝達しないことで記憶が読みだせなくなってしまうている。

このシナプスは、長い間、使用されていないと、なくなってしまう。頻繁に使われているシナプスの周りには、新たなシナプスが形成されていく。

つまり、頻繁に記憶を読みだしていれば、記憶を忘れることはない。そう考えた。

だから、ライの写真を身につけることにした。

なんだか、昔ドラマでやってたドラマの恋する女の子みただけど…

ああ、もお…私はライが好き!!

今までは、常にライと一緒にだった。

何時もライが傍らにいた…

それがどんなに嬉しくて、楽しくて、心地よくて…

それがどんなに、幸福なことなのか分かっていなかった。

失って、初めて分かった…

だけど、そんな事も…ライのことも全部忘れてしまった…

今は、しっかりと覚えている。

でも、私は今での、ライを忘れかけている…

もう、いやだ…

ライと一緒にいなくても…

ライのことを忘れてしまふよりはましだ…

ギアスとは異なる力が私の記憶を閉じ込める…

だけど、そんなことはさせない。

写真さえあれば、私は、絶対にライのことを忘れることはない…

だけど、私の周りには、写真は愚か…ライに関する者は一切残っていない。

だったら、どうしたらいいのか…

ライは今、ブリタニアのラウンズだ…

恐らく、写真はたくさんある…

何時も傍らに持つ写真がネットで見つけた写真なのは癪に障るけど…

仕方ない…

世界に広まっているネットワークを検索して、ライの写真を探す…

だけど、ライが写っている写真はすべてサングラスを掛けていた…  
写真に対し書きこまれているコメントを読んでもみると。

ライは、任務中必ず、サングラスをかけているみたい…

その素顔を見ることの出来る人間は、彼が認めた者だけ…

皇族であろうとも、その素顔を見たものは片手もない…

生まれは不明…孤児や皇族の隠し子、作戦のために自身の記録を全て消去したなど…

出鱈目な情報が出回っている。

ばかばかしいと思いつつ、ウィンドウを閉じようとした時に1つのリンクを発見した。

共に書きこまれているコメントを見ると、

「Knight Of Phantomライ・シルバ卿の幻の素顔が見える。」と書かれていた…

私は、思わず、「やった！」と声を上げ、そのリンクにアクセスする。

アクセスして出てきたモノは、「Knight Of Sixアーニャ・アールストレイムのブログ」だった。

いや、中の内容は、ブログというよりも、日記に近かった。

写真が非常に多く、その日にどんなことがあったのかなどがこと細かく書かれている。

ライの写真は、掲載されていないようだが、『ライの素顔が見れる』と書いてあったコメントを信じてログをさかのぼっていく。

15分ほどログを遡ったところで、やっと「Knight Of Phantom」と書かれたリンクを見つけた。

私はそのリンクにアクセスするがなぜかパスワード入力画面が現れる。

パスワード入力欄の上には、こう書かれていた。

『ライが乗るKMFの開発コードネームは？』

分かるわけがない…

今現在の名前なら分かるが、まだ表に出る前の名前なんて…

とりあえず『月下』と入力してみるがアクセスが拒否される。

もう一度アクセスしてみるとやはりパスワードの入力が必要のようだ。

だが今度のパスワード欄の上には、別の言葉が書かれていた。

『ライのKMFの撃墜数は？』

やっぱり分かるわけがないが、どうやらパスワードはいくつか種類

があるようだ。

ならば、私が知っていることがあるかもしれない…

そう思って、アクセスを何度も何度も繰り返す…

.  
. . .  
. . . .  
. . . . .  
. . . . . .  
. . . . . . .  
. . . . . . . .

40分位たっただろうか…

今までの中で分かるパスワードはなかった。

とりあえず全てがライに関することだったのに一つも答えられない  
自分が悔しい。

これが最後、と思いながらリンクにアクセスする。

『ライの瞳の色は？』

思わず私は「あっ」と声を出す。

知っている…

ライの瞳の色…それは…

『BLUE』

そう、パスワードに打ち込んだ…

結果は…

新しいウィンドウが開いた。

そのウィンドウの中には、さまざまに、ライの写真が掲載されていた。

私の顔は、自然に笑みを浮かべた。

ライが寝ている顔。

ライの真剣な顔。

ライが苦笑いしている顔。

ライの笑顔…

あれ…

なんだか、目の前がかすんで…

眼が…

私、泣いてる？

私は、泣いていた。

写真に写っているライの笑顔が私に向けられていないことが哀しくて…

ライと一緒に喜ぶことができなくて…

ライと一緒にその感情を共有することができなくて…

やっぱり辛いよ…ライ…

何で一緒にいられないの…

何でああなたは今、ブリタニアにいるの？

ギアスのせいなの？

あなたはギアスに操られてるの？

私じゃ分からないよ…

これ以上見てられない…

そう思っつて、ウィンドウを閉じようとした時に思い出した。

私は今まで何のためにライの写真を探していたのか…

それは、私がライのことを忘れないように、ライの写真を身につけてために探していたんだ…

でも、掲載されている写真を見るのはとてもつらい…



でも、そんなときに1枚の写真を見つけた…

ライがナナリーと一緒に折り紙を折っている写真だ。

ライもナナリーもいい笑顔だ。

この写真にしよう…

きっとルルーシュもこの写真は気に入るはずだ…

でもルルーシュのことだから、

『ライのいる位置は本来は俺の場所だ』なんていうのかな…

私は、写真を2枚プリントアウトして、ネットワーク室を出た。

22話：TURN09 - 2（後書き）

かなり、難しかったです…

スピード重視で、先に進めてしまおうかと思ったのですが…

今回はこのような内容になりました…

実際は、どのようなスピードで進んだ方がよいのでしょうか？

少しアンケートを取りたいのですが…

いいですか？

まあ、ダメと言われても聞いてしまうのですが…

スピード重視で進めた方がいいですか？

それとも、これまでの流れのように、原作で描かれていないシーンを取り入れて、少し、物語の進行スピードを緩和した方がよいのか…

どちらがよいのでしょうか？

私のこの小説をお気に入り登録してくれてる138人の皆さん…（  
H23/5/8付け）

アンケートの返答よろしく願います。

あ、あとそれから、いつもどおり、誤字・脱字のご報告よろしくお

願います。

もちろん感想・評価・レビューも大歓迎ですのでよろしく願います。

P・S・

次話の更新が遅くなるかもしれませんので了承ください。

23話：TURN09-3（前書き）

祝お気に入り登録150ユーザ！！

ごめんなさい

嘘です。

まだ数人足りません。

執筆中の2日前150人を超えたら投稿しようかと思いましたが…

私の小説を読んでくださり、お気に入り登録をしていただける方は、心が膨張を続ける宇宙級に寛大な方なので、滅多に増えないと気づきました。

というわけで23話目です。

どうぞ、

『決意』というものは、少なからず人に影響を与える。

その『決意』を糧に前に進む者

その『決意』に呑み込まれる者

その『決意』を愚直に守る者

その『決意』に押し潰される者

その『決意』半ばでリタイヤする者

その『決意』によって人間が変わってしまう者

その『決意』で偉業を成し遂げる者

その『決意』で大きな過ちを犯す者

在りとあらゆる影響が人には与えられる…

たとえそれが、『決意』を抱いた人物がだれであれ…

たとえそれが、『決意』を抱いた自身でなくとも、

近しい人間が『決意』を抱いたのであれば……………

ライは『決意』をしていた。

『母と妹を守る』と…

そして行動を起こした。

ギアスという名の力を借りて…

初めの内はうまくいっていた…

母と妹を苦しめるモノ。

自身の父、兄、姉、彼らを支援する貴族…

それらを全て、敵に回し、それらを打倒し…

遂に、自身が王になった。

しかし、王となってからも、母と妹への悪意は終わらなかった。

寧ろ、自身が王になってからその悪意はその強さを増した…

だが…

自身は王の責務を果たす責任があるため、母と妹を守れない…

それでも、2人を守るため自身ができることを尽くした。

守ることが精一杯だった。

母の気持ちも…

妹の気持ちも…

母の心も…

妹の心も…

母の表情も…

妹の表情も…

そのすべてを見ていなかった…

その結果…

彼は、守るべだった母と妹を自らのギアス<sup>意思</sup>で失った。

それが、彼の『覚悟』がもたらした結果だった。

一度目覚めた彼の『覚悟』は、奇しくもV・Vによって処断される。

二度目の目覚めた彼の『覚悟』は、どんな結果をもたらすのか…

その結果は…彼の望むものとなるのか…

人々に幸福をもたらすのか…

人々に不幸をもたらすのか…

それはまだ分からない…

唯一つ言えることは…

その結果は、彼が…彼らが…

自ら望んで『覚悟』し、

望んで、『行動』を起こした『結果』である。

その『結果』を、彼らは、否定できない。

拒否もできない。

責任から逃れることができない。

何も難しい事なのではない。

宿題を忘れて学校の先生に怒られるのも…

夜中に遊びすぎ遅刻するのも…

レポートの提出が遅れ単位を落とすのも…

仕事で失敗して、上司に怒られるのも…

それらすべてが…

自身の『覚悟』と『行動』に伴っての結果である。

そう、それは日常だ…



日常の中で彼らは…

いや私たちは常に『覚悟』と『行動』を行っている。

それが日常過ぎて気付かないだけで…

彼らの、彼らは改めて実感しているはずだ、  
自らの『覚悟』と『行動』が、未来を変えるのだと…

それでも、時間ときは待ってくれない。

彼らは、進み続ける…

その『覚悟』と『行動』の末に何が待っているのかもしれない…

.

..

...

此処は、中華連邦中心部・朱禁城迎賓館。

現在ここには、中華連邦の大宦官この国の上流階級の者たち、  
ブリタニアの貴族が集まっている。

それは、翌日にブリタニアの第一皇子オデュッセウスと  
中華連邦の象徴である天子が婚姻を結ぶからだ。

婚姻を明日に控え、今夜はその前夜祭と称して宴を開いている。

ライは、本日の主賓であるオデュセウス第一皇子とシュナイゼル第二皇子の護衛任務に就いている。

ライ自身の足で眼で、この朱禁城の全て部屋と廊下、施設を確認し、護衛プランを立て、指揮系統以外を全て他の部下に任せて宴に参加している。

宴に参加する必要はライ自身にはないのだが、2人の皇子の意向により宴に参加している。

加えて言えば、現在朱禁城を警備、警戒している部下も本来ライの部下ではなくシュナイゼル皇子の部下である。

ライは、ラウンズであり、固有の部下を持つことを許可はされているが、ライ自身はその部下を持っていない。

他のラウンズ固有の部下を多数持っているとはあまり聞かない。

ラウンズという立場上、各地に遠征する必要上、多数の部下<sup>兵士</sup>を連れ歩くのは、即行性を損なわせるのだろう。

唯一聞くのはKnight Of Tennルキアーノ・ブラットリ  
ーの  
部下グラウサム・ヴァルキリエ隊くらいだ。

その部隊も常に彼と一緒にいるのではならしく、形式上彼の直接の部下ということになっているだけらしい。

グラウサム・ヴァルキリエ隊…

19歳から25歳の女性のみで構成された部隊…

若い女性のみのも部隊であるということとは

Kn i g h t    O f    T e n ルキアーノ・ブラットリーの趣味な  
か…

それとも別の意味が在るのかは不明である。

話を元に戻そう…

現在、この国…中華連邦には、三つの勢力が集まっている。

一つ目、中華連邦の軍

二つ目、ブリタニアの皇子を護衛するための警備軍

三つめ、黒の騎士団

この三つの勢力を数で決定するのであれば、

中華連邦がトップになり、ブリタニアが最下位になるだろう。

だがその通りにはならない。

ブリタニアは、この中華連邦に4人のラウンズを投入している。

Kn i g h t	O f	T h r e e		ジノ・ヴァインベルグ
Kn i g h t	O f	S i x		アーニヤ・アールストレイム
Kn i g h t	O f	S e v e n		スザク・枢木
Kn i g h t	O f	P h a n t o m		ライ・シルバ

ラウンズのいる戦場にブリタニアの敗北はない…

そう言ったのは誰だったか…

そんなことは誰でもいい。

それは真実なのだから…

さらに言えば、中華連邦とブリタニアはこれから手を結ぶ関係であり、敵対する関係ではない。

必然、勢力は結合される。

すなわち、この国にいる危険分子『黒の騎士団』は淘汰される…

いや…順番がおかしい…

発端は『婚姻』ではない。

『亡命』からだ…

ゼロの国外追放から始まり、百万人のゼロが中華連邦に亡命した。

それは、中華連邦に小さな国を創れることを意味する。

世界統一を目的とし戦争を繰り返すブリタニアがそれを是とはしない。

そこで、先に、中華連邦とブリタニアが手を結ぶ…

よって黒の騎士団はその計画を潰されたのも同然だ。

だが黒の騎士団も愚かではない。

それを阻止するべく、行動を起こす。

だが、それを見越していたかのような戦力を  
整えているブリタニアというの正しい順で正しい構図だ。

一度は落ち着いた戦況が、また新たに動き出し始める…

今夜の宴には、4人ものラウンズが出席をしている。

4人は、各々がそれぞれの行動をとり別行動を取っている。

ジノは、宴のために用意された料理の物珍しさに料理に手を付けて  
いる。

スザクは、エリア<sup>日本</sup>11の学校、アッシュフォード学園で、  
知り合ったミレイ・アッシュフォードと共に談話をしていた。

皇子2人の要請を受け宴に参加しているとはいえ、  
警護の任務中についているライは、迎賓館会場の出入口や、窓を警  
戒していた。

アーニヤは、常にライのとなりに寄り添いながら、  
迎賓館の中の様々なモノを写真に納めている。

彼ら4人の周りには、順を追ってブリタニア貴族が挨拶にやっ  
てくる。

一人一人に掛る時間は2分〜3分程度だが、この宴に参加している全ての者を相手にしてい内に数刻は過ぎてしまふ。

「おや、シルバ卿も参加されているんですね。」

「本日も、シルバ今日の素顔は見れないのですね、残念です。」

「休暇はどうぞ、私の領地へ…歓迎しますよ。」

「シルバ今日のご活躍は兼兼かねがね、聞き及んでいます。」

などの会話を繰り返す行方。

ライは、かなりうんざりしていた。

自身が王であったあの時と何ら変わらない。

下心が見え隠れしている…

ライはラウンズではあるが、貴族ではない。

いや、騎士候ではあるが、それは一代のみの権力であり、次の世代に受け継がれるものではない。

つまりは、長く続く地位ではないことを意味している。

それは、他のラウンズも同じだが違う点がある。

それは、家系だ。

ジノやアーニヤは自身の家系が既に貴族であり、将来の自身の地位が約束されている。

それに対し、ライとスザクはそれがない。

スザクはナンバーズであり、将来の地位がいまだに確定しているわけではない。

ライに関してもそれは、同様に言えるのだが、ライはブリタニア人であり、現在も進行して目覚ましい活躍をしている。

さらには、シュナイゼル第2皇子を始めとする皇族のほとんどが、その才覚を認め取り込もうとしている。

等という、噂が、存在しており、その噂を信じた貴族たちが、ライに近寄ってくる…

今夜の宴でもそんな貴族たちがライに歩み寄ってきている。

「シルバ卿は、意中のお相手は居られるのですか？

居られないであれば、どうです。私どもの娘などは…

私が言うのも何ですが器量良しですよ。」

等と、明らかなパイプを作りたい者もいる。

しかし、ライは形式上は断るわけにはいかずに、ライも

「ええ、休暇がもらえれば…」と答える。

ライに娘を薦めた貴族は上機嫌になって「それでは」と去って行った。

先ほどまで、となりでライの会話を聞いていたアーニヤは何が気に入らないのか…

ライのつま先を自身の踵で踏みつける。

ライは、踏みつけられた痛みで声を必死に押し殺しアーニヤを見る。

「……、な……に……アーニヤ……」

「……………」

アーニヤは答えない。

依然と携帯機を操作を続けている。

「皇コンテエルン代表 皇神楽耶様御到着！」

中華連邦の衛兵が大声でそう告げると、  
迎賓館の中にいる殆どの人物が視線をそちらに向ける。

その視線の先には、確かに皇神楽耶と呼ばれる少女がいた。

それだけであれば、誰も騒がないはずだが迎賓館に声が湧いた。



その声を聞いて、視線を向けていなかった者も視線を向ける。

そして、さらに声が大きくなる。

彼らの視線の先には、皇神楽耶のほかに黒い装束を着た2人がいた。

一人は、黒い上着を羽織り、短パンを履いた紅髪の女性。

もう一人は、黒いマントを羽織って黒いマスクを付けている…

そう、ゼロだ…

それまで、別の話題を話していた者の声が一瞬消える。

そして、またざわめきが戻ってくる。

そのざわめきの内容はすべて『ゼロ』のことに関するのみ。

そう、ゼロの存在はこの場を全ての視線、話題を統一したのだ。

数秒の後、ゼロ、神楽耶、カレンの3人は中華連邦の衛兵に包囲される。

八方をふさがれ、槍をつきつけられる。

しかし、そこへシュナイゼルが声を上げ、彼らに歩みを寄せる。

「やめませんか、争いは、本日は祝いの席でしょう…」

「ですがあ…」

衛兵の指揮を執っていた大宦官の一人が、意見を言う前にシュナイゼルは話を進める。

「皇さん。明日の婚姻の儀ではゼロのご同伴を、ご遠慮していただけますか。」

「それは…致したかありませんね。」

「ブリタニアの宰相閣下が仰るのなら…引けえ!!」

神楽耶は、シュナイゼルの指示に渋々同意する。

その言葉を聞いた大宦官は、衛兵を下げる。

ゼロとシュナイゼルが対面する。

そこへすかさず、スザクがその間に入る。

ジノ、アーニヤ、ライモシュナイゼル護衛のため周囲に駆け寄る。

スザクがシュナイゼルの前に立ったのを確認した神楽耶は、くるりと回転をしてゼロの前に立ち、スザクに話しかける。

「枢木さん、覚えておいでですか、従妹の私を。」

「当たり前だろ。」

神楽耶の問いにスザクは怪訝表情で答える。

「キョウト六家の生き残りは、私たちだけとなりましたね。」

「桐原さんたちはテロの支援者だった。死罪は仕方がなかった。」

神楽耶の言葉がスザクを責めているように感じたのか…

いや、実際に神楽耶はスザクを責めているのだろう。

その言葉にスザクをそれを正当化する様に言葉を返す。

「お忘れかしら、昔ゼロ様があなたを救ったことを。」

だが、神楽耶は聞く耳を持たずに続ける…

「その恩人も死罪になさるおつもり…」

スザクは神楽耶の言葉にたじろぐ。

「それとこれとは…」

「残念ですは…言の葉だけで人を殺せたらよろしいのに…」

神楽耶の表情は、笑顔であったが、その言葉には悪意と殺意、懇願も含まれていたようだ。

「あら…あなた…」

神楽耶は、スザクの後ろに立っているくすんだ銀髪のサングラスをかけた青年ライを見た。

そのことに気づきたライは「何か？」と小さく答えた。

「あなたは…いえ、あなた様は…以前どこかで…」

神楽耶は、不思議そうな顔をする。

以前にどこかで会ったことがある気がする。

だが、彼が誰だか分らない。

いや、分かっているのだ。

ブリタニアの円卓の騎士 Knight Of Phantom  
イ・シルバ。

だが、その知っているととは違う。

知識としてではない、経験、思い出として言っているのだ…

そう、自身の何かが告げているが…どうしても思い出せない…

「私とあなたは初対面だと思いますが…神楽耶様…」

とライは答える…

サングラス掛けているため表情は読めない。

「そう…ですか…でも…」

神楽耶の表情は暗くなる。

そこへ、ゼロが声を上げる。

「ジュナイゼル殿下。一つチェスでもいかがですか？」

「ほお」とジュナイゼルは若干の驚きを表す。

「私が勝つたら、枢木卿とシルバ卿を頂きたい。」

「へ？」「はあ？」「なっ！」

この場にいるほとんどの人は驚いている。

驚きを見せずにいるのは、言った本人とジュナイゼルくらいだ。

「神楽耶様に差し上げますよ。シルバ卿のこともそのうち分かるでしょう…」

「まあ、最高のプレゼントですわ！」

「楽しみのお待ちください。」

ゼロは、ジュナイゼルの返答を待たないで神楽耶を話を進める。

「では、私が勝つたらその仮面を外してもらおうとしようかな…  
いや、こちらは2人掛けるのだから…もう一ついいかな」

「ええ…」

「では、紅髪の彼女を頂こうか…」

「いいでしょっ…」

「ちよっ…」

「はっは…、楽しい余興になりそうだね。」

シュナイゼルも進められた話に止めたいというのは癪だと感じたのか、  
それとも本当に余興だと感じたのか、ゼロの条件をのんだ…

23話：TURN09 - 3 (後書き)

H23 . 5 . 29 付

PV242 / 460 アクセス

ユニーク19 / 618 人

これって多いんでしょうか？  
少ないんでしょうか？

私的にかなり多いように思うのですが…

計算してみたところ、お気に入り登録者が、  
毎日この小説を確認してくれる計算になるのですが…

あっ、そうでした。

前回のアンケート…

答えてくれたお方が1人おられたので、

そのように進めたいと思います。

それともうひとつ、

今回の話は、誰かの視点ではなく、『第三者視点』です。

強いて言うのであれば、『ナナミ視点』ですね。

最近、哲学を個人で勉強したので書きたくなってしまったんです…

なんと迷惑な…

前半から中盤までは、哲学しながら読んでいただければと思います。

それでは、また次回お会いしましょう。



24話・TURN09-4(前書き)

ごめんなさい。

今までずっと逃亡してました。

短いです。

ストーリーは進んでいません。

どうしてこうなったのか・・・

というわけで24話です。

どろぞろ・・・

現在、僕らは先ほどまで宴を開いていた部屋とは別の部屋にいる。

これはゼロが現れ、余興としてシュナイゼル殿下が  
チエスを行うことになったからだ。

「ライ…あの子は誰？」

部屋の準備や警備の準備も終わったところに、アーニヤは話しかけて  
来た。

「あの子って？」

「カゲヤって子…」

アーニヤは、モバイルから目は話さずに、話しているので顔は見えない。

「ああ、彼女は、日本の皇コンツェルンの代表をしてる子で、  
黒の騎士団のいわばスポンサーかな…」

性格は…天真爛漫って言えばいいのかな…  
とにかく元気な子だよ。

何か気になることでもあった？」

「あの子、ライのこと知ってるみたいだった…」

知っている・・・そうかも知れない。

彼女は、僕のことを識っている。

だがそれは、忘れていたはずだ。

「そう…かな…」

妙なことで鋭い感覚を発揮しないでよアーニャ・・・

ここは下手に隠すとボロが出そうだ・・・

「何か、隠してる？」

ここは開き直って、隠している事を公にしてみよう・・・

「うん、いろんなこと隠してるよ。」

「全部話して…」

アーニャは、モバイルから目をこちらに向けさらに、見開いて訴える。

「ちょっと無理かな…」

「何で？ 私たちはパートナーでしょ？」

自身が僕のパートナーであることを理由に、身を乗り出し食い下が

「ん〜…いくらパートナーでも内緒にしておきたいことはあるでしょ？」

僕は、それでも、話すことはできないため、彼女の・・・人の弱みを突く。

「私は、な…」

恐らくアーニヤは、『私は、無い。』と言いかけたのだろう。

いきなり、モバイル端末を操作して口をつぐんだ。

「アーニヤ？」

僕が、彼女の名を呼ぶと彼女は、

「確かにある…、でもいつか話して。約束…」

アーニヤは、少し悔しそうに・・・もどかしそうに言葉をつむいだ。

「うん、その時が来たらね。もちろんその時はアーニヤもね…」

アーニヤは声に出さず小さくうなずいた。

どうやら納得してくれたようだ。

アーニヤとそんな話をしている間に、すべての準備が終わり、いよいよ、シュナイゼル殿下とゼロのチェスが始まるうとしている。

「殿下、ルールの方は？」

シュナイゼルの腹心であるカノンが問う。

「そうだね、楽しい余興にしたいし、公式戦でもないから…  
うん、時間の制限はなしにしよう。」

厳粛な雰囲気にするものつまらない。

ゲームに関わらないことはフリーでいいかな。

一手に掛ける時間も任意の時間で…  
いいかな？、ゼロ」

チェスというのは、ゲームでありながら、高度な戦略が必要な一種の戦闘だ。

戦闘とは、一瞬駆け引きがその勝敗を大きく分ける。

チェスもその意を持っているのか、それとも単に時間をかけすぎることの予防なのか、

公式戦などでは、一手に掛けられる時間または、一試合に掛けられる時間が定められている。

シュナイゼルはその制限時間をなしにしようと提案した。

さらに、「ゲームに関わらないことはフリーで」ことまで付加して

・  
・

チェスは何度も言うが一種の戦闘である。

相手の心理を読み、どのような戦略でくるのかを読みきり、避け、騙し、攻め、屈服させるのだ。

通常の戦闘と異なる点といえば、1対1であること。

ギャラリーがいること。

頭脳戦であることがあげられる。

通常のチェス公式戦では、ほとんどの場合が、私語、会話が禁止されている。

もちろんこれは、競技者、ギャラリー、審判などのすべての人間に当てはまる。

これは、人の集中力が如何に脆弱であることを示している一例である。

人の集中力は、簡単に揺るいでしまう。

それが例え小さな余韻だとしても。

たとえば、自身がすごく集中しているとき、なぜか、自身の噂話や自身の名前が呼ばれるなどといったことが耳に入るのだらう。

これは、人が長時間ひとつのことに対し集中できないからである。

この原因としては、諸説あるが、この場では割愛しよう。

シュナイゼルは自信があるのだ。

自分のチェスの腕前に……

でなければ、このような負……けられない試合にこのような提案は出さない。

そう、負けられないのだ、シュナイゼルもゼロも……

シュナイゼルはラウンスの2人を……

ゼロは自身の仮面とカレンを掛けているのだから……

「いいでしょう……、ですが……一手にあまり時間をかけるのもよくない。

アビーターを付けてもよろしいかな……」

ゼロは、シュナイゼルの出した条件をすぐに飲み、さらに条件を出す。

アビーター……いわゆる審判である。

アビーターは、時間の掛かり過ぎている一手や、一手の指し間違え、ルール違反を警告するなどといった役割がある。

ほかには、引き分けの提案、私語の注意などの役割をもつ。

ゼロは、一手に対し時間を掛けないようにアビーターをつけようと進言。

おそらく、言葉での心理戦の意味合いもあるだろう。

シュナイゼルの「ゲームに関わらないことはフリーで」のことに對する一種の対策とも取れる。

「それでは、両陣営で一名づつ……こちらは、シルバ卿にやってもらおうか。」

シュナイゼルは、ゼロの提案に對し、躊躇することなく応じ、ライを呼びその旨を伝える。

それに、ライは「イエスユアハynes」と答える。

「では、こちらは、カレンよろしく頼む。」

ゼロも自身とともにこの宴に参加していたカレンにアビーターを任ずる。

「はっハイ、了解しました。」

カレンは、若干戸惑いながらも返事をする。

ライとカレンはチェス盤に歩み寄る。

ライは、シュナイゼルの右側に……

カレンは、ゼロの左側に……

お互いに向き合うように、かつて黒の騎士団で双壁をなした二人が・



・

今では、敵同士として向かい合う。

カレンは、じっとライを見る。

ライも、その視線対し、カレンを見る。

カレンの表情は、ライに実際に会えた喜びと、敵同士だという悲しみを押し殺した表情だ。

対する、ライはサングラスを掛け、顔の半分を覆っている。

そこから除く顔には、一切の表情が読み取れない。

カレンはその表情を見て、「初めて会ったライ」を思い出す。

その表情から、カレンはライがギアスに掛かっていることを確信した。

ギアスに掛かり、記憶を書き換えられているのだと・・・

しかし、実際は記憶の改竄ではなく、「契約」による行動の制限である。

ライは、V・Vとの「契約」により、ある一部の行動が制限される。

それは、彼らの計画に協力し、彼らの計画が頓挫させないこと・・・

ライとカレンの関係がばれることは、彼らの計画に何らかの支障が出る。

と、ライが認識してしまったため、カレンと再び会えた。喜びの表情も制限が掛かったのだ。

そうとは知らず、カレンは決意する。

ライは、必ず助け出すと・・・

彼女の決意は、今後どのような結果を呼び起こすのか・・・

それは誰にもわからない。

もちろん、当の本人にも・・・

24話：TURN09 - 4（後書き）

すみません。

また逃亡する予定です。

読んでいただいている皆様本当に申し訳ない。

というか、読んでいただいているんですかね？

とつかいないよね・・・

次話、いつになるかわかりません。

書けたら書きます。

25話・TURN09・5(前書き)

これを機に逃亡予定です。

ゼロとシュナイゼルの一戦開始から数手…

その数手で、彼らの実力を総て測るすべは存在しない。

そんな彼らのチェスの一戦を別室で見っていた一人の男が声を零す。

「せつかくの余興を何も別室にしなくても…」

男の名はオデュッセウス・ウ・ブリタニア。

彼の<sup>か</sup>ブリタニア帝国、皇位継承権第一位を持つ第一皇子である。

「相手はテロリスト何かあつてからでは…」

オデュッセウスの言葉に答えたのは、肥え太った男。

中華連邦の大宦官の一人、<sup>ジャオ・ハオウ</sup>趙皓である。

<sup>ジャオ・ハオウ</sup>趙皓は、別室を用意したのがあたかも自身であるかのように話す。

確かに、部屋自体を用意したのは、ホストである中華連邦であるが、別の部屋を用意するように指示を出したのは、ブリタニアのラウンズであるライである。

よほど、自身のことをブリタニアに売り込みたいのであろう。

しかし、神楽耶の声が、彼の声の印象をすべて消し去る。

「杞憂ですわ、勝のは私の夫ですもの。」

彼女は、ゼロの勝利宣言とともに、自身がゼロの妻であることを同時に主張した。

あまりにも、ジャオ・ハオウ趙皓の言葉の意図とは、食い違っている内容だ。

だが、オデュッセウス自身も、ジャオ・ハオウ趙皓の言葉をあまり気にしている様子はない。

「はっはは、気持ちは分かるが、私には弟のシュナイゼルが負けることなど想像できないよ。」

オデュッセウスは、神楽耶のゼロ夫宣言を気にすることもなく、シュナイゼルの勝利宣言を仕返した。

オデュッセウス自身は、凡庸な男だ。

自身の地位と自身の能力が著しく一致していないことは、オデュッセウス自身も、周囲の人間にもわかつている。

今回の婚姻も、彼自身が考えたことではなく、シュナイゼルが考え行動したことだ。

オデュッセウスは、断ることができたはずだが、彼は受け入れ、この場にいる。

これは、オデュッセウスが弟であるシュナイゼルを自身よりも遙か



そこには、シュナイゼルの護衛として来ていたラウンズの4名もちろん居た。

ライはアビーターとしてシュナイゼルの左側に立っていたが、

スザク、ジノ、アーニヤの3名は、ほかのギャラリーと同じく、もう少し離れた位置から観戦をしていた。

「これが黒の騎士団のエース…紅蓮のパイロット」

シュナイゼルの勝利に疑いがないのか、チェスの一戦に興味がないのか……

アーニヤは、ライと向かい合うように立っている紅髪の女性にモバイル端末のカメラを向け独り言をつぶやいた。

「この前のあいつだろ…手配画像よりずっといいな。ああゆづのタイプなんだ」

アーニヤの呟いた声が聞こえたのであろう。

ジノは論点が幾許かずれた言葉を発する。

アーニヤとジノの声は、離れた位置にいる紅髪の女性には、2人の声は聞こえぬはずだが、

彼女は、自身に向けられている視線に気がついたのか2人の方向を一度見る。

視線を向けられたアーニヤは、特に気にせず、何のアクションも起



こさない。

しかし、向け返された視線にジノは、右手を上げウィンクをして返答する。

ウィンクをされた彼女は少し、困った顔をしてチェス盤に視線を戻した。

実際にカレンは、困っていたのだ。

こんなときにどんな顔をすればよいのか。

目の前には、今自分が会いたかったライがいる。

だけどそれは、敵として・・・

無表情で・・・

さらには、このチェスの一戦で自身の身がかけられていることも相俟って、自身の立場がよくわからなくなっていた。

ゼロにも考えがあることはわかっている。<sup>ルルーシュ</sup>

万が一負けたときの方策も講じてあるのだろう。

自身の立場がよくわからなくていいいく・・・

自身は、ゼロの護衛で今はチェスのアビーター。

同時に掛け金である・・・

そんな私は、どんな顔をしたらいいのか・・・

同じ立場のライは、なぜずっと無表情なのか・・・

チェス盤から目を離し、ライに向ける。

ライも、視線を感じたのか、カレンに視線を向ける。

ライの目は、サングラスで隠れているが今確実に目と目が会っているこの状態で・・・

なぜライは、笑ってくれないのか・・・

絶対にライを取り戻すと誓ったのはいいものの。

これからどうしたらよいか、わからなくなった。

そんなカレンの心の葛藤からカレンはライからチェス盤に視線を逃がす。

ライも同じくチェス盤に視線を移す。

かなりの時間がたっていたのだろう。

チェスの一戦はもう、終盤といってもよいくらい局面が進んでいる。

「強い殿下が押されている。」

シュナイゼルの副官であるカノンの声が漏れる。

だが、シュナイゼルは慌てもせずにこまを動かす。

「ほお、まさか切り返されるとは、」

その一手に対しゼロは賞賛を送る。

しかし、ゼロはわかっていたのだ、シュナイゼルがその一手を指すことを……

あわよくば、先ほどまでの戦況を維持したまま勝利したかったであろうがそううまくいかない。

その焦りから、ゼロであるルルーシュは、声を出して賞賛したのだ。

自身の焦りを隠すように、まるで予定調和であるかのように装って……

そしてルルーシュは、キングの駒を持つ。

「キングを……」

シュナイゼルから少し驚いた声が発せられる。

それもそのはずだ、そもそもチェスのキングは自身の周囲8マスにしか移動できない最弱といってもよい駒である。

その駒が移動するということは、攻めではなく、退避……つまりは逃げである。

「王から動かなくては部下は付いてこない。」

ゼロは、自身がキングを動かすことを、まるで現実に例えるかのよう  
に言い放つ。

「見識だね、ではこちらも・・・」

シュナイゼルもゼロの言葉に何か思うところがあったのか同様にキ  
ングを動かす。

その2人の一戦を見ていたギャラリーは、先ほどまでの静寂を打ち  
破り、それぞれが感嘆の声を上げる。

チエスの一戦としては異例中の異例・・・

互いのキングのみを動かしつつつけるのこ一戦。

戦況を正しく見れるものは多くない。

「これはどちらが勝ってるのかな？」

「互角ですわ。」

別室で見ていたオデュッセウスも神楽耶もその一部であった。

それもそのはずだ、彼らには、声が届いていない・・・

このキングを交互に動かしてく一手の張り合いはゼロの言葉からは  
じまったのだから。

「意地の張り合い鬨ぎ合い。」

チェスの一戦を同室で観戦していたロイド・アスプロンド伯爵の言葉が、現在の戦況を一番的確に捉えていた。

「どうです。これ以上は進めないでしょう・・・」

ゼロが、またキングをマス前へ進める。

その位置は、もうすでに終局の位置。

ゼロの黒のキング前にマス空けてシュナイゼルの白のキングが鎮座する。

現在は、白のシュナイゼルのターンである。

だがこれ以上前にキングを前に進めるならば、白のキングは黒のキングのチェックメイトとなる。

「うん。このままではスリーフォールドレプティションとなる。」

スリーフォールドレプティション・・・

チェスの一戦において同じ状況が3回現れ、それを指摘すると引き分けとなること。

いまだこの状況は1度しか起きていないが、このままチェスを続行すると、

彼ら二人の技量においてこの状況が複数回現れることを、シュナイ

ゼルは読みきる。

「私も本意ではないが引き分けかな・・・」

シュナイゼルの提案にゼロは乗ろうとするがシュナイゼルは「いいや...」と白のキングを持つ。

「白のキングを甘く見てはいけないなあ。」

「まさか?!?!」

シュナイゼルの言葉に逸早く理解したのは対戦者であるゼロだった。

「チェックメイト」

シュナイゼルは、キングを進め、自身からチェックメイトの形は打ち込んだ。

通常であれば、この状態で試合は終了だ。

だがこれは、余興としての一戦、決着は最後までつけることを望んだのだらう。

ギャラリーのすべてが、ざわめきながらも、

シュナイゼルの自身への「チェックメイト」宣言をゼロが受けるかどうかを見守っている。

「何ですか？これは？拾えと言われるのですか。勝利を...」

ルルーシュは動揺していた。

勝てる!!

しかし、それは与えられた勝利でだ。

ここで、この勝利を受けるといふことは、屈服すること同義・・・

そう感じたのであろう・・・

ルルーシュは、黒のキングを右後方のマスへ移動させた。

「皇帝陛下であれば、迷わず取っただろうね・・・」

ゼロの一手にシュナイゼルは仮定の話を持ち出す。

この場には居合わせていない神聖ブリタニア帝国の現皇帝シャルル・ジ・ブリタニアを・・・

それが、シュナイゼル自身に対し言った言葉なのか、ゼロに言った言葉なのかはわからない。

「な?!」

ゼロはその言葉に過敏に反応する。

「君がどうゆう人間か、少しわかったきがするよ。」

シュナイゼルの一手は言わば、池に投げ込んだ小石だ。

ゼロという池は、どのくらいの深さであるのか。

どのくらいの大きさであるのか。

どのような形をしているのか。

それを小石を投げ込み波紋がどのように広がるかを見ていたのだ。

チェスの指し合いにひと時の時間が空いた。

シュナイゼルが新たに一手を指そうとしたとき、そこに女性の声が響いた。

「ゼロ！！ユーフェミア様の敵！！」

ニーナ・アインシュタイン・・・

元アツシュフォード学園の生徒会役員で現在は、シュナイゼル直属の研究チーム『インヴォーク』のチーフである。

なぜか、彼女は食器であるナイフを逆手に持ち頭上に掲げゼロに襲い掛かる。

「辞めるんだニーナ！！」

だがそれは、スザクにとめられる。だが、

「どうして邪魔するのよ、スザクがユーフェミア様の騎士だったんでしょー！」



スザクの行動は正しかった。

警護を担当しているものが、錯乱している人物を取り押さえるのはいたって正常だ。

それがたとえ、自身の陣営で有ろうが、なかるうが。

現に、シュナイゼルはライの指示により、席より離脱し副官であるカノンの背後におり守られている。

さらに、カノンは懐に手を入れいつでも銃を取れる体制をとっている。

だが、ニーナの言葉にスザクは揺らいでしまった。

なぜ僕は、ユフィの敵であるゼロを守るような行動をとっているのだろう。

倒すべき相手なのになぜ守っているのだろう。

「あなたはやっぱりイレブンなのよ!!」

ニーナは、スザクの拘束を振り切り、スザクに対し侮蔑の言葉を吐き捨てた。

それはラウンズであるスザクに向けられたその言葉は、平時であればとがめられてもおかしくはない。

スザクの静止が完全になくなったニーナは、再びナイフを掲げゼロに迫るが、また別の人物にさえぎられる。

ライである。

「何で?!」

スザクに引き続きライに拘束されたニーナは疑問の声を出す。

ライはニーナに対し、「落ち着け」と声をかけるが、帰ってるのは、

「あなたが守るのはブリタニアでしょ!!何でゼロなんか守るのよ。」

正論では有るが、この場において、ライたちは、ゼロを守っているのではなく。

守るべき対象に危害を加える可能性を抑えているだけに過ぎない。

「そのとおりです。あなたは現在ブリタニアの代表であるシュナイゼル殿下に危害を加える可能性がある。」

そう、ライにいわれて、一気に大人しくなり、ライから数歩下がる。

「何で、何でよ、何で私が・・・」

「ニーナ!」

錯乱しているニーナに対し、かつての学友であるカレン声をかける。

「カレン・・・あなただって半分ブリタニアの血を引いてるくせに

・・・」

錯乱しているニーナには、今現在、自身が何を言っているのかすべてを把握できていないのだろう。

いっている内容は、『くせに…』とカレンを侮蔑している。

「違う、私は日本人よ。」

しかし、カレンは自身に誇りを持って答えた自身は日本人であると。

「日本人……イレブンでしょ……イレブンのくせに友達の顔をして……」

返してよユーフェミア様を……必要だったのに……私の女神様……」

自身の友達であったはずのカレンが自身を日本人であることを主張されさらに混乱した。

話していることは支離滅裂である。

エリア11は、行政特区日本を作ったのであるから、法律、カレンたちは日本人を名乗ることが可能なのだ。

『友達の顔をして』というが、それは、ニーナがそう見えたということ、ニーナ自身がカレンのことを友達であると認識している。

さらには、失われたはずの命を返せという。

奪ったのはカレンではなくゼロであるのに……

自身の主張をすべて吐き出し、冷静さがもどつときたのである。ニーナは崩れるように倒れる。

「ニーナ!」

それを見たカレンは彼女を支えられるように走り出す。間に合わない。

だが彼女を支えるものが居た、ライである。

ライは、ニーナを支えながら彼女を床に座らせる。

「ゼロが・・・殺したのに!」

いまだにニーナは、自身の怒りをなきながら吐き出している。

冷静さを取り戻しつつある現在も・・・

それほど、彼女にとってユーフェミアの存在が大きかったことを意味している。

「ニーナ...ごめんなさい...でも...」

カレンもその気持ちを感じ取ったが、彼女になんて言葉をかけてよいか変わらない。

自分自身も、もう止まれないところまで来てしまっているのだから。

「すまなかったねゼロ...余興はここまでにしよう。」

それと確認するが明日の参列はご遠慮願いたい。

次はチエスなどでは済まないよ。」

シュナイゼルがこの場の収集を行う。

騒ぎを起こしたのが自身の陣営であることを謝罪する。

そしてさらに、後日行われる挙式への参列を拒否する。

参列した場合の対応を匂わせて・・・

ゼロは答えない。

仮面の下で何を考えているのかわからないが、じっとその場に立っていた。

25話・TURN09-5(後書き)

まだ、読んでくれる人が数人いてくれたようでほっとしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9042p/>

---

コードギアス LOST MEMORYS

2011年12月11日18時48分発行